500
20

36.12.25

コ1012
500-20

ツルゲーニフ全集

第一卷

煙
不幸な女
曠野のリヤ
よけい者の日記
ブーニンとパブリン

大正
11. 5. 8
内交

冬夏社藏版

◇目次◇

ツルゲーニエフ全集第三卷

煙……（　）
不幸な女……（　）
曠野のリヤ……（　）
よけい者の日記……（　）
ブーニンとパブリン……（　）

煙

妹尾紹夫譯

千八百六十二年八月十日の午後四時、バーデンバーデンの有名な對話館の前には人の群が出盛つてゐた。天氣は清朗で、あたりの總のもの――綠の木立や、華やかな町の郵く家々や、うね〳〵波打つ山脈や――總てのものが快い日光を浴びて、長閑に樂しみ、總てのものが一種の打任せた安心した悅びに微笑してゐる樣に見え、その嬉しさうな幽かな微笑は、街を行く老人や、青年や、醜い人や、美しい人の顏の上にも同じ樣に漂つてゐる樣に思はれた。胡散くさい巴里の女の墨やお白粉を塗つた顏でさへ、景氣のいゝあたりの印象を破ることは出來ないで、其のけば〳〵しい色彩の紐や、羽や、帽子と兩夜に光る金や鋼鐵などは、春の小鳥の虹色の羽の羽ばたきを聯想させるのであつた。然し到る處で聞かれる乾いたやうな喉音の意味のさつぱり解らぬ佛蘭西語の罵る聲は小鳥の唄に及びもしなければ、較べることさへ出來なかつた。

けれども總ての事は何時もの通りに運んで行く。亭の中の管絃樂は第一に「トラヴィアタ」の中から拔いた雜曲、次にストラウスのウォルツ、次に「彼女に告げよ、」と云ふ露西亞の唄を氣の利いた指揮者が樂器にのせた。賭博場では綠色の卓子を圍んで、何時ものお顔染の顏が、例の如き鈍い、慾深

い、半分馬鹿、半分興奮したやうな貧慾な面つきをして集まつてゐたが、熱心に噂傳さへすれば誰でも斯んな面附にはなるもので、貴族的な顔でも此の例には漏れないのだ。豐かな、馬鹿に洒落れた風彩をした、タムボフから來た露西亞の地主は、眼を剝いて卓子に凭れ、焦々した手つきで「rien ne va plus」と云ふ毎に球盤の四隅に汗だらけの手で金貨を置いて、見張人の冷たい微笑にも頓着しないで、勝てるやうな場合でも勝利の望みを無茶苦茶に毀してゐる。これは其晩やはり其處に來てゐたカコー公爵の無頓着な濟し方とよい對照をしてゐた。このカコー公爵と云ふのは反對黨の貴族の有名な首領の一人で、且て巴里にゐた時、マチルド公爵夫人の客室で、皇帝の前をもかまはずに、「madame, la principe de la propaété est profondément ébranlé en Russie.」と云つたほどの人である。露西亞の木の傍、——l'arbre Russe の傍には懷かしい私たちの同國の男女が思ひ〳〵に集まつてゐた。そして應揚な如才ない洗練された物越しで互に近づき合つては、如何にも現代の教養の頂上に立つ人の樣な態度で、品位もあればしとやかでもある挨拶を交してゐた。けれども彼等が一度集まつて一緒に座ると、何を話すべきか途方に暮れて、つまらぬ言葉を交したり、または穢ならしい小さい足に猶太人の靴を穿いて、賤しげな小さい顔に見すぼらしい鬚を少しばかり生やした、元は新聞記者をしてゐたと云ふ佛蘭西の幇間の樣な男の無遠慮な、微の生えた樣な駄洒落を聞くのに滿足してゐなければならなかつ

た。彼が古い Cavivari や Tintamarre の滑稽雜誌から面白さうな事を引出して長々と話して取かせると、露西亞の貴婦人達はそれを聞きながら外國の頓智の優れてゐる事や、自分達の面白い事を云ふ能力のない事を無理にも認めさせられたやうに、滿足らしく笑ひ崩れるのであつた。其處には社會の殆ど總ての「美しい花」や、「總ての上流の人達や流行界の鏡」が集まつてゐた。無比のディレッタントで音樂が上手で、ピアノで素晴らしく上手に唄を歌ふが、出鱈目に樂鍵を押さへてゐなければ二つの音符さへ正確に奏けないで、まるで貧しいジプシーの唄手と巴里の理髮屋を一緒にしたやうな唄をうたふX伯爵も其處にゐた。其處にはまた文學だらうが、政治だらうが、演說だらうが、骨牌だらうが、何でも行ける面白いQ男爵もゐた。宗教と人民の味方で、酒が專賣だつた時代にベラドンナと云ふベクテリアを火酒に混ぜて醱酵さして大金を儲けたと云ふY公爵もゐた。氣が利いて物事を旨く支配したり宥めたりすることは上手でも、自分では何の爲す事もなく、自分で自分の處置に窮してゐると云ふO、O將軍もゐた。よく肥えた愉快な人でありながら自分では仕樣のないほど體が弱くて頓智があると思つてゐて、その癖頑强なことは水牛の樣で、鈍いことは柱の樣なR、Rもゐたが、この人はウオロチンスキー伯爵夫人や「現代の大將」時代、即ち四十年代の酒落者の言ひ傳へを今に殘してゐる唯一人の人なのだ。此の人はまた踵の先に乘かゝつて歩く奇妙な足つきや、le coin de la

pae（この言葉は露西亞語に譯すことすら出來ない）や、不自然な身動きや、眠さうな應揚な表情や、凝と怒つたやうな顔つきや、他人が話してゐる時に欠呻をする習慣や、自分の指の爪をじろ〳〵眺めたり、鼻でせゝ笑つたり、急に帽子を後から前に冠り通して眉を隠したり、其他いろ〳〵な癖を持つてゐた。其處にはまた官吏や、外交官や、歐羅巴中に知られた人々や、ゴールデンブルは羅馬法王の下したものだと考へたり、英國の貧民稅は貧民から取るものだと考へてゐる悧巧な賢い人達もゐた。「椿姫」の信者で熱烈な血は持ちながらも沈默を守つて、頭髪を後ろに分け、立派な頬髯を生やし、本當の倫敦仕立服を着て何うやら未は前に話した佛蘭西の有名な幇間の樣に俗惡な人になりさうに思はれる人達もゐた。けれども左樣も云はれまい！　私たちの國の人は何うも景氣が惡るくて、流行界や貴族社會の中心人物のS伯爵夫人なんかは「足長蜂の女王」「頭巾を冠つたメドウーサ」と云はれる程ロが惡い人なのだが、そのS伯爵夫人でさへ、佛蘭西の幇間が妻を隠すと、伊太利人や、モルダヴィア人や、亞米利加の牧師や、外國の公使館の賢さうな秘書官や、どろ〳〵する程澤山集まつてゐる女らしい、然しどく慎深い顔つきをした獨逸人などに話をしかけて行くより他ないのだ。パペット公爵夫人も此の伯爵夫人の例に漏れなかつた。ショパンは此公爵夫人の腕に抱かれて死んだのださうな。（ショパンが死ぬる時に彼を抱いてゐたと云はれてゐる女は歐羅巴に澤山ある）其處にはまたアンネット

公爵夫人もゐた。この夫人の微妙な香水の香の中に甘鑑の匂ひが漂つて來る樣に、素朴な田舍の洗濯女が急に自分の妻を覗いて見はしないかと何時も氣を揉んでゐる人であつた。それからまたパシエット公爵夫人もゐたが、此の人にも不幸な話があるのだ。此の人の良夫と云ふのは可なり良い位置についてゐたのだが、何うした譯か市長を引つぱたいた上に二萬留の公金を盜んだと云ふ評判がたつてゐる。何時もにこ〳〵したジジ公爵夫人も、何時も泣面をしたゾゾ公爵夫人も來てゐた。是れらの人達は同國人を避けるやうにして隨分酷く取扱つてゐた。私たちも皆んなから離れて、此の美しい貴婦人の群を後ろにし、彼等が高價で無趣味な衣裝を着飾つて其の傍に座る有名な「露西亞の方」を去つて彼方に行かう。彼等の手持ちぶさたを和らげることを神も願はくば許したまへ！

二

「露西亞の木」から數歩はなれて、ウエーベルのカッフエーの前に小さい卓子があつて、其處に中背で、痩せた、色の淺黑い、男らしい快活な顔をした三十ばかりの樣子のいゝ男が一人、腰を掛けてゐた。兩手は杖の上にのせて、上半身をやゝ前に屈め、誰も自分を見もしなければ、注意も拂はないとでも思つてゐるやうな平氣な取澄ました顔をしてゐた。大きい印象的な黄色がゝつた蒼色の眼で周圍

をゆる〳〵眺めたり、時々眩しい日光に眼を細めたり、自分の前を過ぎ行く珍らしい風彩の人の姿に凝と眼をすえては、其美しい口髭と、唇と、飛出た短かい頤を動かしながら微かな小供らしい微笑を漏らしたりしてゐた。彼は獨逸風に仕立てた、だぶ〳〵の上衣を着て、柔かい灰色の帽子に高い襟を半分隠して、一瞥したところ世間によくある正直な、悧巧な、と云ふより寧ろ自信の強い青年の樣に見受けられた。彼は長い勞働の後で靜に休んでゐる樣にも見え、自分の思想が遙か遠い處に飛び離れて、現在周圍を取かこむものとは全く違つた世界に遊んでゐる爲に、あたりの光景から平易な悅びを見出してゐる樣にも見えた。彼は露西亞人で、名はグリゴリイ・ミハロウイッチ・リトウイノフと云つた。

私たちは此の人の近づきにならねばならぬから、餘り面白くも面倒でもない彼の經歷を一口述べておかう。

彼は正直な平民の血をひいた退職官吏の息子である。父は大低の人が考へる樣に都會で教育されたのではなく、田舍で教育された人であつた。けれども母の方は貴族の出で、政府の學校で教育を受けた人の好い、大變熱情のある、と云つて性格は缺けてゐない女であつた。良人より二十歲も若いのだが、出來るだけ良人を改善してつまらない官吏から地主の生活に移らせ、良人の荒々しい頑固な性格を軟

らかい洗練されたものにした。彼は妻のお蔭で小さつぱりと服も着る樣になり、身だしなみも良くなり、自分で書物を手にする事は無いにしても、兎に角、學者や學問に對する尊敬を持つ樣になり、亂暴な言葉も慎しんで、何んな場合にも自分の品位を下げないやうにつとめだした。そして歩くのにさへ靜かな足つきで歩き、話をするにも强ひて低い聲で高尙な事柄を話すやうと骨を折つた。「あゝ！引つぱたいて遣るより他ないのだ！」と心では時々考へても、口へ出しては「さうですね……全く大問題ですね、」と云ふのが積の山だつた。リトウイノフの母は家庭を歐羅巴風にして、召使の者に向つてさへ「お前」と呼ばずに「あなた」と呼び、食卓では誰に對しても眠くなる程飲食することを許さなかつた。彼女の地所は彼女も良夫も全々世話をやくことが出來ないで、長い間荒れ果てるにまかせてあつたが、其の中にはいろ〳〵役に立つ附屬物や森や湖があつた。其處には一つの工場が建つてゐたこともあつたが、その工場と云ふのは熱心ではあるが無鐵砲な人によりて建てられ、賢い商人の手によりて榮え、正直な獨逸の支配人の監督に全く凋落してしまつた。母は財産を消費したり、借金をしたりしさへせねばいゝと思つてゐた。不幸にも彼女は體が弱かつたので息子がモスコフの大學に這入つた年に肺病で死んでしまつた。彼は大學を卒業しないで田舍の家に歸つたのだが。卒業しないで歸つた理由は後で話さう。彼は田舍で何もせず、何の束縛もなく、友人も持たずに暫らくの間を過

でした。田舎の名望家としてのいろ〳〵な面倒な仕事が嫌だつたので、歐羅巴の「外住主義」の惡風にも染まず「皮膚に一番近いのはルバーシュカだ」と云ふ傳來の考は持つてゐたのだが、千八百五十五年に軍隊に這入つて、クリミアで六ケ月の間味方の者も見えない死海の岸の泥小屋の中で窒扶斯に罹つて死にかけたこともあつた。それから彼は多少の不快を忍びつゝ貴族議會に務めた後また田舎に歸つた。其の中農業の面白さも感ずるやうになつた。そして母が殘した土地が體の弱い年の行つた父の行きとどかぬ監督のために、當然取れる收獲の十分の一も取れないのを見て、經驗をつんだ馴れた人が監督しさへすれば、充分な財源となるに違ひないと思つた。けれどもまた同時に彼はその經驗と熟練は自分も持つてゐないことに氣がついた――それで農業と工藝を研究するために外國に行つた。……そして根本から研究しようとしたのだ。彼はメクレムブルヒと、シレシアとカルルスルーヘとに四ケ年以上を過ごし、白耳義や英吉利にも行つてみた。そして一生懸命に勉强して、いろ〳〵な知識を得た。無論それは易いことではなかつた。けれども彼は終りまで其の困難に耐えて、今や自分と、自分の未來と、隣人に對する奉仕の念と、國家に對する奉仕の念に滿たされて、自分の家に歸らうとしてゐるのである。農奴解放や、土地の分配や、請け戻しの條件や……つまり新しい制度の爲にすつかり困り果てた彼の父は手紙ごとに早く歸れと訴へるやうに哀願して來た。けれども何故彼はペーデンに來たのであらう？

彼は從妹で許嫁のタチアーナ・ペトローウナ・シエストフが着くのを毎日待つ爲にペーデンに來てゐるのだ。彼はその女を子供の時から知つてゐた。そして春と夏を彼女がその伯母と共に住んでゐるドレスデンで過ごしたこともあつた。彼はこの親戚の若い女に對して心からの愛と深い尊敬を感じてゐた。そして長い間の懶い研究を濟ましてから今や新しい野に出て、本當の、自由な仕事を始めようとする時に當つて、心から愛する女でもあり、仲間でも友達でもある彼女の生活を彼の生活と――幸福と悲しみ、勞働と休息、英國人の云ふ「善いこと惡いこと」に對して、二つに結びつけようと申込んだのだ。彼女の方でもそれに同意した。それで彼は自分の書物や、筆記や、荷物の殘してあるカルヽスルーヘに歸つたのだが……何うして彼はペーデンに逗留してゐるのだ？　と讀者はまた訊ねるだらう。

彼がペーデンに逗留してゐる譯はかうなんだ。タチアーナの伯母でタチアーナを育てたカビトリーナ・マルコーウナ・シエストフは五十五歳の未婚の婦人で極く人の好い、正直な、何處か變つた處のある自由思想家で、犧牲と克己の念で燃えてゐる esprit で（此の人は自分ではストラウスを讀みながら姪にはそれを隱してゐた）民主々義者で、貴族や流行界の手ひどい敵と云ふてもいゝやうな人であつたから、ペーデンの樣な貴族的な社交界を一度は是非覗いて見たいと云ふ慾望を何うしても押さ

へることが出來なかつたのだ。……カピトリーナ・マルコーウナは、下袴も用ひず、白髪も丸く刈つて、はゐたが、内々贅澤な華びやかなもの丶魅力を感じてゐたのは事實である。それでゐて、贅澤な物を買倒したり、輕蔑したりするのが大好きであつた。此の好人物の老婦人を滿足させるのは、誰が拒み得よう？　リトウイノフは靜かに何の氣もなく取濟まして自分の周圍を自信のある眼付で眺めてゐた。それと云ふのも彼の今後の生活は彼の前に鮮やかに描き出され、爲すべき事も定まつてゐて、彼はその爲すべき事に誇りを感じ、やがては自分の手で仕上げらるべきものとして、其の爲すべき事を悦んで待つてゐたからである。

三

「おい！　おい！　此處にゐたのか！」と唐突に金切聲が耳の直ぐ傍で聞こえて、彼の肩を肥つた手がぽんと叩いた。顏を上げて見ると莫斯科時代の彼の懇かな友達の中の一人のバムバエフだ。此の男は好人物なのだが何の役にも立たぬ男で、最う相當な年輩であつた。平たい鼻と、茹つたやうな軟らかい頬をして、油ぎつた髪を振り亂して、前屈みになつたよく肥えた男である。此のロスチスラブ・バムバエフは、何時も定りきつて金が無い癖に、何時も何やらほく〳〵頻りに悦びながら、面白さう

に、あてどもなく、永久に耐え忍ぶ母の地上を何時も漂浪ひ歩いてゐるのであつた。

「やあ、妙な處で逢つたねえ！」と云つて此の男は窪んだ眼を見開らいて、不格好なもじや〳〵生えた口髭のある唇を開けた、「あゝ、バーデン！　世間の人が皆んな此處に油蟲の樣に集まつて來るね！君は何うして此處に來たんだ、グリーシヤ！」

バムバエフは何んな人に逢つても『クリスチヤンネイム』で話しかける人であつた。

「僕は三日前に此處に來た。」

「何處から？」

「何うして其んなことを訊ねるんだ？」

「何うしてつて？　待ちたまへ、グリーシヤ。君は此處に何んな人が入り込んでゐるか知らないのだらう！　グバリョーフが自身で來てゐるのだよ！　此處に！　昨日ハイデルベルヒから遣つて來たんだ。無論君はあの人を知つてゐるだらうね？」

「聞いたことはあるよ。」

「それだけか？　おや〳〵！　今直ぐ君をあの人の處に連れて行つて遣らう。あんな人を知らないんて！　時に此の人はウオロシロフと云つてね……待てよ、グリーシヤ、君は此の人も知らないのだ

らう？　君達二人をお互に紹介してやらう。どちらも學者だ！　此の人は實際不死鳥なんだからね！
さあ、二人で接吻したまへ！」
斯う云ひながらバムバエフは振向いて傍に佇んでゐる生々した薔薇色の頬をした。それで何處か年に似ず慄み深さうな樣子のいゝ青年を見た。リトウイノフは身を起こして立上つたが、無論接吻はしないで此の不死鳥に向つて短かい言葉で慌しい挨拶をした。其の男の方でも、つんとした身振から考へて此の思ひがけない紹介を餘り悅んでゐるとは思へなかつた。
「この人のことを僕は不死鳥と云つたが、それに違ひないのだ、」バムバエフは言葉を續けて、「ペテルブルグの士官學校に行つて、あすこの金の名札に誰の名が一番先に書いてあるか見たまへ。ウオロシロフ・セミオン・ヤコフレウイツチの名だ！　けれども、ブバリヨーフ・グバリヨーフだ、君、偉いのは！　僕はあの人々は心から感心してゐるんだ！　感心してゐるのは僕だけぢやない、誰でも皆んなあの人々は頭を下げてゐるんだ？　あゝ！　そして、あの人が書いてゐること、おゝ――おゝ――おゝ！……」
「何を書いてゐるんだ？」とリトウイノフが訊ねると、
「いろ〳〵なことさ、君、バックルを知つてゐるだらう、あの型で書いてゐるんだから……あれより

最つと突込んでゐるよ、最つと突込んでゐるよ……總てのことが其の中に解決され、闡明されてゐるのだからね。」
「で君は其れを讀んだのかい？」
「いや、讀みはしない、世間に云ひふらされないやうにまだ秘密になつてゐるんだ。然しグバリヨーフには何んなことでも、何んなことでも期待することが出來るよ！　さう本當に！」バムバエフは溜息をして兩手を握り合はして、「若し露西亞にあんなインテリゲンチャが最う二三人あつたらねえ、あゝ、何んなことが見られるか解つたもんぢやない？　是れだけは云つて置くかね、グリーシャ、此頃君が何を考つてゐるのか知らないが……また僕は君の仕事さへ知らないのだが……君の信念が何うであるかに拘らず……それも僕は知らないのだが……あの人からは、グバリヨーフからは、兎に角何か敎へられることがあるよ。不幸にしてあの人は長くは此處にゐないのだが、我々はあの人から得られるだけのものを得なくちやならない。行かう、あの人の處へ、あの人の處へ！」
通りすがりの赤い髮をして淺い帽子に青い紐を飾つたお洒落が振向いて、眼鏡越しに冷笑を浮べながらバムバエフに眼を呉れた。リトウイノフは焦々した氣分になつて口を開いた。
「何うして其んな大聲を出すんだ？　人は君が獵に行つて犬でも呼んでゐるのかと思ふよ！　僕はま

だ飯も食はないんだ。」

「ちや、斯うしよう！　是れから直ぐウェーベルに行かう……三人で……面白い！　君は僕の分を拂うだけの金は持つてゐるだらう？」と小聲で云ひ足した。

「持つてゐるよ。然し、實際だか……」

「そんなことは止めたまへ、乾度君は後で僕にお禮を云ふよ、またあの人も悦ぶよ。おや〳〵！」パムバエフはちよつと言葉を切つて、「今やつてゐるのは、エルナニの終曲ぢやないか。旨いねえ！……Ah som……no Carlo……然し僕も妙な男だ！　直ぐ涙が出て來る。さあ、セミオン・ヤコウレヴイッチ！　ウオロシロフ！　出かけよう、え？」

今まで凝とおとなしく立つてゐたウオロシロフは相變らず腐揚に酒まして、眼を伏せて意味ありげに肩を聳めて、口の内で何やら呟いた……けれども彼は逆らひもしなかつた。リトウイノフは「まあ行つてもいゝだらう、何うせ時間は澤山あるのだから、」と思つた。パムバエフは彼の腕を取つて珈琲店の方に行きかけたが、ちよつとジョッケイ倶樂部で評判の花賣娘を見て招いた。花束を買ひ度ひと思つたのだ。けれども貴族的な其の娘は身動きもしなかつた。また實際、手套もはめない見すぼらしい木綿の衣に縞の襟飾を卷いて、踵のちびた靴を穿いた、巴里でも見たことのない樣な紳士の傍に何

うして此の娘が近づかう？　今度はウオロシロフが娘を手招きした。すると彼には答へた。彼は籠の中から菫の花束を拔取つて銀貨を一つ投げて遣つた。彼は氣前の好い處を見せて娘を驚かして遣らうと思つたのだが、娘は睫毛一本動かしもしないばかりか、彼が其處を去ると口を窄めて輕蔑するやうな眼付で見送つた。ウオロシロフは氣の利いた風をしてゐるのみでなく、寧ろ洒落れた風をしてゐると云つてもいゝのだが、此の眼の肥えた巴里の娘は、少年時代からの軍隊教練の癖を殘した彼の物ごしや足つきの中に、生粹の巴里の子でないと云ふことを見て取つたので。

彼等はウェーベルの一番大きい食堂に腰を卸して食事を命じた後で、いろ〳〵な話をはじめた。パンバエフは熱のある大聲で頻にグバリョーフの選びことを辯じ立てゝゐたが、やがて饒舌るのを止めて烈しい息づかひしながら音を立て、むしやぶつたり、杯から杯と盛に飲みほしたりした。ウオロシロフは氣が進まないらしく僅かしか飲んだり食つたりしなかつたが、リトウイノフに何んな事に趣味をお持ちですかと訊ねた後自分の說を述べはじめて……尤もそれは自分の興味を持つてものと云ふよりは一般の問題に就いてゞはあつたが……彼は急に熱を持つて來て放たれた馬の樣に勢よく大膽にきつぱりした言葉つきで一句一句に力を入れ、自信のある候補生が最後の口頭試驗にでも臨むやうな素晴まじい元氣と、大袈裟な身振で話した。誰も遮ぎる者がないので次に益々雄辯に、益々昂奮して、さ

ながら論文か講義でも朗讀してゐるやうに思はれた。新しい中でも新しい科學の權威の名前……それから彼等の生れた時日や死んだ時日……最近に出版された小冊子、名前、名前、名前……是れらのものが彼の舌の先から雨の樣にほとばしり出て、自分でも乘氣になつて調子づき、兩眼は熱に輝いて來た。ウオロシロフは古いものは何でもかにでも無闇に輕蔑して最も進歩した科學の最も新しい教養にのみ價値を認め、前後の關係も考へないで、ザウエルベンゲル博士とやら云ふ人のペンシルヴアニア監獄に關する論文や、波羅門教の經典や印度古史に關する昨日の亞細亞教報（彼は英語は知らないのだが Journal を英吉利風を發音した）の論文をなど引用するのが彼の眞實の悦びと幸福のやうに見えた。リトウイノフは凝と彼の言葉に耳を傾けてゐたが、彼の特別に研究してゐることが何であるかは、歴史上にケルト民族が振つた擴力に就いて語つてゐるかと思ふと、直ぐ古代のことに話を移して、エジュットの大理石を批評したり、フイデイアスや、オネタスより早く現れた彫刻家のことを熱心に論じ立て、オネタスをとう〳〵ジョナサンにしてしまつて、彼の議論も其の爲に半分聖書臭ひ、半分亞米利加が臭ひものになつてしまつた。それから彼は急に一足飛びに法政經濟の問題に移つて、バステイアを馬鹿か、でなければ「アダム・スミス其他の理學者の樣につまらない」低能だとの〻しつた。

「理學者」パムバエフが彼の言葉を受けて呟いた……「貴族？」話の中にウオロシロフはパムバエフの

顏に當惑の色があることや、マコーレーは最う近代の歴史科學に追越された、時代遲れの學者だと云ふことを取り止めもなく話し、グナイストのことなどは話す價値もないと云つて彼が肩を搖すると、パムバエフも同じやうに肩を搖すつた。「珈琲店の見知らぬ人達の前で何の紹介もなしに斯んな話を」……から心の中で思ひながらリトウイノフは此の新しい知己の美しい髮や、澄んだ眼や。白い齒並を見入るのであつた。（其の砂糖の樣に白くて大きい齒と大袈裟な身振をした手とは特に彼を惱ました。）

「そしてまた此の人はちつとも笑はない。だのに質の好い全々無經驗な青年に見える。」黙てウオロシロフは話を止めかけ、若い鷄の樣に元氣のいゝよく響く鋭い聲をやゝ柔らげた。すると直ぐさまパムバエフが其の後を受けて詩を歌つてまた泣き出しさうになつた。その爲に隣の卓子を圍む英國の一家族は迷惑をし、また鬘をつけた古代の赤ん坊の樣な風をした者と一緒に食事をしてゐた佛蘭西の洒落れた二人の娘は、くす〳〵と忍び笑をしてゐた。給仕が勘定書を持つて來ると、二人でそれを拂つた。

パムバエフはやをら椅子から重さうに身を起こしながら、「やあ、これから一杯の珈琲と大急ぎの行進か、あすこに露西亞の女がゐるよ、」と彼は戸口に立止まつて愉快さうにウオロシロフとリトウイノフに向つて軟らかい赤い手をあげて指差した……「あの女を何う思うね？……」

「露西亞人だ、本當に、」とトリトウイノフも思つた。また元の思ひつめた表情に歸つたウオロシロフ

は懶惰かさうに微笑して踵で輕く床を叩いた。

五分間とたゝない中に彼等三人はステパン・ニコライッチ・グバリョーフの泊つてゐる旅館の階段を昇つてゐた。……と短い黑い面布のついた帽子を冠つた背の高い痩型の女がいそ〳〵と向ふから其の階段を降りて來たが、ちらとリトウイノフを見るや否や向き直つて吃驚したやうに立止まつた。女の顏は忽ち赧くなつたがまた直ぐ深いレイスの面布の下で眞つ蒼に變つた。リトウイノフは女に氣が附かなかつた。女は廣い階段を前より足早やにそゝくさと走り降りた。

四

「グリゴリー・リトウイノフ、眞の露西亞人の心を持つた人、紹介します。」と云つてバムバエフはリトウイノフを田舍の紳士然たる背の低い人の前に導いた。其の男は襟の釦もかけず、短かい短衣に灰色の平常着の袴を穿いて足にスリッパを引つかけて、明るい、よく家具の裝置してある部屋の中央に突つ立つてゐた。バムバエフはリトウイノフに向いて「そして此人が例の人なんだ、解つたぞらう？グバリョーフだよ。」

「リトウイノフは好奇心に輝く眼を据えて「例の人」を見入つた。最初には彼は何うしても其の人から變つた點を見出すことが出來なかつた。彼は懶いやうな、額の廣い、眼の大きい、唇の厚い、髭の多い、頸の太い、眼の座つた、横に屈んだやうな、尊敬すべき紳士を見た。其の紳士は、作り笑をしながら「うゝん……あゝ……非常に嬉しく存じます……」と云つて自分の顏をちよつと撫でゝすぐリトウイノフに後ろを向けて、絨壇の上をつか〳〵と二三歩あるいた。其の歩き方は奇妙な、引摺るやうな靜かな歩き方で、さながら人目のない處に窃と逃げ込まうとするやうにも見えた。グバリョーフは始終長い硬い爪で髯をひねくりまはしつゝ、部屋の内を彼方此方と歩き廻るのが好だつた。部屋の内にはグバリョーフの他に五十ばかりの女が一人ゐたが、其の女は穢ならしい絹物を身に纏ふて、木檪の樣に黃な神經質らしい顏をして、上唇の上には薄つすらと黑い髭を生やし、まるで頭から飛出しさうに素早く動く眼を持つてゐた。其の他に肩幅の廣い一人の男が、隅の方に身を屈めて腰かけてゐた。

グバリョーフはリトウイノフには紹介せんでも宜いと思つてゐるらしく其の女の方に向いて、「それで、マトローナ・セミオノウナ、先つきあなたは、何んなことをお話してゐらしやつたのでしたかねえ？」と訊ねた。

其の女は（名はマトローナ・セミオノウナ・スハンチコフ……後家で、子がなくて、貧乏で、二年

間國から國へと漂浪つてゐた。妙に昂奮した調子で口を開いた。

「それから公爵の前に其の人が出て斯う云つたのです。「閣下、あなたのやうなお役目と、あなたのやうな位置にある方々に取つて、私の運命を輕くして下さるに何の位の骨が折れませう？　あなたは私の考への淸いことをお褒めになるより他ありませんです。それにまた今の時代に其の人が抱く思想によつて其の人を罰することが出來るでせうか？」と云つたのです。此の敎養も位置もある公爵が其の時何と答へたと思ひます？」

「えゝ、何と答へました？」とグバリョーフは卷煙草に火を點けながら、考へ深さうな顏附をして訊ねた。

女は身を起こして骨っぽい右手を突出して第一の指だけ擴げた。

「公爵は自分の召使を呼んで、「此の男の上衣を直ぐ脫がしてお前の物にしろ。此の上衣は己れがお前に遣るのだ！」と云つたのです。」

「で其の召使は上衣を貰つたのですか？」とパムパエフが兩手を投出して訊ねた。

「貰つて自分の物にしたのです。これがあの政府の代表者で特別の權力のある有名な金持の貴族のパルノウロフ公爵のしたことなんですよ。ですから、此の他に何んなことを爲さるか、解りやしませんわ！」

弱々しいスハンチコフ夫人の全身は忿怒にぶる〳〵震えて、顏には痙攣が走り、痩せ衰えた胸はコルセットの下で烈しく波打ち、兩眼は云ふまでもなく頭から飛び出しさうになつてゐた。此の眼は何んな話しの最中でも飛び出しさうになつてゐるのだ。

「何たる侮辱だ、何たる侮辱だ！」パムパエフが叫んだ。「何んなに酷く罰しても飽きたりない！」

「うん……うゝん……頭の先からどん底まで腐つてゐるのだ、」とグバリョーフは云つたものゝ、別に聲の調子を上げるでもなかつた。「其んな場合には罰よりも……必要なのは……他の標準なんです。」

「ですが、そりや本當なんですか？」とリトウイノフが訊ねた。

「本當ですかつて？」とスハンチコフ夫人が言葉を受けて、「まあ、是れを疑ふなんてことは夢にも出來ないことてす……ゆ——ゆ——ゆ——夢にも出來ないことです。」一生懸命になつて話すので體がびり〳〵動く。「妾は是れを極く確かな人から聞いたのです。あなたも、あの人は知つてゐますわねえ——エリストラトフ・カピトンを。あの人が此の忌まゝしい事實を現在見た人から聞いたのです。」

「何のエリストラトフです？　カザンにゐた人ですか？」とグバリョーフが聞く。

「左樣なんですよ。そしてね、ステパン・ニコライッチ、斯んな評判ですよ。何でもあの人が請負師

か醸酒家から彼處で賄賂を貰つたと云ふのです。そして誰がそんな事を云つたかと申しますとね、ペリカノフなんですよ！　誰があのペリカノフなんか信用しませう、皆んながあの人はたゞの間諜だと云ふこと知つてゐますのに！」

「失禮ですが、マトローナ・セミオノウナ、」とバムバエフが口を出した。「私はペリカノフの友達ですが、あの男は決して間諜ぢやありませんよ。」

「いゝえ、いゝえ、間諜です！」

「然しちよつと待づて下さい――」

「間諜です、間諜です！」とスハンチコフ夫人が叫んだ。

「いや、いや、まあ私の云ふことをよく聞いて下さい、」と今度はバムバエフが叫んだ。

「間諜です、間諜です、」とスハンチコフ夫人は張りに云ひ張つた。

「いや、いや。テンテリエフのことです。そりや別な話です、」とバムバエフが肺臓にありたけの力をこめて叫んだ。

スハンチコフ夫人は暫く沈默した。

「私はある事であの人を知つてゐます、」彼は平常の聲に歸つて話を續けた。「あの人が秘密警部の前

に出ると、ブラゼンクランプ伯爵夫人の前に跪いて泣き聲になつて、助けて下さい、何とかして下さい」と賴んだのですが、ペリカノフはそんな見下げたことはしませんでしたよ。」

「うゝん……テンテリエフ……そりや大變なことだ。」とグバリョーフが呟いた。

スハンチコフ夫人は輕蔑するやうに肩を搖すつて、

「惡い話はいくらでもあるんですが、テンテリエフの面白い話も知つてゐますよ。あの人が農奴の解放を看板にしてゐながら、隨分慘酷に自分の農奴を取扱ふと云ふのは皆んなの知つた事實なのです。まあ斯うなんです、あの人がね、巴里の友達の家にゐますと唐突に、ビーチャー・ストウ夫人が來たのです――あの「アンクル・トムス・キヤビン」を書いたね。ところが出しやばりのテンテリエフは其の友達に自分を紹介してくれと賴んだのであるが、夫人はあの人の名を聞くと直ぐ「何ですつて？『アンクル・トム』の著書に紹介して呉れですつて？　彼方にお行きなさい！　早く！」かう云つてあの人の頰を引つぱたいたさうです。するとテンテリエフが何うしたと思ひます？　自分の帽子を取つてね、悄氣こんですご〳〵と出て行つたそうですよ。」

「私は其のお話には餘り法螺が混つてゐるやうに思ひますね、」とバムバエフが口を入れた。「『彼方にお行きなさい』と言つたのは本當かも知れませんが、引つぱたいたなんてことは本當ぢやないと思ふ

んです！」

「本當です、本當です！」とスハンチコフ夫人は躍起になつて、「妾は宜い加減なお話を面白半分にしてゐるのぢやありませんよ。あなたはあんな人のお友達なんですからねえ！」

「左樣ぢやないんですよ。マトローナ・セミョノウナ、私は何もテンテリエフが自分の友達だと云ふのぢやないのです。私はベリカノフのことを云つてゐるのですから。」

「テンテリエフでないにしたところで、例へばあのミニオフです。」

「ぢやミニオフが、何うしたと仰つしやるのです？」とパムパエフは早や心配さうな顏附になつてゐる。

「まあ！　あなたはあれを御存知ないのですか？　あの人は皆んなが見るボズネセンスキープロスペクトの紙上で、自由黨の者は誰も彼も牢に入れなければならぬと云つたのです。其の上に斯んなことがあるんですよ。あの人の昔の學校友達が、無論それは貧乏人なのですがね、あの人の處に來て「御馳走して頂けますか？」と訊ねますとね、あの人は「いや駄目です、今日は伯爵が二人來て一緒に食事をすることになつてゐますから……お歸り下さい！」と跳ねつけたさうですよ。」

「そりや屹度惡口ですよ！」とパムパエフが大聲を立てた。

「惡口？……惡口？　だつて第一あの時ミニオフの家で一緒に食事をしたワルシュキン公爵が——」

「ワルキシュン公爵は私の從兄弟なんですがね、」とグバリョーフは嚴然として云つた、「今私方に寄せつけない樣にしてゐるのです……ですからあんな男の事なんか話にならないですよ。」

スハンチコフ夫人はグバリョーフの說に同意するやうにうなづきながら、「第二に、プラスコウヤ・ヤコフレウナから妾は直接に聞いたのです。」

「立派な人の名を引つぱつて來ましたね、あの人とサルキゾフは好い加減な惡口を作り出すことでは有名な人なんですよ。」

「そりやサルキゾフは確に嘘つきでせう、何しろ自分のお父さんの棺の上にかぶせてある錦を盜むやうな人ですからな、ですから妾は何もあの人の事を何うとか彼うとか云ふのぢやありません。けれども、プラスコウヤ・ヤコロウナ……此の人に較べられる人はありません！　あの人が良夫と別れる時の態度は本當に見上げたものでした！　然しあなたはまた——」

「さあ、最う止しませう、止しませう、マストロウナ・セミョーウナ、」とパムパエフは彼女を遮つて、「最うこんな下らない話は止して何か他の面白い事を話しませう。御承知の通り私は文學が嫌な方ぢやないのですが、奧樣は Mlle. de la quintinie をお讀みになりましたか？　ちよつと面白いですよ、

そしてまたあなたのお意見によく似た處があるのです！」

「妾は小説を讀むのは止めてゐます、」とスハンチコフ夫人は素氣なく答へた、「何うしても時間がありませんですから。今じや妾は裁縫機械に座ることより他に何も考へることがないのです。」

「何の機械ですつて？」とリトウイノフが訊ねた。

「裁縫機械ですよ。女は誰でも裁縫機械使方を習つて世の中に立たなくちゃ駄目ですからね、左樣すれば誰でも生活費が得られて、獨立することが出來ます。女が自由に解放されるには左樣するより他に道がないのです。是れは妾は大切な、非常に大切な社會上の問題だと思ふのです。この事に就いてはボレスラウ・スタニツキーとも議論を致しましたが、スタニツキーは妙な人で、此の問題を些細な問題にしてしまつて、誰笑ふばかりしてゐました、馬鹿ですよ！」

「何んな事でも時が來れば問題になりますよ。皆んながそれを研究しますよ、」とグバリヨーフは半ば教授のやうな、半ば豫言者のやうな調子で靜かに云つた。

「左樣ですとも」とバムバエフが受けて、「研究されますよ、屹度研究されますよ。時にステパン・ニコライッチと此處で聲を落して」あなたの大論文は何うなりました？」

「材料を集めてゐるところなんです。」とグバリヨーフは顔を顰め、それからあまり聞いたことのない

名を矢鱈に聞かされたり、散々惡口を聞かされたりしていゝ加減頭が變になつてゐるリトウイノフの方に振向いて、何んな事に興味を持つてゐるかと訊ねた。

リトウイノフはグバリヨーフの好奇心を滿足さした。

「あゝ！　自然科學。それは學問としては確かに必要なものです。其れ自身を目的としてゞなく學問としてはね。目的としては現今では……うゝん……何うしても……左樣は行きませんです。失禮ですが君は何んな御意見をお持ちですか？」

「何んな御意見とは？」

「えゝ、つまり、最つとはつきり云へば、君は政治について何うお考へです？」

リトウイノフは微笑して、

「嚴密に云へば政治については何んな考も持つてゐませんです。」

部屋の片隅に座つてゐた肩幅の廣い男が此の言葉に。と頭を起こして凝とリトウイノフに眼を注いだ。

グバリヨーフは優しい聲で、

「何故です？　君は斯んな事はまだ考へないですか、それとも最う斯んな事には飽いたのですか？」

「何う云つたら好いでせう。我々露西亞人に取つては政治上の意見を持つたり、または其の意見を自分で持つてゐると信じたりするにはまだ早すぎるやうに私には思はれるのです、尤も私の「政治上」と云ふ意味は其の字が根本的に元から持つてゐる意味なのですが。それからまた――」

「あゝ！　まだよくお考へになつたことがないとみえますね、」とグバリョーフは相變らず優しい調子で遮つて、今度はウオロシロフの傍に歩み寄り、「私が上げた小冊子はお讀みになりましたか？」

ウオロシロフはリトウイノフが不思議に思ふ程、此處に來てから眉を顰めて眼をぎろ〳〵光らせるばかりで、一口も物を云はなかつた。(鰐舌り散らすか、でなければ一口にも言はないのが此の人の癖であつた。)彼は軍人らしく胸を張つて、踵で床を打つて、うなづいて見せた。

「で、如何でした？　お氣に入りましたが？」

「大體の說には同感できましたが、理論の行き方には同感出來ませんでした。」

「うゝん……ですがアンドレイ・イワニツチはあの小冊子を褒めて呉れましたよ。君の不同意な點は後でお伺ひしませう。」

「書いて下すか？」

グバリョーフは思ひがけない質問に吃驚したやうだつたが、すぐ氣を取り直して、

「はあ、書いて頂きませう。それからお序にお伺ひしたのですが……あの……組合に關する君の御意見をね。」

「ラッサル流の組合ですか、それともシユルツエデクツチ流の組合ですか？」

「うゝん……兩方。私たち露西亞人に取りましては、君も御承知の通りに經濟的の見方が必要なのです。えゝ。それからあの勞働會社ね……これはまだ芽生えですが……斯んなことは皆んな考へなくちやならないと思ふのです。突き込んで考へてみなくちやならないと思ふのです。それからまた百姓たちに分配すべき土地の問題だのね。」

「であなたは何の位の土地を分配したらいゝとお考へですか？」とウオロシロフが恭々しい聲で訊ねた。

「うゝん……地方自治ですか？」斯う云つてグバリョーフは何か凝と考へながら、口に髯の先を喰はへて卓子の脚を見入つた。「地方自治！……お解りですか。これは廣い意味を持つた言葉です！　ぢや、あの火事は何うお考へです？　あの日曜學校や、讀書室や、新聞雜誌に對する政府の態度は？　今後の地位を確かにする爲に百姓が證書に署名するのを拒むのは？　最後に今、波蘭で起つてゐる事を何うお考へです？　あなたがたは何うお考へですか知りませんが……ううん……私たちは……私たちは

民衆と一緒になつて……彼等の……彼等の意見を知らねばなりません――！」グバリョーフは不意に烈しい怒怒に襲はれて、顔色を黒くして、烈しい息づかひをして、目は相變らずうつむけたまゝ頬りに顎を噛んで。「何う考へか知りまんが――」

「エウセエフはつまらない人ですよ！」と唐突にスハンチコフ夫人が矢鋒しい聲を張上げた。パンパエフは主人に遠慮して低い聲で今まで何事か彼女と話してゐたのだ。グバリョーフは急に踵で向き直つてまた部屋の中をぶら〳〵歩きだした。

其の中に新しい客が次第に姿を見せた。日が暮れてしまうまでには可なりの人が其處に集まつた。來客の中にはスハンチコフ夫人が先刻ひどく遣り込めたエウセエフ君もゐた。スハンチコフ夫人は心からの親しみを以つて丁寧に彼に話しかけ、歸りには家まで送つてくれるやうに頼んだ。其處にはまたビシュチャルキンと云つて露西亞には缺くべからざる者の一人である理想的の仲解者もゐた、――即ち偏狭で、教養がなくて、天分がなくて、けれども良心を持つてゐて、辛抱强くて、正直な人で、彼が使つてゐる百姓たちは彼を殆ど崇拜するやうにあがめ、彼もまた自分を崇拜されるだけの價値のある男のやうに思つてゐた。それからまた二三の將校も來てゐたが、この人たちは短かい休暇を利用して歐羅巴に逃れ、何時も自分が軍人だことを忘れないほど殺伐ではあるが、教養のある人達……と云

ふよりは寧ろ危險な人達と共に此處で暫くの間を樂しまふとしてゐるのである。紛つそりした二人のハイデルベルヒの大學生が、一人は輕蔑の色を浮べてあたりを見廻し、一人はくす〳〵思ひ出したやうに笑ひながら急いで這入つて來た……二人とも何だかそわ〳〵してゐた。其の後からは、佛蘭西人――所謂 Petit jeune homme―― が現れた。其の男は嫌らしい、馬鹿げた、可愛さうな小男で……自分が或る露西亞の伯爵夫人に戀せられたと云ふ評判を仲間の店の事務員たちに云ひふらして悦んでゐながら、自分では只で夕飲の御馳走になることばかり考へてゐると云ふ男であつた。最後に這入つて來たのは、テイット・ピンダソフと云つて、ちよつと見るとぴん〳〵跳ねまはる獨逸の學生のやうに見えるが、其實、吝嗇家で、云ふことはテロリストのやうで、職業は警官で、露西亞の商人の妻君や巴里のお轉婆娘の友達で、頭は禿げ、齒は抜け、酒に醉拂つた男であつた。彼は酒に眞つ赤になつて、惡者のベナゼエに金をまるで取られてしまつたと怨じながら這入つて來たが……本當は彼の方が十六グルデンも勝つてゐるのだ……兎に角、其處に澤山の人達が集まつた。そして不思議なことには……實際不思議なことには……集まつた人達は皆んなグバリョーフに對して、敎師か指揮者に對するやうな尊敬をもつてゐた、皆んなが自分の考へを腹藏なくグバリョーフに打明けて其の批判を乞ひ、グバリョーフはまたそれに對して例の如く髭を捩りながら呟り勝ちに、眼を白黑くさせながら、切れ〳〵

な、無意味な言葉を漏らすのであつた。其の言葉は最高の哲人の言葉として謹聽された。グバリョーフ自分は人々の議論に仲間入りをしなかつたが、他の者は肺臓が破れる程議論をした。二三の人が十分間も一緒になつて喚き合つて滿足し、理解し合ふことも一度や二度ではなかつた。談話は夜中過ぎまで續いたが、其の話題は何時もの通りいろ〳〵な事柄にわたつてゐた。スハンチコフ夫人はガリバルディのことや、カールイ・ワノウイッチと云つて自分の農奴達に撲られた男のことや、ナポレオン三世のことや、女子の職業のことや、故意に十二人の職業婦人を死なして、「公共事業の爲と云ふ文字を刻んだメダルを授かつたブレスカチョフと云ふ商人のことや、プロレタリアトのことや、自分の妻を大砲で撃ち殺したゲオルギアの公爵チエクチウリゾフのことや、それから露西亞の未來のことなどを話した。ビシュチヤルキンも露西亞未來のことや、酒の專賣のことや、國民性の意義のことや、自分が何のくらい酷く俗惡と云ふことを憎むかと云ふことなど話した。と唐突にウオロシロフが大聲で息が詰まるほど急き込んで、ドレイパー、ヴイルチョフ、シエルグノフ、ビシャー、ヘルムホルツ、スタア、聖レイモンド、生理學者のヨハン・ミュラー、歴史家のヨハン・ミュラー、――その二人を混合してゐた……ティヌ、ルナン、シュチヤポフ、それからトーマス・ナッシュ、ビール、グリーンなどの名を饒舌つた、……するとバムバエフが、「何んな不思議な人たちなのぞ？」と當惑げに呟いた。彼

にとつてはシェクスピーアの先驅者もアルプス山脈がモンブランに於けると同じなのだ。ウオロシロフは短かい返事をした後、彼もまた露西亞の未來について話しだした。バンバエフも巧みに色彩をつけて露西亞の未來を云々した。そして自分が少し意見を持つてゐる露西亞の音樂の事に話が移ると、大悦びになつて、「あゝ！　本當に偉大だ！」と一人感心しながら、ワルラモフの歌を小聲で歌ひ出したが、其の歌も「トラヴアトレのミゼレルなんだらうが隨分苦しさうな聲だぜ」と云ふ皆んなの聲に葬られてしまつた。或る小柄の士官は、がや〳〵矢鱈しい話聲の中で頻りに露西亞文學の惡口を云ひ、最一人の男は「火花」から詩を引き出して聞かせてゐたが、チット・ビンダソフはそれよりも一層突込んで、斯んな騙兒のやうな連中は齒を引つこ抜いてしまつてやつた方がいゝのだ……左樣してやりさへすればいゝのだ、と圍捲いた。けれども其の騙兒のやうな連中が果して誰であるかと云ふことは口にしなかつた。部屋に煙草の煙が息も詰るほど立籠めて、暑さに疲勞した人達は聲を涸らし、誰の眼も茫と曇つて霞みがかゝつたやうになり、誰の顏にもだら〳〵汗が流れてゐた。氷で冷した麥酒の罎は、次から次へ運ばれては飲まれ、運ばれては飲まれせられた。「何にを先つき私は話してゐたかしら？」と訊ねる人もあれば、「誰と何んなことを私は議論してゐたのかしら？」と聞く人もあつた。この喧騒と煙の中にグバリョーフは相變らず鬚を捩り體を搖すりながら疲れた樣子もなく、部屋の內を

あちこちと歩き廻り、時々傍の議論に耳をかたむけては一口二口自分の言葉を差し挿みなどした。そして總ての人が此のグバリョーフこそいろ〳〵な議論の源でもあり、此處の支配者でもあり、最も優れた人でもあるのだと思つてゐるらしかつた。

リトウイノフは十時頃烈しい頭痛に襲はれてゐたので、皆んなが聲高に騒ぎ崩れるのを良いしほにして、窃と其の場をはづして外に出た。スハンチコフ夫人はまた新しいバルナウロフ公爵の不法を思ひ出して、何んでも公爵は或る人の耳を嚙み切れと命令した事もあるなどと云つてゐた。

新鮮な夜の空氣はリトウイノフの火照つた顏を、ひやりとなで〻、香ばしい微風が乾いた唇に觸れた。彼はほの暗い並木路を歩きながら、「あれは一體何んであらう？　何うして皆んなはあんなに集まるのだらう？　何うしてあんなに喚いたり、罵つたりして騒ぎ廻るのだらう？　一體何の爲になるのだらう？」かう自問自答しながら肩を搖すつて、ウエーベルの珈琲店に這入つて其處にあつた新聞を取上げながら氷を注文した。新聞には羅馬の問題が一杯に論じてあつて、給仕が持つて來た氷も旨くなかつた。で家に歸らうとしてゐると、思ひがけなく見知らぬ一人の男が緣の廣い帽子を冠つて彼の傍につか〳〵と歩みより、「お邪魔をしちや濟みませんが、」と露西亞語で云ひながら彼の卓子の前に腰を卽した。よく見ると此の見知らぬ人こそ先刻グバリョーフの家で部屋の隅の方にうづくまつて談話

が政治上の問題になつた時に注意深い眼つきで彼を凝と見入つた肩幅の廣い紳士であつた。此の紳士は今夜は始めから終ひまで一度も口を開かなかつたのだが、今リトウイノフと相對して帽子を取り、懷かしさうな、それで何か極り惡るさうな顏付をしながら彼を見てゐるのである。

五

「實は今日あなたとグバリョーフさんの家でお目にかゝつたのですが、あの人が紹介して呉れませんでしたから、失禮ですが私自身で紹介いたします……パツーギンと申しまして休職の顧問官です。變にお思召しになるかも知れませんが……私は何時もこんなに唐突に人と近づきになつたことはありませんですが……然しあなたとは……」

此處まで話した時、彼は當惑してしまつて給仕に櫻子酒を一杯注文した、「元氣をつける爲めに、」と微笑しながら。

リトウイノフは此の日逢ふべく餘儀なくされた澤山の人達の最後の一人を新しい興味を以つて眺めた、が彼は直ぐ「この人は他の人達とは違つてゐると」思つた。

事實この人は他の人達とは違つてゐた。敏感な指先で卓子の端を叩きながらリトウイノフの前に座

つた人は、短かい脚の上に豐かな體をのせて、渦卷く髮のある頭をやゝ前に俯向け太い眉毛の下の非常に賢こさうな、非常に淋しさうな眼と、厚い格好のいゝ口と悪い齒並と、「芋」と呼ばれてゐる例の純粹の露西亞式の鼻とを持つた肩幅の廣い人であつた。少なくも普通の型の人でないと云ふことだけは斷言できる人であつた。服の着方なども頗る無造作なもので、流行遅れの上衣を粉袋のやうに纏い、襟飾は横の方にねじれてゐた。此の人が不意に近づいて來たのはリトウイノフに取つては邪魔どころではなく、却つて窃かに得意に思つた位であつた。この人は見知らぬ人に近づくことには全く馴れてゐないのだと云ふことが直ぐ解つたからである。この人はリトウイノフに妙な印象を與へた。リトウイノフの心に尊敬と好感と、それから何となしに同情あるやうな心持を起こさせた。

「邪魔ぢやないでせうねえ？」彼は全體の彼の調子と恐ろしく調和した軟かい、懶い、弱々しい聲で訊ねた。

「いゝえ、決して。それどころか却つて嬉しい位なんです、」とリトウイノフが答へた。

「本當ですか？　左樣ですか、それぢや私も嬉しい譯です。あなたのことはいろ〳〵お伺ひしまして、あなたの爲さつてゐることも、仕やうと思つてゐらつしやることも承つてよく解りました。あれは皆んな好いことです。だからあなたは今晩默つてゐらつしやつたんです。」

「はあ、あなたも今晩はあまりお話しにならなかつたやうですね、」とリトウイノフが云つた、

パツーギンは溜息をついて、「皆んなで餘計なことまで饒舌りましたから、私は聞いてゐたのです。」かう云つてちよつと言葉を切つて、やゝ滑稽らしく眉を揚げ、「如何です、あなたは私たちが斯うしてバーベルの塔を築くのをお好みですか？」

「左樣ですね、旨い言葉で形容されました。私も先つきからあの人達に、「何うしてあんなに騒ぐのか聞き度いと思つてゐたところなんです。」

パツーギンはまた溜息をして。

「あの人達はそれを自分でも知らないんですよ。昔ならあの人達のことを、「高い目的の爲の盲目な機械」とでも云ふところですが、今ぢや最つと鋭どい言葉で云ふべきです。私は何もあの人達を咎めやうとするのぢやありません。それどころかあの人達は皆んな……殆んど皆んな立派な人だと思つてゐるのです。例へばあのスハンチコフ夫人だつて左樣です。あの人にはいろ〳〵の良い點があります。自分の財産の殘りを皆んな貧乏な二人の姪に遺つてしまつた位の人です。派手な立派なことをして見せたかつたのが理由の一つだつたとしても、それにしても自分自身あまり豐かでない女があんなことをするのは確に天晴な遣方に違ひないのです！　ビシユチヤルキン君のことなんか云ふ必要もないほ

どです。あの人が使つてゐる百姓等は何時かは屹と、南瓜のやうな大きな銀の鉢やあの人の名の聖徒の像を贈物としてあの人の家に持つて行くでせう。無論あの人は己れはこんな物を受けられるだけの資格のある男ぢやないと斷るでせうが、然し實際それだけの價値はあるのです。あなたの友達のパムバエフ君だゝて素的に好い心を持つてゐます。あの人はまるで本に向つて水を啜りながらバッカスの酒宴を讃美したと云ふ詩人ヤズイコフそつくりの人です。あの人の熱狂にはまるで特種の目的と云ふものがないのですが、それでも熱狂は熱狂です。それからあのウオロシロフ君もごく良い人です。學校で一等賞を得た人は皆んな左樣ですが。あの人も學術界の副官たるべき人です、そして若いのに凝と口をつむいでゐます。さうです、さうです、皆んな立派な人たちです。ところが其の結果を見ようとすると何も見えないのです。材料は皆んな上等のものばかりなんですが、さて其の皿にのつたところを見ると一向食はれないのです。」

パッーギンの言葉に耳をかたむけてゐたリトウイノフの驚きは次第に大きくなつた。總ての文句、總ての落着いた、けれども自信のある言葉の端々には力も意志も充分現れてゐた。

パッーギンは實際話しをするのが好きでもあつたが、また上手でもあつた。けれども彼は人生に盡衆心なんか全く無くした人のやうに靜かに、落着きはらつて好い機會、即ち同じやうな心を持つ人に

出逢ふ機會を待つてゐたのであつた。

「さうなんですよ、」彼は特有な氣むづかしい聲でなしに落膽したやうな調子で話を續けた、「全く不思議ですよ。それに考へて頂き度いことがあるのです。今此處に例へば十人ばかり英國人が集まつたとしてごらんなさい。彼等は屹と直ぐ海底電信のことや、紙稅のことや、鼠の皮の鞣し方や……兎に角、實際的な決定的なことを話しますよ。また獨逸人だつたら屹とシュレスウイッヒ・ホルスタインや獨逸の統一の問題を話しますよ。若し佛蘭西人だつたら戀の冒險のことに話が向いて何んに其れから話題を外らさうとしても駄目です。然し露西亞人が十八人集まつたとしてごらんなさい、——あなたも今晩事實を確められたでせうが……其處には早速露西亞の意義と未來の問題が論じられ、一般的な言葉で事實も結論もなしに勝手なことばかり論じられるのです。彼等は丁度小供が謹謨の片を嚙むやうに此の厄介な問題に頭を惱ませるばかりして……諺にも云ふやうに面白いからでもなければ利益があるからでもないのです。其れに腐敗したものは遠慮なしに西の方から這入つて來る。不思議にもこの西の歐羅巴は何處までも私たちを打つて來る……けれどもそれは矢張り腐敗してゐる。たゞ私たちが心から其れを輕蔑してゐさへすれば、が、それは皆んな哀れな聲や瞞詐にすぎないです。惡口を云はれるうちは何うか斯うか遣つて行けますが、西から來る說は私たちが價値を置くたつた一つの說、即

ち巴里の怠け者の説なんです。私が知つた人で、好い人で、子供たちの父でもあれば、相當の年輩でもある人がありましたが、其の人は斯んた失敗をして五六日すつかり寒ぎ込んでゐたことがありました。失敗と云ふのは巴里のある料理屋で une portion de Lifteks pommes de terre と云つて注文した、其處にまた本當の佛蘭西人が garcon! bifteк pommes! と喚いたのです。私の友人は死にたいほど恥かしがつて、それからと云ふものは、何處に行つても bifteк pommes! と喚き、他の人にも左樣云ふやうに敎へたものです、巴里のお轉婆の取りみだした客室に露西亞の粗野な青年が恭々しく顫へながら這入ると驚いて、「おや〳〵此處は妾がアンナ・デスリアンヌのやうなお方と一緒にゐる處かしら！」と考へるのです。

「お伺ひしたいのですが、」とリトウイノフが訊ねた、「グバリョーフが其の周圍の者に與へる感化は何の爲だと思ひますか？　あの人の才能でせうか、能力でせうか？」

「いえ、いえ、あの人はそんなものを持つてゐやしないのです、」

「ちや、あの人の人格でせうか？」

「それでもないのです。あの人は強い意志を持てつゐるのです。私たちスラヴ民族は、大抵皆んなも知つてゐるやうに此の特色を缺いでゐて、此特色の前には頭を垂れてゐます、グバリョーフが支配者

になつてゐる譯は意志を持つてゐるからです。それで皆んながあの人を支配者として認めてゐるのです、あなたは何う思つてゐます？　政府は農奴の心配から私たちを自由にしてくれました…そして多くの人たちは其れを感謝してゐる！　けれども奴隷の習慣はなか〳〵深く私たちの頭に喰込んでゐて、さう容易に此の習慣から逃れることは難かしいでせう。で私たちは何んな事をするにも、何んな處に於てゞも、主人と云ふものが要るので、此の主人は大抵は生きた人の場合が多いのですが、時々は所謂傾向と云ふやうなものが支配することもあるのです…例へば今現に私たちは自然科學の奴隷になつてゐるでありませんか…何故、何んな理由があつて、私たちはこの束縛を自分のものにするのでせう、これはとても解らない問題です、まあ多分これが私たちの性質なんでせう。けれども主人がなくてはならぬと云ふのは隨分大變なことです。彼が私たちと一緒にゐると云ふことは、彼が私たちのものだから、他のものは何でも輕蔑することが出來ると云ふことなんです！　まつたく奴隷ですねえ！　私たちの自負心も奴隷的、謙遜も奴隷的なんです。若し新しい主人が起これば……古い主人は直ぐさまならばです。今までヤコフだつたかと思ふと、最うシドルになつてしまつて、ヤコフの耳を叩きながらシドルの前に跪く！ま　あこんなことが何度行はれたことか考へてごらんなさい！私たちは懐疑主義が我々の特性だと云つてゐますが、その懐疑に於てゞさへ、私たちは劍と執つて戰

ふ自由の人ではなくて、拳を上げる從者なんです、而もそれでさへ主人の命令だから拳を上げるに過ぎないのです。それにまた私たちは軟らかい國民ですから、譯なしと檢束を加へることが出來るのです。だからクバリョーフが私たちの間に勢力を得るやうになつたのです。あの人は一つの處を骨を折つて破り、とう〳〵破り拔いて成功した人です。あの人は非常に自分を信じてゐて皆んなからも萬人の上に立つて命令を下す人だと思はれてゐるのですが、この命令を下し得ると云ふことが大切なことなので、從つて其の人が正しいと云ふことにもなれば、皆んなが其の人々從はねばならぬと云ふことにもなるのです。大抵の分派、オヌフル派にせよ、アクリン派にせよ、皆んな斯うして出來たんです。棹を持つてゐるのが伍長なんです。」

パツーギンの頬は赧しくなり、眼は潤んで來たが、不思議にも彼の話は隨分きびしくて意地惡いほどではあつたが、辛辣なところは少しもなく、寧ろ悲哀な調子、純粹で眞實な悲哀の調子さへ含んでゐた。

「クバリョーフとは何うしてお知合ひになつたのですか？」とリトウイノフが訊ねると、

「隨分長い前から知つてゐます。それから此處にもまた面白いことがあるのです。例へば一人の著者があつて一生散文や韻文で酒の害や酒の專賣制度を攻擊してゐたのに、それがまあ何うです！　其の

人が酒店を開いたとしたら……それでも當り前なのです！　他の人だつたら地球の表面から拭ひ去られても、此の人は小言一つ喰はない。クバリョーフは國粹主義者で、民衆主義者で、社會主義者で、其他何んなことにも關係してゐるのですが、其の財産は自分の兄弟の昔風な頭を持つた、頑固な男にまかしてゐるのです。そしてあのテンテリエフの耳をピーチヤー・ストフ夫人に攜らしたと云ふスハンチコフ夫人などはまるでクバリョーフの足先の前では塵屑のやうになつてゐるのです。たゞあの人の偉いことは好い本を讀んで其の要點を掴んでゐると云ふことだけなんです。今日あなたもあの人が何んなに旨く自己を表現するかを御覽になつたでせうが、都合のいゝことはあの人はあまり言葉數を云はないで、殼の内に引込んでゐるのです。若しあの人が機嫌の好い時に自分の思ふことを話したら、私のやうな辛抱强い男でもたまらなくなりますよ。先づ始めには點酒洛を云つてそれから嚴ない逸話……えゝ、本當にあの堂々たるクバリョーフさんが嚴ない逸話をされましてね、大きな聲で頻りに笑ふのですよ。」

「あなたはそんなに辛抱强い方なんですか？」とリトウイノフが口を出した、「私はその反對だらうと思つてゐました。であなたのお名前とお父さんのお名前は？」

パツーギンは櫻子酒を一口飲んで、

「名前はソゾントです……ソゾント・イワニッチです。貴族の人で僧院長をしてゐる人の名にちなんで此の素晴しい名をつけたのださうですが、私は其の人から名前の他には何の恩も受けてはゐないのです。自分からこんなことを云ふのも可笑しいやうですが家系はなか〳〵立派な方なんです。それから私が辛抱がないなんてお考へになるのは全く間違ひですよ。非常に辛抱強い男なんです。何しろ今議員をしてゐる叔父の權力の下で二十二年も勤めたのですからね。あなたは叔父のイリナル・パツーギンを御存知ありませんか？」

「いゝえ。」

「知らなくて結構です。そりや私はなか〳〵辛抱強い男なんですよ。「然し元の話に歸りませう、」あの數世紀前に焚き殺された我々の尊敬する仲間の第一の法王アワクムが云つたやうに。私は實際我が國の人には驚いてゐるのです。彼等は皆んな元氣を失なつてゐて、頭を垂れて道を歩き、それでまた同時に希望に滿たされてゐて、ちよつとしたことに夢中になつて狂人のやうに悦びだすのです。あのグリヨーフさんのゐる國粹主義を御覽なさい。彼等は皆んな立派な人達なんですが、其處にだつて失望と興奮が混合してゐて、未來のことばかり考へてゐるのです。何でもかでも未來は斯うなるであらう、あゝなるであらうと考へてゐるのです。實際に成しとげられた事は何もないのです。露西亞は十

世紀の間に何一つ自分のものを成しとげてゐないのです。政治にだつて、法律にだつて、科學にだつて、藝術にだつて、手藝に於てすら、何一つ成しとげてゐないのです……だが辛抱して暫くお待ちなさい、やがて總てが到來しますから。ぢや何故到來するか？　なあに、私たち教養のある階級は皆んな慣値がないが、人民……おゝ、偉大なる人民！　君は百姓の襯衣を知つてゐるでせう？　總てのものが來る源はあれなんですよ。他の偶像は總て破壞されてしまひました。私たちはあの襯衣を信じやうではありませんか。では若しその襯衣が私たちを裏切るとしたら？　いや、そんな心配はない。コハノフスキーを讀んで空を仰いでごらんなさい？　本當に私が若し詩家だつたら斯んな繪を描きますね、教養ある人が百姓の前に立つて、お百姓樣病氣で死なうとしてゐる私を助けて下さいと祈つてゐる、百姓もまた教養ある人に向つて、紳士よ無智のまゝ死なうとしてゐる私に教へて下さいと祈つてゐる。無論二人とも立つてゐるのです。けれども私たちに一番大切なことは自分の本當につまらないことを知ること……言葉だけでなく……そして私たちよりも前に最つと完全なものを發明した國々からそれを借りることです。給仕、noch ein glaschen Kirsch！　私を酒飲みだと御考へになつちやいけませんよ、けれどもアルコールは舌をゆるめてくれますからね。」

「今云はれたことで、」リトウイノフは微笑しながら云つた、「君が何方の黨派に屬してゐられるかよ

く解りました。歐羅巴に對するお考へも解りました。けれども一口申上げたいのです。君は先進國から借りて來なければならぬと云はれましたが、氣候や、土地や、地方と國民の特質などを考へないで何うして借りて來られます？　今思ひ出しましたが私の父はプチノプに非常に評判のよい鑄鐵の打穀機械を註文したことがありました。その機械は無論立派なものでした……ところがそれが何うなつたと思ひます？　五年の長い間、使はれないで庫の内に仕舞はれたまゝでしたが、とう〳〵亞米利加から木製の機械が其の代りに來たのです……亞米利加の機械は皆んな私たちの遣り方や習慣に適してゐますからね。ですから無暗に借りて來られるものではないと思ふのです。ソゾント・イワニッチ。」

パツーギンは頭を起こして、

「こんな批評を君から聞かうとは思ひませんでしたね、グリゴリ・ミハロウイッチ、」と暫くして口を開いた「そりや誰だつて無暗に借りて來るのは考へものだと思つてゐますよ。他人のものを借りるのはそれが遠つたものだから借りるのではなくて、役に立つから借りるのです。そこに選擇が起つて來る。結果に關しては何うか私たちを信じたいものです。君が云はれたやうないろ〳〵な事情や、氣候や、土地のためにそれ〴〵の特長はあります。けれどもたゞ好い食物を前に並べさへすれば、自然の胃が勝手に消化してくれるのです。その中に何時かは有機體に力がついて、自分で働き出すものです。

欠

の催促に通ふのに飽き〳〵した、」と怒鳴つたり、家に使つてゐる召使が主人の前で、「本當に立派な公爵様ですよ。夕飯には口笛をふいて、空腹かゝへて寢床にいらつしやるなんて」……こんな恥づかしい場合でもイリーナは顔の筋一つ動かさないで、凝と身動きもせず座つたまゝ暗い顔に氣味の惡るい微笑を浮べてゐた。この氣味の惡るい微笑が兩親には却つて何んた叱責よりも辛らくて自分が惡かつたと思ふのであつた。惡くなくても惡かつたと思ふのであつた。この生れた時から富と贅澤と名譽を受くべき權利を持つてゐる娘に對して何が惡いことをしたやうに思ふのだつた。

リトウイノフは初めて見た時からイリーナを戀しだした。彼は娘よりたつた三つ上だつたけれども其の戀は長い間報ひられないばかりか、あまり興味さへ持つて貰へなかつた。彼に對する娘の態度の中には敵意に似たものさへあつた。彼は娘の自負心を傷つけた。娘はその傷を隱しつゝも彼を許すことは出來なかつた。殆ど慘酷に輕蔑するほどのこの敵意の中に何が隱されてゐるかを理解するには彼はあまりに若く、あまりに內氣だつた。彼は屢々學校の講議や試驗をそっちのけにしてオシニンの冷たい客室に坐つてはイリーナを見た、心臟はゆるく苦しく波打つて、息も詰るやうに感じた。娘は不機嫌らしく五月蠅さうに立上つて部屋の內を彼方此方と歩きながら彼をまるで椅子か卓子とでも思つてゐる樣な冷たい眸で見遣つては肩を搖すつて腕組みをするのであつた。時々は一晩中沓意とリトウイ

欠

ノフに眼を奥れないこともあつた。一緒に歩いてゐる時でさへ眼を奥れると云ふ唯それだけの恩恵を彼女は拒むだ。時にはまた本を取上げて讀むでもなくそれを見詰めながら顔を顰めて唇を噛んだり、時には突然大聲で父や兄弟たちに、「獨逸語で忍耐は？」と訊ねたりした。彼は係蹄の中の小鳥の様に空しく藻掻き苦しまねばならぬこの不思議な魅惑と持つ家庭から、無限に自分を引離してみたくなつた。それで一週間ばかり莫斯科を逃出してゐたこともあつたが　結局悲哀と寂しさに氣も狂ふばかりになつて、痩せ衰へた彼はまたオシェンの家に歸つて來るよりは他なかつた……不思議なことにはイリーナも其の時眼に附くほど痩せて頰の色が蒼くなつたゐた……けれども彼女の彼に對する態度は一層冷淡で、殆ど意地の悪いほど取濟ましてゐた。さながら彼に傷つけられた。……自負心の傷が一層大きくでもなつたやうに。……彼女は斯うして二月の間彼をいじめぬいた。ところが一日で萬事すつかり變化してしまつた。それは丁度愛が暖められて一時にパッと炎になつたり、愛が嵐の雲から急に地上に降つて來るやうなものであつた。或る日のこと……其日は永久に記憶されるであらう……彼は何時もの如くオシェンの客室の窓際に腰かけて何の氣もなく街を眺めてゐた。彼は心にきまり悪るさと懶さを感じつゝ自分で自分を輕蔑してゐながら、其場を立去ることは何うしても出來なかつた……彼は思つた、若し窓の下に川が流れてゐたら恐怖に顫えながら後悔することなしに其の中に飛び込んで

らうと。イリーナは彼からあまり遠くない處に座つて妙に默込んで身動きもしなかつた。彼女は此二三日と云ふもの彼にも誰とも口を利かなかつた。彼女は肘をついて腰かけながら當惑したやうに時々靜かに周圍を見廻してゐた。この冷たい苦痛に耐えられなくなつたリトウイノフは、起上つて左様ならとも云はずに帽子を取らうとした。すると急に「ちよつと、」軟らかい聲が囁いた。リトウイノフは膽を冷した。彼には始めは何うしてもその聲がイリーナの口から出たとの思はれなかつたのだ。其の一言にはそれほど今までとは違つた或る響きが籠つてゐた。彼は顔を上げたまゝぼんやりしてゐた。イリーナも、うつとりと……左様、うつとりを彼を見てゐた。「ちよつと、」彼女が云つた、「歸つちやいや、一緒にゐたいのですから。」それから一層聲を低くして、「歸つちやいや、……何卒ね。」彼は何も解らず、自分の仕てゐることさへ意識しないで、女の傍に寄つて兩手を差出した……女は直ぐ自分の兩手を彼に與へて眞つ赤になつて頰笑んだかと思ふと彼方に向直つて微笑を浮かべたまま其の部屋から姿を隱した。二三分たつと今度は一番末の妹を連れて歸つて來て、前と同じやうな落着いた優しい眼差で彼を見て彼を自分の身近くに座らした……が最初彼女は何も云ひ得ないで顔を赧らめて溜息ばかりついてゐたが、「嘲ておど〳〵した調子で今までになく彼が研究してゐることに就いていろ〳〵訊ねたりした。其の日の夕方彼女は今までの失禮を幾度も詫び、これからは全く違つた人となると約し、

念に打つて變つた共和主義の態度を示して彼を驚かした。(當時の彼はロベスピエールの熱心な崇拜者で、マラーはあまり口にしなかつた)そして彼がイリーリーナの自分を愛してゐることを知つたのはそれから僅か一週間たつた後であつた。左樣、彼は此の最初の日を長い間忘れなかつた……けれども、彼はそれに續いた日も忘れはしなかつた……信ずることを怖れて無理に疑はうとしながらも殆ど恐怖と云つてもいゝやうな喜悅の陶醉の中に、思ひもよらぬ幸福が生れて次第に大きくなつて總てのものを其の周圍に集めながら徐ろに彼に近づいて來るのをはつきり認めた日も忘れはしなかつた。それから初戀の輝かしい時が來た……一生に二度と繰返されぬものと定められてもゐれば、またそれが常り前でもある初戀の輝かしい時が來た。イリーナは急に仔羊のやうに素直に、絹のやうに軟らかに、限りなく親切になつた。彼女は妹たちに敎へてやりなどしだした……ピアノではない、彼女は音樂は上手でなかつた、佛蘭西語と英語だ。妹たちの學校の敎科書をさらつてやつた。家事の手傳をしたりした。總てのことが面白くなつて來た。或る時は頻りに饒舌つてゐるかと思ふと、また或る時は言葉の少ない優しさのうちに沈むのであつた。リトウイノフと結婚した後に爲すべきいろ〳〵のこと、いろいろの計畫をとりとめもなく思ひめぐらすこともあつた。(二人は結婚出來ることを、少しも疑はなかつた)そして一緒になれた後は……「働く?」　とリトウイノフが云ふと……「え、働いて、」とイリーナ

が受けて、「それから本を讀んで……だけど一番に旅行ですわ。」彼女は出來ることなら莫斯科を一時も早く去りたいと思つてゐた。そしてリトウイノフが大學を終るまで續けなくちやならないと云ふと、彼女は何時もちよつと考へた後でそれはベルリンでも何處でも出來るぢやありませんかと答へるのであつた。イリーナは自分の感情をあまり隱さない質だつたのでこの秘密もあまり長くは公爵と公爵夫人の眼から逃れることが出來なかつた。兩親は無論喜びはしなかつた。けれども何う考へても其れを直ぐ邪魔する必要も認められなかつた。リトウイノフの財產は多かつた……

「けれどもあの家柄が、あの家柄が!」……夫人が反對をとなへると公爵も、「さうさね、ええあの家柄がねえ、」と相槌を打つて、「だがあの人だつてまんざらの平民ぢやないし、それに第一イリーナが左樣しないと承知しないだらう。あの子は自分が思ひ込んだことは遣らねば承知しない質なんだからね。Vous connaissez sa violence! それにまだ何んにも今まで定まつた話はないのだから。」公爵は斯く道理を說いたものゝ心の中では、「リトウイノフ夫人……たゞそれだけが? 己れは最つと以上の人があるかと思つてゐた、」と考へた。イリーナは未來の許婚をすつかり自分のものとし、彼も心から女の手に縋りついた。それは丁度急流に落ち込んで何うすることも出來なくなつた者のやうなもの……彼は悲しくも思つたが同時に樂しくも思つた。そして何の後悔もしなければ何の心配もしなかつた。結婚に

は何んな意味があるのだらう、何んな義務と責任があるのだらう、斯んなに烈しく戀の奴隷になつてゐる自分が果して善い良人となり得るだらうか、イリーナは結婚後何んな妻になるだらうか、二人の仲は何時までも平穏であらうか、……こんな問題は、彼には何うしても考へてみることが出來なかつた。彼の血は火のやうに燃え立つて、何の前後の考へもなく、たゞ彼女に從ひ、彼女と一緒に、何時までも、何時までも……何んな災難が來ようとも！……と云ふ考より他なかつた。

リトウイノフの方でも異議をとなへる者はなく、イリーナも限りない優しさを胸に抱いてゐたとは云へ、二人は何の誤解も爭論もなしに遣つて行く譯にはゆかなかつた。或る日のことだつた。彼は大學の歸りに手をインキで穢して古い服を來たまゝオシニンの家に寄ると、イリーナは例の通り愛想よく出迎へるべく走り出たが彼を見ると急に立止まつて、

「まあ手套なしで、隨分だわねえ！」と口早やに云つた。

「あなたがあんまり嚴格なんですよ、イリーナ，」とリトウイノフが云ふと

「あなたはたゞの學生だわ、Vous n'êtes pas distingué.」と云ひ捨して彼女は背を見せながら部屋から姿を隱した。尤も一時間の後に惡るかつたと男にあやまつたのは事實だけれど……彼女には自分を責める癖があつて、男にもそれを話してゐたが、不思議なことには自分が拵つてもゐない惡い癖を涙を

流して頻りに責めながら、それでゐて自分の本當の缺點はへから指摘されてもしぶとく拒むのであつた、或る時彼女が髪を振亂して兩手に顔を埋めて泣いてゐるのを見たので、慌てゝ何故泣くのか訊ねると、彼女は默つて自分の胸を指差した。リトウイノフは思はず身顫ひした。「肺病！」この考へが頭を掠めると同時に女の手を取つて、

「あなた御病氣、イリーナ？」と顫ひ聲で訊ねた。(この時分二人は事ある場合には呼名で呼び合つてゐた「直ぐ醫者を呼んで來ませうか？」

イリーナは直ぐに彼の言葉を遮つて、もどかしさうに地踏鞴を踏んだ。

「醫は何ともないのです……けれどもこの着物が……お解りになりませんか？」

「何うしたんです？……この着物が，」と彼は當惑して繰返した。

「何うしたつて？　妾この着物が一枚しかないんですよ。こんな古い見すぼらしい着物しか。そして毎日この着物を着てゐなくちやならないんです……あなたが……グリーシャ……グリゴリイ、おいでになる時でさへ……いくらあなただつて、妾が何時もこんな穢ない着物を着てゐれば、終ひには屹と妾を愛して下さらなくなりますわ！」

「後生ですからイリーナ、最うそんなことは云はないで下さい。この着物は大層立派ぢやありませんん

か……それに私に取つちや私が初めてあなたを見た時あなたがこの着物を着てゐらしつたのですから特別に懐かしいのです。」

イリーナは顔を赧らめた。

「グリゴリー・ミハイリッチ、お願ひですからあの時もこの着物しか無かつたと云ふことを思ひ出させないやうにして下さいまし。」

「だつてこの着物は本當によくあなたに似合ひますよ。イリーナ・パウロウナ。」

「いゝえ、嫌な着物ですわ、嫌な着物ですわ、」

彼女は神經質らしく、長い軟かい卷髪をつゝきながら云ひ張つた、「あゝ、こんなに貧乏で穢なくつて！　何うしたらさつぱりしたことが出來るかしら！　何うしたらさつぱりとなれるかしら！」

リトウイノフは何と答へてよいか自分でも解らなかつたので、稍々彼女からわきに向いた。

と、唐突にイリーナが椅子から飛起きて兩手を彼の肩にのせ、

「それでもあなたは愛して下さいますか、グリーシャ？　愛して下さいますか？」かう囁きながら顔を彼にすりよせてまだ涙の乾かぬ兩眼を幸福の光に輝かして、「妾がこんな見すぼらしい着物を着てゐても愛して下さいますか？」

リトウイノフはいきなり彼女の前に跪いた。

女は彼の上に身を屈めて、「愛して下さいね、愛して下さいね、妾の可愛い救主。」と云つた。

斯うして一日一日と月日がたつて行つた。そして形式的の發表はまだなかつたが、またリトウイノフもイリーナの差圖を待つて公然と結婚を申込みはしなかつたが、(彼女は時々、お互にまだ結婚するには可笑しいほど若すぎるから少なくも數週間後まで延ばした方がいゝと云つてゐた。)それでも萬事は次第に結末に急ぎつゝあつて、未來は近づくに從つて次第に一層はつきり鮮やかに見えてゐたのだが、丁度その時思ひがけない出來事が起つて二人の夢と希望はさながら路傍の塵埃のやうに吹き飛ばされてしまつた。

八

其の年の冬、陛下が莫斯科に臨幸されて、毎日宴會ばかり續いたが、貴族會館でも常例によつて大夜會が開かれることになつた。そしてこの夜會の知らせは、政治新聞の報導によりてゞはあつたが、兎に角「犬場」の小さいオシニンの家にも屆いたことは事實であつた。一番に心を動かしたのは公爵であつた。そして直ぐさまイリーナを連れて行くことに定めた。陛下に見ゆる機會を逃がすのは殘念

だし、古い貴族としては斯んな時に其の場に臨むのは義務でもあると考へた公爵は、何時もの冷淡に似ず熱心に自分の說き主張した。夫人は公爵の說には頗る同感なのだが、何分費用がかゝるには氣を揉まざるを得なかつた。イリーナは「必要がないのですもの、差行きませんわ、」と云つて兩親が何う云つて聞かせても斷乎として反對を說つた。で老公爵はリトウイノフを頼み、彼から云ひ聞かせるやうにした。若い女が社交を嫌ふのはいけないと云ふこと、こんな經驗は取逃がしてはならないと云ふこと、彼女がこれまで何處に行つたこともなく、誰に會つたこともないことなどをよく云ひ聞かせるやうにした。リトウイノフはこれらの「道理」と彼女に說いてみようと承諾した。イリーナは彼が說き終ると凝と探る樣な目付でまじ〳〵と彼の顏を覗き込んで彼を極り惡らがらせた後着物の紐をいぢりながら靜かに口を開いた。

「あなた左樣した方がいゝと思つてゐらつしやるの？」

「え、……その方がいゝでせう、」とリトウイノフはおづ〳〵しながら答へた、「私はお父樣に賛成です……行かないなんてことがあるものですか……世間も見たり、あなたも見られたり、」かう云つてちよつと笑つた。

「見られたり、」と女は靜かに口眞似をして、「宜しい、ぢゃ行きますわ……だけど元はあなたが行けと

仰つてやつたのだと云ふことだけはおぼえでゐて下さいよ。」

「つまり私が……」とリトウイノフが云ひかけると、

「あなたが行けと仰つしやつたのです、」と繼つて、「そして最一つ條件があるのよ、あたはこの夜會に出ないと約束して頂き度いのです、」

「何故です？」

「妾さうして頂き度いの。」

リトウイノフは其を聞いて、

「そりや左樣いたしますよ……けれどもあなたが立派に着飾つて。皆んなを吃驚さしてゐらつしやるところを見ることが出來たら、何んなに嬉しいでせう……何んなに私も肩身が廣いでせう！」かう云つて彼は溜息をついた。

イリーナは笑つて、

「着飾ると云つたところが精々白い上衣ぐらいなものですよ。皆んなを吃驚させるつたつて……でも兎に角妾も左樣してみたいと思いますわ。」

「イリーナ、あなた怒つてゐらつしやるの？」

イリーナはまた笑つて。

「いゝえ、いゝえ！　何んで怒つてゐるものですか。だけど、グリーシヤ、」……（かう云つて女は凝と彼は見詰めた、彼は其の兩眼のうちに今まで見たことのない表情を見たと思つた。）それから低い聲で、「多分なるやうになるでせう」と云つた。

「だけど私を愛しては下さるのでせう、イリーナ？」

「愛してゐます、」と彼女は殆ど嚴肅なほど重々しく答へて男がするやうに自分の手をしつかりお握り締めた。

其の日からは毎日々イリーナは急がしけに衣裳を揃えたり髪を備へたりした。そして夜會の前日になると氣持が惡いと云つて凝と座つてゐることすら出來ず、誰もゐない處で、二度も涙を出して泣いた。リトウイノフに對しては何時もの微笑を見せてゐた……けれども彼に對する態度には昔の優しさはあつても何だかそゝつかしいところがあつて、暇さへあれば鏡に向つて自分の顏を眺めてゐた。愈々夜會の當日になると彼女は默り込んで蒼白くなつてゐたが、それでも取亂したところはなく、落着いてゐた。夜の九時にリトウイノフが彼女を見に來た。彼女が白い薄紗の衣裳を身に纏ひ、やゝ高く結つた髪に小さい青い花を飾ざして彼を迎へた時には、彼は驚いて聲をあげようとした位だつた。

彼女はそれほど彼の眼に年々似合はず美しく　立派に見えた。彼は思つた、「左樣で、今朝から急に大きくなつたのだ！　それにまあよく似合ふこと！　矢張り素性のせいなのだ！」イリーナはゆるやかに兩手を垂れ、微笑もしなければ氣取つた樣子もしないで彼の前に立ち、思ひつめた、殆ど大膽な視線を、彼ではなしに、彼女の眞つ直ぐの遙か向ふに注いでゐた。

「あなたはまるでお伽噺しのなかの王女のやうですよ、」と暫くしてリトウイノフが口を切つた、「まるで戰ひの前、勝利の前の戰さのやうです……あなたは私に夜會に行くなと仰つしやいましたね、」話し續ける彼の言葉を女は相變らず身動きもしないで聞いてゐたが、それは女が彼の言葉に耳を貸さないのではなく、他の內部の聲に耳をかたむけてゐたからである。「然しこの花を受取つて夜會に持つて行つて下さることはお拒みにならないでせう？」

かう云つて彼は女にヘリオトロープの花束を差出した。彼女は素早くリトウイノフに眼を呉れて、いきなり手を伸ばし、自分の頭の髪に挿した花をつまんで、

「あなたこれが慾しくはありませんか、グリーシヤ？　たつた一口あなたが仰つしやるなら、妾は斯んなものは皆んな取つてしまつて家に殘つてゐますわ。」

リトウイノフの心は張りさけるばかりになつた。イリーナの指先は、「早や髪に挿した花に觸れてゐ

た……

「まあ何うして其んなことを？」と彼は急いで氣の大きい應揚な心持でそれを制しながら、「私は利己主義者ぢやありませんよ……何んであなたの自由を束縛しませう……あなたの心がちやんと私に解つて……」

「よろしい、傍に來ちやいけません、着物が無茶になつてしまひますから、」と彼女はいら〳〵しながら云つた。

リトウイノフは當惑した。

「然しこの花束は受取つて下さるでせう？」

「頂きますとも、本當に綺麗ですわねえ。妾この匂ひが好きですの。……――これを記念にしてとつておきますわ……」

「あなたが初めて外に出て、初めて勝利を得られた時の記念としてね、」とリトウィノフが言葉を入れた。

イリーナは稍々身を屈めて鏡を覗き込んで自分の顏を眺めた。

「妾そんなに綺麗に見えますか？　あなたの、ひがめぢやなくつて？」

リトウイノフは頻りに褒めたててゐたが、イリーナは早や彼の言葉には耳をかたむけないで、貰つた花束を顏に近く持つたまゝ、またあの奇妙な、蔭の差したやうな眼を大きく見開いて遙か遠方を眺めながら、其のしなやかな紐の端を微風が肩の後ろに羽ばたくやうになぶるにまかせてゐた。

其處に姿を現した公爵は髮を綺麗に縮らして、白の襟飾を締め見すぼらしい黑のイヴニングコートを着て、ウラジミルのリボンに貴族の紀章をつけたのを釦の穴に飾つてゐた。其の後から夫人が現れたが、夫人は支那絹の古風に仕立てた衣裳を着て、母らしい嚴肅に心の動搖を隱して用もないのに娘の衣裳の皺を伸ばしてやつたりした。毛のふさ〳〵生えた、二頭の馬にひかれて古い四人乘の貸馬車が、拂ひもせず積るにまかせた雪の上に車輪を軋ませて入口の石段に着くと、可笑しな服を着た御者が走つて來て一生懸生になつて馬車の用意の出來たことを告げた……公爵と夫人は留守をする子供たちによく眠るやうに云ひ殘し、毛皮を、すつぽり冠りながら石段の上に立つた。イリーナは極く薄い短かい外套を着て……彼女は此の時何んなにこの小さい外套を憎んだらう！――默つたまゝ二人の後に從つた。リトウイノフは皆んなを外まで送つて出て、イリーナの最後の一瞥を待つてゐたが、彼女は見向きもしないで馬車に腰を卸した。

夜半頃、彼は貴族會館の窓の下を通つてみた。大きな燭臺の上に輝く無數の燈は赤い窓掛越しに華

やかな光を見せて、馬車に埋れた廣場には驕慢な、にぎやかな、心をとろかすやうなストラウスのウオルツの響きが流れてゐた。

翌日の一時にリトウイノフはオシニンの家を訪れた。家には公爵が一人ゐて、リトウイノフの姿を見るや否や、イリーナは頭痛がすると云つてゐるから夕方まで起きて來ないだらうと云ふことや、初めて夜會に出ると誰でも斯んなに氣分を惡くするものだから心配はないと云ふことなど告げ、それから佛蘭西語で、

「C'est très naturel, vous savez, dans les zeunes filles」

ウイノフは其の時公爵が何時もの樣に寬衣を着てゐないで上着をつけてゐるのを見た。「それに、」とオシニンは言葉を續けて、「あれも昨日の出來事で少しは心配してゐるのだらう！」

「出來事？」とリトウイノフが吃いた。

「左樣だ、出來事なんだ、de vrais événements. とても君には想像できないよ、グリゴリー・ミハロイッチ、quel succès ell o eu！ 宮中の者がみんなあれを見たからね！アレキサンドル・フエドロウイッチ公爵はあれを斯んな處に置くのは惜しい、何だかデヴオンシヤイア伯爵夫人のやうな氣がすると云つた。君も知つてゐるだらう……あの……有名な……それからブラゼンクラムフの老人は皆んなのゐ

る前でイリーナを la seine du lal と褒めて、紹介して貰ひ度いと云つた。それからあの人は自分の紹介を始めて己れが縣騎兵隊にゐた頃のことも憶えてゐて己れが今何をしてゐるかと訊ねたりした。あの伯爵は實に罪のない男で、adorateus du beau sexe だからね！ところが其ればかりぢやないんだ、妻もなか〳〵持てゝね、ナターリア・ニキチシュナのやうな人でさへ、あれと話をしてゐた……是れ以上何が望めるものか？ イリーナは tous les meilleurs cavaliers と一緒にダンスをしたが、其の連中は皆んな己れの方に遣つて來た……何の位ひゐたことやらさつぱり數が解らないほどだつたよ。其の連中が皆んな己れたちの周圍を取圍んで、マヅルカの時には皆んながあの子と一緒に踊らうとして聞かないのだ。或る外國の外交官はあの子が莫斯科の者だと聞いて皇帝に「陛下よ、décidément c'est moscou qui est le centrl de votre empire！」と云ひ、それから最一人の外交官は、「C'est une vraie révolution, 陛下 —— révélation か revolution です……兎に角そんなものです。」と云つたが、本當に左樣に違ひない。實際滅多にないことだつた。」

「でイリーナ・パウロウナは、面白さうに悅んでゐらつしやいましたか？」と手足を氷の樣にして聞いてゐたリトウイノフが訊ねた。

「そりや悅んでゐたさ、面白がらずにゐられるものか？ だが彼女はなか〳〵一目では見透かされな

い女だものだから、皆んなが己れに云つたよ、本當に不思議だ！ jamais on ne dirait que mademoiselle votre fille est à son premier bal と云つたよ。それからライセンバッハ伯爵……無論君はあの人を知つてゐるだらうが。」

「いゝえ、ちつとも知りません。聞いたこともありません。」

「己れの妻の從兄弟なんだ。」

「知りませんです。」

「金持でね、ペテルブルグで贅澤な暮しをしてゐる侍從なんだが、リウオニアでは何んな人でもこの人の言葉に從ふそうだ。其の人が今までは一向己れたちを見向きもしなかつたものだ……ところが、けれども己れはそれを悪く思ひはしないがね。J'ai rhammeur facile, comme vous savez. 其の人はまあこんな質なんだからね。ところが其の人がイリーナと一緒に處つて十五分ばかり、それより長くはなかつた。十五分ばかり話してゐたが後で己れの妻に斯う云つた、『ma cousine, votre fille est une perle, c'est une perfection. 皆んなが斯んな姪を持つてゐると云つて私を祝つて呉れますよ……』其の後でよく見るとね――其の人が非常に立派な人の處に行つてイリーナの方を見ながら何か頼りに話してゐた……其の立派な人もあれの方を見てゐた……」

よ……」

「それでイリーナ・パウロウナが一日起きて來られないのですか？」

「さうなんだよ。烈しく頭痛がするさうだ。それで彼女に代つて己れから君に宜しく云つてくれ、それから花、qu'on a trouvé charmant のお禮をしてくれと云ふことだつた。最つと休まして遣らなくちゃならない……妻は挨拶に廻つてゐる……それから己れは……まあ御覽の通りだ……」

公爵は咳拂ひをして次に何を云はうかと焦々頼りに考へてゐた。リトウイノフは帽子を取つてお邪魔をしても悪いから後程また病氣見舞に來ると云ひ棄てゝ外に出た。

彼がオシニンの家から二足三足出たと思ふと交番の前に綺麗な二人乘の馬車が止つてゐるのが眼についた。立派な服をつけた一人の御者が應揚に馬車の上から身を屈めて、フインランド出の巡査にパーウエル・ワシリエウイッチ・オシニンの家を訊ねてゐた。リトウイノフが馬車の内をちらと覗く、と其處にはむくれたやうに肥えた、皺の多い横柄な顔で、希臘鼻と意地の悪るさうな口元をしたちよつと見ても非常に偉さうな中年の紳士が一人黒貂の外套にくるまつて座つてゐた。

九

リトウィノフは翌日まで訪問を延ばした方がよからうと思つて、後程また來ると云ふ約束を守らなかつた。十二時頃。彼にとりては最早や親しみの深い客室に行つてゐると、其處に末の妹のウイクトリンカとクレオパトリンカがゐた。彼は二人に挨拶してイリーナの病氣はよいか、逢つてもよいかと訊ねてみた。

「イリノチカはねえ、母ちやんと一緒に他處に行つたの、」とウイクトリンカが答へた。まだ舌がよくは廻らないのだが、それでも妹よりは發達してゐた。

「えツ……他處に行つた？」リトウイノフは心の底に冷たい、戰慄を感じた、「今頃は姉さんが皆なさんの世話をしたり本を讀んで下さつたりするのぢやないの？」

「イリノチカは最う本を讀んで下さらないの、」とウイクトリンカが答へると後からクレオパトリンカも、「最う讀んで下さらないの、」と口を添えた。

「お父さんはゐるの？」と訊ねるとウイクトリンカが、

「お父さんはゐないの。イリノチカは病氣でね、一晩中泣くばつかりしてゐたの……」

「泣くばつかり？」

「えゝ、泣くばつかり……イエゴロウナが云つたの、そして目を眞つ赤に泣き腫らしてゐたつて……」

リトウイノフは二度ばかり部屋の内をぶら〳〵歩いてみたが、戀て寒さうに身顫ひをして自分の家に歸つた。彼は丁度高い塔から下を見下す時の樣な心持を經驗した。何だか頭がわく〳〵して眼が眩むやうで、船暈にでも襲はれてゐるやうな氣がした。懷い發熱と鼠の樣に走る思ひ、幽かな恐怖、麻痺した期待、殆ど意地の惡いと云つてもいゝ、妙な好奇心、沈んだ胸の碎かれた涙の重さ、無理に唇に浮べた空しい微笑、誰に向つてともなく祈る無意味な祈り……おゝ、總てこれらのものが何んなに辛く、厭はしかつたらう！「イリーナは己れに逢ひ度くないのだ、」この考へが彼の頭に繰返し、繰返し歸つて來た、「それは確かだが、何故だらう？　あの緣忌の惡い夜會で何んな事があつたのだらう？それからまた何うして斯んなに急に萬事が變化したのだらう？　斯んなに急に……」人と云ふものは、死が急に來ることは心得てゐるが來るまでその急なことに無感覺でゐるものだ。「己れにことづけもしなければ、譯を說明しようともしないのだ……」

「グリゴリー・ミハリッチ、」と耳の傍で力のある聲がした。

リトウイノフが顏を上げると眼の前に召使が手紙を持つて佇んでゐた。見ればイリーナの字だ……彼はまだ封を切らないうちから悲哀の豫感を覺えて、さながら打擊にすくむ人の樣に、顏を胸に埋めて肩をすぼめた。

臍て元氣を出して思ひ切つて急に封を切つてみた。小さい一枚のノートペーパーには斯う書いてあつた。

「許して下さいね、グリゴリー・ミハリッチ、二人の仲も今はこれまで、妾はこれから、ペテルブルグに參ります。悲しくてたまらないのですが、今になつては仕方がありません。是れが妾の運命なんでせう……いや、自分のことは云ひますまい。妾の豫想はとう〳〵本當になりました。妾を許して、忘れて下さいましね。妾はつまらない女です。何うか氣を大きく持たれて、妾に會はうとなさらないで下さい。」

リトウイノフは數行に書かれたこの手紙を讀み終つてから、誰かに胸でも叩かれたやうに靜かに長椅子に身を凭たせた。彼は手紙を落としては、また取り上げて讀み直し、「ペテルブルグへ、」と呟いてはまた落した。たゞそれだけだつた。彼の心には平安な感じさへ起こつて手を後ろに廻はして頭の下の枕を直したりした。「死ぬる樣な傷を受けた者は慌てはしない、」と彼は思つた、「己れの處に來たと同じやうに、己れから去つたのだ。皆んな自然なことなんだ。己れは何時も斯うなるだらうと思つてゐた……」（彼女は自分を欺いてゐるので、斯うなると思つたことは少しもなかつたのだ。）「泣くばかりしてゐた？……イリーナが泣いてゐた？……何が辛くて泣いたのだらう？　なあに、己れを愛してはゐな

かつたんだけれどもあんな性質の　だからこれが當り前なんだ。イリーナ——イリーナはつまらない女……左樣なんだ！」（彼は苦笑ひした）「イリーナは自分の中に何んな力が潜んでゐるか自分でも知らなかつたんだ——それが夜會に出て初めて自分の力が解つたもんだから、最う下らない學生なんかと一緒になられるものか？——己れには何もかもすつかり解つた。」

けれどもまた彼は女の優しい言葉や、頬笑みや、それからあの眼、永久に忘れられもしなければ再び見ることも出來ないあの眼、彼の眼と出會つたゞけで溶ろけるやうに輝いたあの眼を思ひ出した。彼女の素早い、臆病な、燃えるやうな接吻を思ひ出した——忽ち彼は烈しい啜泣に襲はれた。何もかもめちや〳〵に毀してしまひ度いやうな物狂はしさに、息も詰るほど顏を押つけて、心行くばかり烈しく、痙攣的に、恨めしさうに啜泣きしては、熱い頬を長椅子の枕に當て、それをぎゆうと齒で噛みしめるのであつた。

あゝ！　リトウイノフが昨日見た馬車の中の紳士はオシニン公爵の從兄弟の金持の侍從ライセンベツハ伯爵であつたのだ。最高の地位を占めてゐる或る人々に與へたイリーナの印象を見て取つた伯爵は恐らくそれから導き出し得べき利益を考へて、物事に根氣强い物馴れた宮中の人として早くも胸中に或る計畫を立てたのだ。彼はナポレオン流に一氣に事を行はうと決心した。「あの珍らしい子をペテ

ルブルグの己れの家に連れて歸らう。」と彼は考へた、「そして己れの相續人、構うものか、己れの全財産の相續人にしてもいゝ、他に子供がないのだから。あの子は己れには姪に當る人だし、妻だつて一人で淋がつてゐるのだ……それに客室に美しい顏が見えるのは何時だつた惡くないものだ。……さうだ〳〵……さうしやう、是れは思ひつきだ、是れは思ひつきだ！」彼は先づ兩親を眩惑させ、困亂させ、納得させねばならなかつた。「何しろあの家の人は食ふにも困つてゐるのだから、」……伯爵は「犬塲」に急ぐ馬車の中でいろ〳〵考へた……「屹とそんなに難かしいことは云はないだらう。それに餘りくよ〳〵云ふ質でもないらしい。約束のしるしに幾らか金を出すことにしよう。本人は？　本人は承知するだらう。蜜は甘い……あの子もそれを昨夜味はつたのだから。己れの一時の氣まぐれかもしれないが、それでも構ひやしない。あの人たちに甘い目を見せてやるだけだ……馬鹿。手をかへ、品をかへて……話してみよう……御決心しられないなら他の方面から選びます……孤兒……なら一層都合がいゝでせうと云つてやる。承知か不承知か……二十四時間の中に話を定める……und damit Punctum.」

斯んな言葉を唇に含んで伯爵は公爵の前に出た。伯爵は昨夜の夜會の時に訪問する旨を告げてないのだ。この訪問の結果については、此處に長たらしく書く必要があるまい。伯爵の豫言は間違つてゐ

なかつた。公爵も夫人もごく碎けた人で幾らかの金も受取り、イリーナは約束の時間がつきない中に承知してしまつた。彼女はリトウイノフと別れるのを悲しんだ。彼女は彼を愛してゐた。そして彼に手紙を出して後は寢床の中でとめどもなく泣きつゞけて窶れて蒼白くなつてゐた。けれども一月の後には公爵夫人は彼女をペテロブルグの伯爵の家に連れて行つて、伯爵夫人にまかせた。伯爵夫人と云ふのは非常に親切な人だつたが牝鷄の樣に氣の小さい人で、顏附も何うやら牝鷄に似たところがあつた。

リトウイノフは大學を途中で止めて田舍の父の家に歸つた。心の傷も少しづゝ癒えて來た。最初の中はイリーナのたよりも聞かなかつたし、また實際ペテロブルグやペテロブルグの社交界に緣のある話は自分からも避けるやうにしてゐた。が段々彼女の噂……惡い噂でなしに不思議な噂……が立つていろ〳〵な評判を聞くやうになつた。光明に包まれた若いオシニン公爵の令孃の名は特別な色彩に彩られて段々田舍の方にまで聞こえて來るやうになつた。人々は丁度且つてウオロチンスキー伯爵夫人の名を話したと同樣に、彼女の名を好奇心と、尊敬と、羨望を以つて話した。驕て彼女の結婚の噂が聞こえた。けれどもリトウイノフはこの噂に大した注意も拂はなかつた。彼は早やタチヤーナと婚約してゐたのであつた。

是れで讀者はリトウイノフが、「あの女かしら？」と叫んだ時に何を思ひ出したのかすつかりお解りだと思ふから、またメーデンに歸つて此の話の切れた糸をつなぐことにしよう。

＋

リトウイノフが寢入つたのは非常に遲くなつてからであつたが目は早くから醒めて、彼が寢床を拔出したのは太陽が今しがた昇つたばかりの時であつた。窓から見える黑い山々の頂は霞のやうな紫色に麓を取卷かれながら晴れた大空に、くつきり浮び出してゐる。「あの木立の蔭は何んなに涼しいだらう！」かう思ひながら彼はいそ〳〵と服を着て、昨夜見た時より一層綺麗に咲き誇つた花束に何の氣もなく眼を呉れながら、杖を取つて有名な「崖」の上にある「古城」の方に足を向けた。新鮮な朝の空氣は爽やかに彼を撫で〻彼を元氣づけ、彼を宥めた。彼は肺臟に一杯息を吸込みながら大膽な足つきで進んだ。血管には青春の力强い健康が波打つて、彼が輕い足どりで踏みつける土地でさへ、何だか彈力があるやうに思はれた。一歩一歩と進むに從がつて一層氣輕になり、一層愉快になつて來た。砂の小道を圍む繁みにはまだ露があつて路傍の樅の木立は其のあらゆる梢の先に春の生々した線に燃える芽を吹き出してゐた。「氣持がいゝなあ！」彼は幾度も心の中で斯う呟いた。

ふと聞き覺えのある聲がするので向ふを見るとウオロシロフとパンバエフが遣つて來る。其れをちよつと見たゞけで彼は戰慄した。そして教師を避ける小學校の生徒のやうに急いで繁みの中に身を隱した…「神樣！」彼は祈つた、「何うぞあの同國人を彼方に行かして下さい！」彼は此の時、若し彼等に見つけられなかつたら何んなに澤山の金を出してもいゝと思つた……そして實際彼等は氣がつかずに行き過ぎた。神樣も慈悲深かつたのだ。ウオロシロフは例の自信の强さうな軍隊的の聲で中世式建築のいろ〳〵な樣式を說き、パンバエフはたゞ「ふん〳〵」と肯いてゐた。それでみると何うやら長い間ウオロシロフが頻りに饒舌りたて〻、好人物の熱狂家のパンバエフも小々五月蠅くなつてゐるところらしかつた。リトウイノフは大分暫く遠くなり行く二人の足音に耳を澄ましてゐたが、高くなつたり低くなつたりする說明の聲の調子は長い間彼の耳にとゞいた。聽てあたりが元の靜かさに歸るとリトウイノフはほつと溜息をして繁みから出てまた歩きだした。

彼は三時間ばかり山を彼方此方と歩き廻つた。道を離れて岩から岩に飛んだり、滑らかな苔の上を辷つたり、時には樫や山毛欅の木影の岩に腰かけて羊齒の一杯に生え繁つた中を絶えまなくちよろちよろ流れる水の音を聞きながら樂しい空想に耽つたり、心地よい木の葉の戰きや淋しい一羽の、つぐみの鳴聲に耳を傾けたりした。間もなく輕い快い睡氣に襲はれて撫でられるやうに居睡り始めた……と

また微笑しながら眼を開いて金色と綠色に輝く森や搖らぐ梢を眺めた……そしてまだ微笑しながら眼をとじた。やがて彼は朝飯が欲しくなつたので古城の方に歩いて行つた。其處では五六枚の銅貨で珈琲入の良い牛乳を一杯飲めるのだ。彼が其處の古城の前の平場に並べてある小さい白塗の食卓に座らうとすると、丁度其の時重々しい馬の足音が聞こえて無蓋の馬車が三臺着いて、其の內から大勢の貴婦人や紳士たちが飛び降りた……リトウイノフは彼等が佛蘭西語は話してゐても露西亞人だと直ぐに覺つた……皆んな佛蘭西語を話してゐればこそ解つたのだ。婦人たちはなか〳〵戀つた優美なものを身に纏ひ、紳士たちは今では餘り皆んなの着ない體に喰ひついた上衣と胴衣を着込んで、贅澤な灰色の袴を穿き、頭には艶のいゝ都會風の帽子を冠つてゐる。皆んなが細い黑い襟飾を頭に卷いて、物ごしに何處やら軍隊的なところが見えた。それも其の筈、彼等は軍人なのだ。リトウイノフは此の若い將校たち……位置から云つても位から云つても最も高い社交界にある人たちの遊散の一行に出會つたのである。彼等の身分の高いことは其のたしなみのいゝ寥揚なところにも、愛想のいゝ謙遜した微笑にも、無頓着な表情にも女らしく肩を動かしたり、體を搖すつたり、膝をまげたりするところも、總ての點に現れてゐた。從つて來た人達に愛想よく鹿爪らしくお禮を云ふ聲にもそれが現れてゐた。是れらの將校達は皆んなふ綺麗に顏を剃つて、貴族や近衛の純粹な香に高慣な葉卷の煙の香や驚くべ

き patchouli の香を混へて、其の手も貴族らしい白くて大きい手で象牙のやうなしつかりした爪があつて、口髭はまるで磨き立てたやうで、齒並は輝き、頰の皮膚は薔薇色で、頸の皮膚は青ずんで非常に綺麗であつた。或る者はいそ〳〵と、或る者は濟ましてゐたが、育ちのいゝしるしは彼等の總てに現れてゐた。彼等は誰も彼も自分の威權を深く意識し、官界に於ける將來の光輝を豫想し、「そして外國を旅する者によくある「構ふものか」と云ふ無頓着な風を幽かに見せながら、のんきに、もつたいぶつてゐた。そして一同は大變騒がしく迎山な物音をさせながら、てんでに自分の座を占めて丁寧な給仕を招いた。リトウイノフは急いで一杯の牛乳を飲んで勘定拂ふのもそこ〳〵に帽子を冠つて將校たちの傍を通つて出ようとすると……

「グリゴリー・ミハリッチ、」と女の聲がした、「妾がお解りになりませんですか？」

彼は思はず立止まつた。其の聲……其の聲は昔彼の心臟を度々波打たせた聲であつた……彼は振返つてイリーナを見た。

彼女は食卓に向つて腰をかけ、兩手を近く引きよせた椅子の背にのせて、頸を傾げながら懷しさうに、殆ど嬉しさうに彼を眺めてゐた。

リトウイノフが十年前に彼女を最後に見た時より女の樣子は大分變つてゐて最早や娘ではなく立派

な、大人になつてはゐたが、それでも彼は一目見て彼女だことを知つた。細つそりした姿を今は完全に發達し切つて、背低い撫肩であつたものが、今は伊太利の古い宮殿の天井にある女神をふはせるほど立派に發達してゐた。とはいへ其の眼は昔の通りであの莫斯科の小さい家にゐた時に誘めたと同じ目差で彼を眺めてゐるやうは思はれた。

「イリーナ・パウロウナ、」と彼はおど〳〵しながら呼んだ。

「お解りになりましたか？　まあ嬉しい！　ほんとに……」

と云ひかけて急に口をつむいでさつと顏を幽かに赧らめながら身を引いた。

「まあ好い處でお目にかゝりました、」と今度は佛蘭西語で言葉を續けて、「良人に御紹介いたしませう。これは妾の子供の時分のお友達でリトウイノフさん、これは妾の良人のワレリアン・ウラジミロウイッチ・ラトミロフで御座います。」

青年將校の中の最も端麗な一人が席を立つて頗る慇懃に頭を屈めた。一座のものは幽かに眉を顰めた、と云ふより寧ろ軍人以外の見知らぬ人とかゝり合ふのを嫌ふやうにちよつと身を退いた。婦人たちは目を細くして笑つたり、當惑したやうな風をしたりした。

「ベーデンには永らくゐらつしやいましたか？」ラトミロフは露西亞離れのした洒れた調子で訊ね

た。彼は自分の妻の小供時代の友達に向つて何を話したらいゝか迷つてゐるらしかつた。

「いえ、永らくぢやありませんです！」とリトウイノフが答へた。

「でこれからずつと御逗留でございますか？」と丁寧な將軍は話を續けた。

「まだ何とも定めてゐませんので。」

「あゝ！　そりや御結構ですね……そりや。」

將軍は言葉を切つた。リトウイノフも默つてゐた。二人とも帽子を手に持つたまゝ身を前に屈めてにや〳〵笑ひながら相手の頭の頂邊を眺めてゐた。

「D'ux gendarmes un beau dimanche,」と小聲で誰かゞ唄つた。無論それは調子はづれで、露西亞の貴族で調子はづれでない歌を唄ふ人は滅多にないのだ。其の歌の主は鈍い眼付の黄色い顏をした將校で、自分で自分の風彩が氣に入らなくては仕樣がないと云つた風に何時も焦々した表情を顏に浮べてゐた。一行の中で薔薇色の顏色をしてゐないのはこの人が一人だつた。

「あなた何うしてお座りにならないの、グリゴリー・ミハリッチ、」と暫らくしてイリーナが口を切つた。

云はれてリトウイノフも腰をかけた。

「I say, Yvetiez, give me some.」と他の將校が英語で云つたが、其の男は若くはあるが早やでつぷり肥えて宙を見詰めるやうな落着いた目差をして、豊かな絹のやうな頬鬚を雪のやうに白い指先でつゝいてゐた。ラトミロフは其の男に銀製のマッチ箱を渡した。

「Avez vous des papiros?」貴婦人の一人が覺束ない口つきで訊ねた。

「De vrais papelitos, comtesse.」

「Deux gendarmes un beau dimanche.」とまた鈍い眼をした將校が興奮して唄つた。

「是非いらしつて下さいまし。」イリーナは其の間にリトウイノフに云つた、「妾たちは歐羅巴旅館に逗留してゐまして、四時から六時までは何時も宿にゐますの。隨分しばらくでございましたわねえ。」

リトウイノフはイリーナを見た。彼女も眼を伏せなかつた。

「はあ、しばらくです……莫斯科にゐました時分から。」

「莫斯科に、さうねえ、莫斯科に、」と彼女は急に繰返して、「何卒宿にいらしつて下さいまし、昔のお話でもしようではございませんか。お氣づきにならないかも知れませんか、あなたは其んなにお變りになつてゐらつしやらないやうですわ。」

「さうですか？　然しあなたは隨分お變りになりましたよ、イリーナ・パウロウナ。」

「妾は老けてしまひました。」

「いゝえ、其んな意味ぢやないんです。」

「イレーヌ？」黄色い髪に黄色い帽子を冠つた婦人が隣の士官と何やら囁きながらくつ〳〵忍び笑ひをした後で訊ねるやうな調子で呼んだ。「イレーヌ？」

「妾は年を取りました、」イリーナは其の婦人に答へないで言葉を續けた、「でも變つてはゐませんわ。いゝえ、いゝえ、妾ちつとも變つてはゐませんわ。」

「Deux gendarmes un beau dimanche!」　また例の唄が聞こえた。氣の短かい將校はこの有名な歌の初めの一句しか覺えてゐないのだ。

「まだ少々突き立ちますね、閣下、」と煙鬚のある肥えた將校が上流社會では誰知らぬ者もない或る面白い話に關係したことを大きな幅の廣い聲で云つて、無作法にちよつと笑つてまた宙を見詰めた。一座の人たちも一緒になつてどつと笑つた。

「君も情ない男だねえ、ボリスー」とラトミロフが低い聲で云つた。彼はこの言葉を英語で云つたので「ベリース」と云ふ名さへ英吉利風に發音した。

「イレーヌ？」黄色い帽子の婦人が三度目にまた訊ねるやうな調子で叫んだ。イリーナは吃となつて

其の婦人の方に振向いて、

「Eh bien? quoi? que me voulez—vous?」

「Je vous dirai plus tard,」と其の婦人が一言一言切るやうに答へた。此の容貌の悪い女は何時も言葉に念を入れて顰め面をしながら話す癖があるので或る口の悪い人から「何もない空に向いて顰め面をしてゐる、」と云はれたほどだ。

イリーナは腹立たしさうに眉をひそめて肩を揺すつた。

「Mais que fait donc Monsieur Verdier? Pourquoi ne vient-il pas?」と一人の婦人が大露西亞特有の癖で長く引つぱりながら云つた。これは佛蘭西人の耳には耐へられない癖だ。

「Ah, voo, ah, voo, mossoo verfew. mossoo verdew.」とアルザマス生れの他の夫人が嘆息した。

「Tranquillisez-vous, mesdames.」とラトミロフが口を出した。「monsiur verdier m'a promis de venir se mettre à vos pieds.」

「ぱゝツ!」……婦人たちは扇を使つた。

給仕が麦酒の杯を運んで來た。

「Baierisch-bier?」と頬髭の將校は故意と低音で驚いたやうに訊ねた……「guten morgen」

「でバーウェル伯爵はまだゐるのか?」と一人の青年將校が冷淡に無造作に他の將校に訊ねた。

「あゝ、」と他の將校も冷淡に答へて、「mais c'est provisoire. セルジが其の代りに來るんださうだ。」

「ぽう!」と始めの男が齒の間から漏らした。

「あゝ、」と二番目の男もかい聲で云つた。

「僕には何うしても解らない、」と唄を歌つた將校が始めた、「何うしてポールはあんなにいろ〳〵の理屈を並べて自分を辨解しやうとするのだらう。無論あの男は商人を陳分烈く遣つつけはした。Il fait rendre gorge……けれどもそれが何うしたと云ふんだ? あの男にも理屈はあるんだから。」

「あの男は怖がつたんだよ……新聞に出されるのをね、」と誰かゝ呟いた。

宿性の將校は熱くなつて、

「そりやあんまり酷すぎる! 新聞に出る! 若し僕だつたら新聞には稅や肉やパンの事や、靴や毛皮の廣告の他には何にも出さしてやりはしない。」

「それから或る紳士の財産を競賣に……」とラトミロフが口を出しかけると、

「そりや斯んな場合にはねえ……然しベーデンの古城で斯んな話をしちや面白くないね。」

「maispas du tout pas du tout!」と黄な帽子の女が云つた、「j'adore les questions politiques.」

「madame a saison.」と頗る氣持の好い女のやうな顔附をした將校が云つた、「何んな話をしたつて構ふものか……幾らバーデンだつて。」

そして其の將校は丁寧さうな眼をリトウイノフに呉れながら謙遜したやうな微笑を浮かべて、「堂々たる男子は何んな場合でも自分の信ずるところを隠しちやいけない。君も左樣は思はないですか？」

「勿論さ、」と短氣な將校も間接にリトウイノフを誘ひ出すやうに眼を注いで、「けれども私は其の必要があるとは思はない……」

「いや、いや、」と謙遜家の將校は例の優しい口附きで、「一の友人のワレリアン・ウラジミロウイッチ、ね、あの人が今も或る紳士の地所を買つてゐると云ふ話があつたのだがそりや本當なのかい？」

「だつて今そんなものを賣らうたつて、誰も買ふ人はありやしないよ！」と短氣の將校が叫んだ。

「恐らく、……恐らく。それだからこそ我々はこの事實……この悲しむべき事實を始終高唱しなければならないのだ。我々は破綻におちゐつてゐる……それはまあいゝ。我々は乞食をしてゐる……これは疑のない事實だ。けれども我々大地主はまだ一つの主義を持つてゐる……un principe を持つてゐる。この主義を保持して行くのは我々い義務なんだ。御免なさい、奥樣、あなたハンケヂを落しましたよ、例へば非常に賢明な人が暗い思想に襲はれた時なんかには、我々は市民としてこの指を持つて

（將校は自分の指を揚げて、）人々が墮落しようとしてゐる溝を示してやらなければならない。我々は氣を附けて、尊敬のこもつた、しつかりした心を持つて、「引つ返せよ、引つ返せよ、」……斯う云つてやらなくちやならないのだ。」

「だつて引つ返すことはないぢやないか。」とラトミロフが難かしさうに云つた。

おとなしい將校はたゞ齒を出して笑つたぎり。

「さうだ。君、遠く引つ返せば引つ返すほどいゝのだ。」

將校はまた慇懃にリトウイノフに眼を注いだ。リトウイノフは最うたまらなくなつた。

「ぢや私たちは「七貴族」の時代まで引つ返すのですか、閣下？」

「なあに、忌憚なく云ふが、我々は遣り直さなくちやならない……さうだ……總てのことを遣り直さなくちやならないのだ。」

「農奴の解放も？」

「農奴の解放も……出來るだけはね。On est patriote ou on ne l'est pas.『自由もか？』と訊ねる人があるかも知らんが、一體自由と云ふものが、人々に尊敬されてゐるだらうか？　人々に訊ねてみたま

「試みに、」とリトウイノフが口を出した、「その自由を元の通りに取り去つてみるといゝのです。」

「Comment nmrez-vous ce monsieur?」とその將校がラトミロフに囁いた。

「此處で君達は何を議論してゐるんだ?」と肥えた將校が不意に云ひ出した。この人は一行の甘やかされた坊ちやん役を勤めてゐるらしい。「新聞に出てゐたことが? 新聞の三文記者のことか? 新聞記者については僕にもなか〳〵面白い話があるんだが、云つて聞かさうか。其奴が僕の惡口を書いたと聞いたもんだから、直ぐ其奴を呼びつけたのさ。僕の前に遣つて來たよ。『何うして斯んな惡口を書いたんだ?』 愛國心が君には勝ちすぎてゐるのか?」と訊ねると、『えゝ、勝ちすぎてゐます、』と云ふものだからね、僕も『で君は金が欲しいのか?』と出ると『欲しい』と來た。僕はいきなり杖の頭を其奴の鼻先に突きつけて、『是れも欲しいか?』訊ねたら、『そりや嫌です、』『まあ嗅ぎたまへ、僕の手は綺麗なんだから。』『だつて嫌なんですからね。』『ところが僕は是れが大好きなんだ、尤も自分の爲ちやないだけれどね。どうだ、君にはこの比喩が解つたか?』『解りました。』と其奴が答へた。『解つたらこれからは氣をつけておとなしくするのだ。この一留を遣るから歸つて何時までも僕のことを有難く感謝しろ。』かう云つて新聞記者を歸してやつた。」

將校は斯う云つて笑ひ、一同もどつと笑ひころげた……たゞ一人イリーナだけは微笑すら其の顏に

浮べないで、暗い顏をして其の話をする人を見てゐた。

謙遜家の將校はベリースの肩を叩いて、

「この先生、出鱈目を云つてるぜ……杖で人を嚇したなんて……、君は杖を持つちやゐないぢやないか。b'est vous faire rire ces dames. 面白いことを云つてみたのだ。だがそんなことは何うでもいゝ。僕は全々元に引つ返す必要があると云つてゐるのだ。誤解しちやいけない。僕は所謂進歩に反對するのぢやない。たゞあの大學や、坊主の學校や、其他の一般の學校や、學生や、坊主の息子や、平民や總てこんな蠅の樣な連中、 tout ce fond du sac! la petite psopriété, pire que le prot'tariat (彼は此處を殆ど懶いやうな幽かな聲で云つた、) voilas'v qui m'effraie……其處に我々は線を引かなくちやならない。また人々にも線を引かせなくちやならない。」(また彼はリトウイノフに優しい眼を呉れて、)

「さうだ。線を引かなくちやならない。無論我々は一人として何物かを要求したり、懇望したりする者はないのだ。例へば地方廳……是れを誰が懇望する? 君懇望するか? 君は、君は? 奥樣たちは? 君たちは君たち自身だけではなく、我々全體を支配してゐると云ふことは解りきつたことなんだ。」(彼は面白さうに立派な顏に輝くやうな微笑を浮べた。)「親愛なる諸君、何うして我々は民衆の機嫌を取らなければならないんだ。民主主義は諸君の氣に入り、諸君の意を迎へ、諸君の目的の方便

となるかもしれない……けれどもそれは二重の武器なんだ。やつぱり昔の通りがいゝのだ……一層安全なのだ。民衆と語り合つてはならない。貴族主義を信じなくちやならない。其處にのみ勢力は見出されるのだ……實際その方がいゝのだ。それから……進歩……僕はこれには何の反對もしない。たゞ然し法律家と、陪審官と、選擧の官吏だけは御免蒙りたい……たゞ規則に觸れてはならない、何よりも規則に觸れてはならない……さうすれば橋を架けてもいゝ、波止場や、病院を拵へてもいい、街に瓦斯をつけても何の差支へもないのだ。」

「ペテロブルグは、隅から隅まで燒けたから、君の云ふ進歩があつたのだね！」と短氣の將校が鋭く云つた。

「さうさ、君は隨分意地惡だね、」と肥えた將校は退儀さうに頭を振つて、「君は檢事長には向くが、僕の思ふところでは、avec Orphée aux enfers le progrès a dit son dernier mot.」

「Vous dites toujours des bêtises,」とアルザマス出の婦人がくつ〳〵笑つた。

將校は嚴然として、

「Je ne suis jamais plus sérieux, madame, que quand je dis des bêtises.」

「あれはウエルディエさんが幾度も云はれた言葉ですわ、」とイリーナが小さい聲で囁いた。

「De la poigne et des frures, de la poigne surtout.」と肥えた將校が叫んだ、「これを露西亞語に譯すとおとなしくはせねばならぬが、拳は慎しまんでもいゝと云ふのだ。」

「あゝ、君は惡者だ、度し難い惡者だ、」と課稅家の將校が口を入れた、「何ぢぞ御婦人たちはこの人の言葉はお聞きにならないで下さいよ。吠える犬は噛付きません。この人はのろけるより他のことはしないのです。」

「だがそりや餘り酷すぎるよ、バリース、」ラトミロフは自分の妻と眼を交した後に口を出した、「冗談も惡るくはないが、そりや餘り酷すぎる。進歩は社會生活の一つの現象で、これは我々の忘れてはならぬ一つの徵候なんだ。我々が見なくちやならぬ一つの徵候なんだ。」

「さうだよ、肥えた將校は鼻に皺を寄せて、「君が政府に反對してゐる事は皆んな知つてゐるからね。」

「そんなことがあるものか……政府に反對するなんて！　然し我々は事實を認めるのを拒む譯には行かないからね。」

バリースはまた指先を頬髯の中に突込んで宙を見入つた。

「社會生活は極く重要なものだ。何故ならば國民の發展に於て、云はゞ國家の運命に於て……」

「ワレリアン、」とバリースは邪魔をして、「Il y a des dames ici. 君の口からそんなことを聞かうとは

思はなかつたよ。君は委員に取入らうとでも思つてゐるのかい？」

「ところが有難いことには其處の扉は締まつてゐる、」と短氣の將校が横口を入れて、「Dans un beau dimanche.」と歌つた。

ラトミロフはカムブレーの麻のハンケチを鼻に當てゝ品よくこの議論から身を返いた、謹慎家の將校は、「惡者！　惡者！」と續けて云つたがバリースは「何もない空に向いて顰め面をしてゐる」婦人の方に向直つて聲も低くせず、顏の表情も變へないで、さながら女に身も魂も打込んで女の爲に死ぬるほど苦しんでゐるかのやうに、何時になつたら「自分の願ひを聞いてくれるか」と云ふやうな質問を始めた。

この會話の間リトウイノフは斷えず次第々々に不安が增すのを感じた。彼の自負心、彼の純粹な平民の自負心を頻りに頭をもたげて來るのを感じた。

つまらない官吏の息子たる彼に、これらのペテロブルグの貴族の將校たちと、何處に共通な點があらう？　彼はこの人たちの憎む總てのものを愛した。彼はこの人たちの愛する總てのものを憎んだ。彼にはこの事が非常に强く意識され、何處までも執念くそれを感じた。彼はこの人たちの洒落を無味に感じ、言葉の調子を耐えがたきものに思ひ、總ての身振を嘘偽に思ひ、其の滑らかな辯舌にさへ胸

の惡くなるやうな輕蔑の念を起こした……それにも拘らず彼はこの人たちの前、この敵の前で顏を赧めざるを得なかつた。「あゝ！　嫌やなこつた！　已れは邪魔にされ、馬鹿にされてゐるのだ。俺れは一體何の必要があつて斯んな處に坐つてゐるのだ？　直ぐ出よう、直ぐ出よう、」かう考へた彼はイリーナの存在も引き止める力にはならなかつた。彼女も同樣に彼の心に鬱陶しい氣持を起こさせたのだ。彼は立ち上つて出かけやうとした。

「早やお歸りになるのですか？」とイリーナが云つたが、ちよつと考へた後で無理に引き止めやうともせず、また何時か是非逢ふ約束を彼に求めただけだつた。ラトミロフは例の至極慇懃な物越しで握手しながら別れの挨拶をして、平塲の端まで見送つて來た……けれどもリトウイノフがまだ道の角を曲り切らない內に後の方でどつと笑ふ聲がした。この笑ひ聲は彼には何の關係もないもので、先程から待ちもうけてゐられたディエルゲイエがチロル製の帽子に靑いブラウズを着て驢馬に跨りながら不意に平塲に姿を現したからであつた。それにも拘らず彼は頰に血を湧き上らせて、非常な不愉快な氣になり、苦蟲を嚙んだやうに唇を結んで、「嫌な俗惡な奴等だ、」と呟いた。そしてほんの僅かの間しか一緒にゐなかつた人達に對して斯んな批評を加へるのは無理だと云ふことなぞは考へもしなかつた。イリーナが墮ちて行つたのは斯んな社會なのか。イリーナ、曾ては彼のものであつたイリーナ！　それ

が斯んな社會に活動し、生活し、勢力を得てゐるのか。そして、その爲に彼女は自分の人格の尊嚴や、心の中の最も高尚な感情も犧牲にしてしまつたのだ……がこれは當り前のことなのだ、彼女にこれ以上の運命をうける資格のないのは解り切つたことなのだ！　彼の今後の目的などを女が先刻訊ねなかつたことを何れほど彼は喜だんらう！　若し訊ねたら彼は「彼等」の前で「彼等」に自分の考へを發表せねばならなかつたのだ。……「幾ら何だつてそんなことは嫌だ！」かう云ひながら、リトウイノフは新鮮な空氣を胸に深く吸ひ込んでさるで駈るやうにしてベーデンの方に降りて行つた。彼は許嫁の可愛い、善良な、尊いタチアーナのことを思つた。彼にとりて彼女が何れほど純潔に、高尚に、眞實に思はれただらう！　何んなに混り氣のない、優しい心で彼は其の女の顏や、言葉や、身振を思ひ出し……何んなに其の女の歸つて來るのを待ち遠く思つただらう！

烈しい運動は彼の神經を和らげた。彼は家に歸ると卓子に向つて本を取り上ぎたが急に身顫ひして其れを落した。何うかしたのだらうか？　何うしたのでもない。ただイリーナ……イリーナ……思ひがけもなくイリーナに出逢つたのだが何だか驚くべき、不思議な珍らしいことのやうに考へられたのだ。斯んなことが有り得ることだらうか？昔のイリーナに出逢つて話をするなんて、……それからまた他の人達には嫌な俗惡な點があるのに彼女だけにはそれが少しも見えないのは何故だらう。何うして彼には彼女に退屈したやうな、物悲しさうな、自分の身分に飽いたやうな所があるやうに見えたのだらう。彼女は皆んなと一緒にゐた。けれども彼女だけは敵ではなかつた。そして彼女が自分を快く迎へ、訪ねてくれと頼んだのは何故だらう？

リトウイノフは起上つた。そしてたまらないやうな聲で叫んだ、「お、、タチアーナ、タチアーナ！お前一人が己れの守神、己れを守つてくれる天使なんだ。己れが愛するのはお前ばかり、そして己れは何時までもお前を愛して行くつもりだ。「あの女」なんかに何で逢ひに行くものか。あの女のことなんかは忘れてしまう。あの女は軍人たちと巫山戯てゐればいゝのだ。」リトウイノフはまた本を取り上げた。

十一

リトウイノフはまた本を取り上げるには取り上げたが、何うしても讀む氣にはなれなかつた。それで外に出てぶら〳〵散歩しながら音樂に耳をかたむけたり、賭博してゐるのを覗いてみたりしてまた家に歸つて本を讀まうとした……だがそれでも駄目だつた。時間が何だか妙に懶く過ぎて行くやうに思はれた。好人物で仲間の話などを旨く取纏めるのが上手なビシュチャルキンが來て三時間ばかり話

したり、議論をしたり問題を出したりして、切れ〳〵に始めは高尚なこと、後には實際問題のことを話したが、周圍の空氣は退屈になるばかりで可愛さうなリトウイノフは泣き出しさうになつた。退屈にさせる點では苦しくて、凍えるやうで、たまらない絶望的な退屈を感じさせる點では、このビシュチヤルキンは其の道にかけて、有名な最高の道學者にも劣らなかつた。綺麗に刈つて綺麗に刷毛をかけた彼の頭や、はつきりした生氣のない彼の眼や、人の好さゝうな鼻をちよつと見たゞけでも、何となく氣が滅入るやうで、彼の懶い退嬢さうな言葉の調子は、二を二度加へると五でも三でもなくて四であるとか、水は液體であるとか、慈善は爰むべきものであるとか、個人間に於ても國家に於けると同樣、また國家に於ても個人間に於けると同樣、財政には信用といふものが絶對的に必要なものであるとか、こんな解り切つた眞理を自信を以つて述べるために造られてゐるやうに思はれた。それでゐて彼は非常な好人物なんだ！　けれどもこれが運命が露西亞に下した宣告なので、私たちの中の善い人は屹度退屈な人なのだ。嬶てビシュチヤルキンが歸つて行つた。すると其の後にビンダソフが遣つて來た。彼は遠廻しの前置きなしに百グルデン貸してくれと無遠慮に頼んだ。リトウイノフは彼を可愛らしくないと思つたばかりでなく嫌だとさへ思つてゐたのだが、それからまた貸したらとても拂つては貰へないと云ふことも知つてゐたし、そればかりか彼自身金が要る時だつたのだが、其の金を貸して

遣つた。では何故其の金を與へたのかと讀者は訊ねるであらう。けれどもそれを誰が話し得よう！これも露西亞人の弱點なのだ。讀者諸君も其の過去の生涯に於て理由なしに仕た事がどのくらい度々あるか胸に手を當てゝ考へてみるといゝ。ビンダソフはリトウイノフに感謝の言葉を吐かないばかりか、赤いメーデンの葡萄酒を一杯ねだつて、唇も拭はないで荒々しく消魂しい靴音を立てゝ出て行つた。狹猾な男の赤い襟首を後ろから見送りながらリトウイノフは何んなに自分のしたことを後悔したらう、暮れ方にタチアーナから手紙が來たが、それには叔母の身體工合が惡いから五六日の間はバーデンに行かれないと書いてあつた。リトウイノフはこの手紙を讀んで、がつかりした。そしてもどかしさが益々つのるのを感じた。で、面白くない心を抱きながら早くから寢床に這入つてしまつた。その翌日は前の日より惡くはなかつたにしても決して好くはなかつた。朝からリトウイノフの部屋はバンベエフ、ウオロシロフ、ビシュチヤルキン、二人の士官、ハイデルベルヒの二人の學生、これらの同國人が一時に集まつて來て話すべきことは話してしまつて何もすることが無いのに晝飯時分まで歸らなかつた。彼等は何うしたらいゝのか彼等にも解らないらしく、リトウイノフの部屋に「根を卸してしまつた」のだ。先づ始めにグバリョーフがハイデルベルヒに行つたこと、彼等もついて行けばよかつたことなど話し、それから哲學めいて來て波蘭問題に觸れ、賭博や巴里の女の評判や、人の惡口など

云つた末、「強い人」や肥えた人や大食家の評判となり、ルーキンの中にあるいろ〳〵な昔話を出して、喧をして鰉三十三尾食べた昴祭のことや、肥えてゐるので有名だつた槍騎兵大佐のエジェディイノフのことや、自分の額で向脛の骨を打碎いた兵士のことなど話し、それから、いろ〳〵な出鱈目が出だした。ビシュチャルキンでさへ自分が知つてゐる或る小露西亞の百姓女は死んだ時に半噸と何封度も目方があつたとか、やはり自分の知つてゐる或る地主は食事の時に三羽の雷鳥と一尾の蝶鮫を食つてしまつたとか欠伸しながら話した。パンパエフは急に興奮して自分だつて味をつければ一頭の羊をまるで食べてみせると力み、ウオロシロフは仲間の運動會員と頒りに何やら大聲で饒舌り立てるので一同もその爲に默つてしまひ、やがてお互の顏を見合はせた後、帽子を取つて解散した。リトウイノフは、後に一人殘つて何か仕ようとしたが何だか頭が燻つてゐるやうで何も出來ず、とう〳〵その晩も爲すこともなく過ごしてしまつた。翌朝彼が食事に取かゝらうとしてゐると、誰やら扉を叩いた。「おや！また昨日の連中の誰かゞ來たな、」と思ひながらお〳〵聲で、

「お這入り！」と答へると、

扉が靜に開いてパッーギンの姿が現れた。リトウイノフは大層悅んで、

「やあ、よく來て呉れましたね！」と思ひ懸けなく來訪した友の手を温く握つて、「よく來て呉れました！　私の方からお伺ひする處だつたのですが、お處を知らして下さらないものですから。まあ何卒お掛け下さい。帽子をお置きなさい。さあお掛け下さい。」

パッーギンはリトウイノフの温い歡迎には答へないで部屋の中央に突立つたまゝゆるやかに足踏みをして、微笑しながら頭を振つた。彼はリトウイノフの心からの歡待を喜びはしたが、その顏には何處か打解けないところが見えた。

「君は思ひ違ひを……してゐらつしやるのです、」と彼は躊躇しながら、「そりや私だつて……斯うして下さるのは有難いのですが……實は……使ひになつて來たやうな譯で。」

「ぢや何ですか、君の意志で此處に來て下さつたのぢやないのですか？」とリトウイノフはやゝ不機嫌な調子で訊ねた。

「いゝえ、……さうぢやないのです。私は……私は今日頼まれなかつたらお邪魔に上るのぢやなかつたのです。實は御傳言がありまして。」

「それは誰からですか？」

「君の御存知のイリーナ・パウロウナ・ラトミロフからです。君は三日前にあの人を訪問する約束をしてまだおいでにならないそうですね。」

リトウイノフは茫然としてパッーギンを見詰めた。

「君はラトミロフ夫人を知つてゐるのですか？」

「御推察の通りです。」

「でよく知つてゐるのですか？」

「まあ或る程度まであの人の友達なんです。」

リトウイノフは暫らく默つてゐた。

「聽て口を開いて、「斯んなことを聞くのは妙ですが、イリーナ・パウロウナが何うして私に逢ひ度いと云ふのか君にはお解りになりますか？」

パッーギンは窓の方に歩いて行つて、

「或る程度までは解ります。私の見る處ではあの人は君に逢つたのを大層悅んでゐましたよ。——で——君と昔の仲に歸り度いと思つてゐるのでせう。」

「昔の仲、」とリトウイノフは言葉を受けて、「無遠慮に訊ねては濟みませんが、最一つお訊ねしたいのです。君は昔の仲が何うであつたか知つてゐますか？」

「嚴密に云へば……知りませんです。然し私の想像する處では、」と云つてパッーギンは急にリトウイ

ノフの方に向直つて優しく彼を見詰めながら、「私の想像するところでは可なりの仲だつたのだらうと思ひます。イリナ・パウロウナは君のことを非常に褒めてゐました。で、私が君を連れて歸る約束をする樣になつてしまつたのです。來ますか？」

「何時？」

「今……直ぐ。」

リトウイノフは手を振つたゞけだつた。

「イリーナ・パウロウナは、」とパッーギンは言葉を續けた、「先日君があの人の周圍を包む……何う云つたらいゝでせうか……環境とでも云ひませうが……君があの人の周圍を包む環境を餘り好まれなかつたらしいが、惡魔は思つたほど黑いものぢやないと云ふことを私から君に告げて呉れろと云ふことでした。」

「はあ……その諺が環境に當てはまるでせうか？」

「えゝ……概してね。」

「はあ——で、君は惡魔とは何んなものだと思つてゐるのです、ソソント・イワニッチ？」

「私も何んな場合でも思つたほどのものぢやないと考へますね、グリゴリー・ミハリッチ。」

「思つたより善良なのですか？」

「善良だか悪いか、そんなことは云はれませんが、兎に角思つたほどのものぢやないと考へます。ぢや出掛けませうか？」

「まあ最つと座つてお居でなさい。私には何だか腑に落ちないことがあるのです。」

「何が腑に落ちないのです。」

「何うして君はイリーナ・パウロウナの友達になつたのですか？」

パツーギンは自分を凝と眺めながら、

「私の風采や、社會に於ける地位から考へると不思議かも知れませんが、それ――シエクスピーアも云つてゐるぢやありませんか、『天地にはまだより以上のものがある、ホラチオよ、』とね。人生はさう輕々しくは見られないものですよ。例へば今此處に君の眼の前に一本の木が立つてゐて、風が吹いてゐないとしたら、其の木の下の方の葉が何うして上の方の葉と觸れ合ふことが出來ませう？　とても出來やしません。けれども一度嵐が來ればすつかり變つて來ます。……二つの葉が觸れ合ひます。」

「あゝ！　ぢや君の場合にも嵐があつたのですね？」

「まあ左樣ですね！　それが無いで生きてゐられるものですか？　然し哲學は最う澤山です。最う出

かける時間ですから。」

リトウイノフはまだもじ〳〵してゐた。

「おや〳〵！」とパツーギンは滑稽な顏をして叫んだ、「近頃の若い人の仕る事は何うだ！　綺麗な奥樣が逢ひ度いと云つて、わざ〳〵使までよこしたのに文句を云つて行かないなんて。君は恥ぢなくちやならない處ですよ。さあ此處に帽子があります。これを取つて熱情的な獨逸の友人の樣に：vorwärts。としませう。」

リトウイノフはまだ決心しかねた樣子であつたが、それでもとう〳〵帽子を取つてパツーギンの後に從つて部屋を出た。

十二

二人はバーデンの一番いゝ旅館に行つてラトミロフ夫人を訪ねた。門番は二人の名を聞くと直ぐ、「die frau furstin ist zu Zhause.」と答へて二人を案内して階段を昇り、とある部屋の扉を叩いて來訪を知らせた。「Die frau furstin」は直ぐ二人を迎へた。良人は旅行中の或る高官に會ふためにカルルスルーへに行つたので部屋には彼女が一人であつた。

パッーギンとリトウイノフが這入つた時には、イリーナは小さい卓子の上でカンワスに向つて刺繍をしてゐた。彼女はいち早く刺繍を止めて、卓子を傍に押遣りながら、眞に悅しさうな表情を滿面に浮べて立上つた。彼女は襟の高い不斷着を着てゐたが、其薄い衣を透して美しい肩や腕の輪廓が見え、無造作に捲いた髪は解けて細い首根に垂れかゝつてゐた。イリーナはちらりとパッーギンを見遣つて、「merci」と小聲で禮を云つた後、リトウイノフに手を差出して、彼が約束を忘れつぽいのを優しく怨じながら、

「古くからのお友達であるに！」と云つた。

リトウイノフが辨解をしようとすると、彼女は「b'est bien, c'est bien.」と早口に遮つて帽子を彼の手から親切さうに取りながら無理に腰を掛けさせた。パッーギンも腰を掛けかけたが急に思ひ返して、拋つて置くことの出來ない用事があるから晝飯が濟んだ頃にまたお伺ひすると約束して其場を去らうとした。イリーナはまた素早く彼に眼を呉れたが優しさうにうなづいて見せたきりで別に引止めやうともしなかつた。そして彼の姿が入口から消えるや否や、待ち切れぬやうにリトウイノフの方に向直つて、

「クリゴリー・ミハイリッチ、」と露西亞語の軟らかい音樂的な聲で話しかけた、「とう〳〵久しぶりで

二人きりになれました。あなたにお詫びする機會が出來ましたので……（イリーナは彼の顏を正面に見た）お目に掛ることが出來ましたのを大層喜んでゐるのでございますよ。」

リトウイノフはぎよつとした。こんなに早く突込んで來ようとは思はなかつたのだ。彼女が昔の話などしやうとは彼は夢にも思はなかつたのだ。

「お詫び……何の？」……と彼は小い聲で云つた。

イリーナは顏を赧らめた。

「何のと仰つしやつたつて……あなた御存知ですわ、」と云つて稍々横を向いて、「濟みませんでしたわ、グリゴリー・ミハイリッチ……あれが妾の運命だつたのですけれど、」（リトウイノフは彼女の手紙を思ひ出した）「ですから最う後悔してはゐません……後悔したつて濟んだことなんですから。けれども斯んなに思ひ掛けなしに逢つてみますと、妾も何うしても、友達にならなければならないと思ひました……そして若し斯うしてお目に掛ることが出來なかつたとしたら何うだらうとそんなことを泌々考へてみましたのですよ……ですから今こそ何もかも打明けて後に……genre や、きまり悪いことが無くなるやうに、よくお話しようではありませんか。そして妾に許すと云つて下さい、でないと妾はあなたがまだ…… de la rancune に感じてゐらつしやるに違ひないと思ひますわ。おや！　斯んなことを

申上げるのは馬鹿げてゐるかも知れませんわねえ。あなたはずつと昔に早や何もかもすつかりお忘れになつたのでせうから。ですけど兎に角許すと云ふことだけは仰つしやつて下さいまし。」

イリーナはこれだけの言葉を息もつかずに話した。リトウイノフは女の眼に涙が光つてゐるのを見た。……さうだ、本當にそれは涙であつた。

「だつて、イリーナ・パウロウナ、」と彼は口早やに云つた、「何うして私にお詫びをしたり、許しを乞ふたりなさるのです？……あれは最う皆んな濟んで葬られたことぢやありませんか。私はたゞ華やかな周圍に包まれたあなたがまだ昔のつまらない仲間のことを覺えてゐらつしやつたのを驚いたゞけなんですよ。」

「そんなことをお驚きになつたの？」とイリーナは軟らかく訊ねた。

「驚きましたよ。何しろこんなことが有らうとは――」

「だけどあなたはまだ妾を許すとは仰有つて下さいませんわねえ、」

「私は心からあなたちの幸福を悦んでゐます、イリーナ・パウロウナ。そして、心からあなたに地上の最も好いものをまるで與へたいと思つてゐるのです……」

「そしてあなたは妾を恨んではゐらつしやらない？」

「私はあなたから與へられた幸福の瞬間より他に何も覺えてゐませんです。」

イリーナは兩手を彼の前に伸ばした。伸ばした兩手をリトウイノフは温く握つて直ぐには放さなかつた……其の軟らかい接觸は彼の心の中に永らく感じなかつた或るものを密かに感じさせた。イリーナはまた彼の顏を正面に見入つたが、今度はにこ〳〵してゐた……彼も始めて正面に凝と女の顏を見た……彼は久しぶりに會ては、大切に思つたことのある女の顏を見た。驚くべき睫毛の生えた深い眼や、頰の眞ん中の小さい黑子や、額の上の縮のある髮や、何となく可愛らしくまた滑稽に曲がる脣や、幽かに輝める眉や、其他の總てのものを見た……美しく成長したこと！　彼女の肉に魅力と勢力の滿ちてゐること！　生々した淨い顏には臙脂も、刷毛も、お白粉も附いてゐない……さうだ、彼女は美しい女だ。リトウイノフは思ひに耽り度いやうな氣分になつた。……彼はまだ女を見入つてはゐたが心は遠い處にあつた……イリーナは其れに感づいた。

「結構ですわ。妾もそれでやつと安心いたしました。そして、妾の好奇心も滿足させることが出來ます。」と彼女は聲高に云つた。

「好奇心、」とリトウイノフは怪訝げに呟いた。

「えゝ、えゝ……妾何よりも先づ第一にお別れしてからあなたが今まで何をしてゐらしつたか、これ

から何をしやうと思つてゐらつしやるのか、それが聞き度いのです。何もかも聞き度いのです、何故、何を、何故……何もかも。ですけれど本當のことを話して下さらなくちやいけませんよ。云つて置きますが妾は何時もあなたを見てゐたのですから……出來るだけ。」

「私を見てゐたのですつて、あなたが……あの……ベテルブルグで？」

「先つきあなたが仰つしやつた「華やかな周圍」に包まれて見てゐましたわ。華やかな周圍のことはまた何時かお話しいたしますが、今はあなたが、誰も邪魔をする人はゐないのですから、ゆつくりいろ〳〵のことを話して下さらなくちやいけません。そしたら妾何んなに嬉しいでせう、」かう云つてイリーナは嬉しさうに安樂椅子に腰掛けて居住ひを正した、「さあどうぞ。」

「私のお話を始めに前に、あなたにお禮を云はなくちやならないことがあるのです。」

「何の？」

「私の部屋にあつた花束の。」

「何んな花束？　妾ちつとも知りませんわ。」

「え？」

「妾ちつとも知りませんわ……さあ、待つてゐますのよ……、あなたのお話を待つてゐますのよ……

あゝ、あなたを連れて來て下さつたパツーギンは本當に親切な人ですわ！」

リトウイノフは耳を立て、

「あのパツーギンを昔から御存知なんですか？」と訊ねた。

「えゝ、昔から……ですけれどお話も早く聞かして頂戴。」

「でよく御存知なんですか？」

「えゝ、」と答へてイリーナは溜息をついて、「其れには譯があるのです……、あなたエリザ・ピエルスキーのことは屹度お聞きになつたでせう……あの一昨年恐ろしい死に方をなすつた方を？……あゝ、さうだ、あなたは妾共の騒動をちつとも御存知ないのでした……ですけど、御存知ないので丁度幸ですわ。quelle chance! とろく〳〵妾方のことを少しも知らない生きた人に出會ひました。そして其の人とあんなベテルブルグの嫌な氣味の悪い佛蘭語でなしに、露西亞語、好い露西亞語でないにしても兎に角露西亞語で話すことが出來るのですわ。」

「でパツーギンが其騒動に……」

「妾は最うあの事はお話するのも嫌ひなのでございますよ、」とイリーナは遮つて、「エリザは妾の學校時代の仲好しだつたのですが、それから後も、二人はベテルブルグでよく逢ひました。そして妾にいろ

〳〵な秘密を打明けて呉れたのですが、あの人は不幸な人で、隨分苦勞をなさいましたの。其の時に
パッーギンが俠氣を出して骨を折つて下すつたのです。自分を犧牲にして盡して下すつたのです。そ
の時はじめてあの人の偉いことが解りました。おや、また話がわきに外れました。さあお話を聞かし
て下さいな、グリゴリー・ミハリッチ。」
「だつて私の話はあなたなんかにちつとも面白くはないですよ、イリーナ・パウロウナ。」
「そんなことは何うでもいゝのですよ。」
「考へて御覽なさい、イリーナ・パウロウナ、お別れしてから最う十年になるのです。まる十年になる
のです。ですからその間には澤山の水が流れてゐます。」
「水だけぢやありません！　水だけぢやありません！」と彼女は妙に離かしさうな顏をして、「ですか
らそれを何うあなたがお話になるか聞き度いのですよ。」
「その上私には何處から話を始めていゝか本當に解らないのです。」
「始めから。妾がペテルブルグに行つた時から……あなたはあれから莫斯科をお立ちになつた……そ
れから妾が一度も莫斯科に行かないのを御存知？」
「本當ですか？」

「始めは左樣はいかなかつたのですが、後に結婚しましてからは——」
「御結婚なすつてから何年になりますか？」
「四年です。」
「お子さんは無いのですか？」
「ええ、」と彼女は素氣なく答へた。
リトウイノフは暫らく默つてゐた。
「で御結婚なさるまではずつと、あの何と云ひましたつけ、ライセンバッハ伯爵の家においでゞした
のですか？」
イリーナは何故こんな事を訊ねるのか怪しむやうに眼を据えて彼を見詰めてゐたが、
「いゝえ、」……と暫くして答へた。
「御兩親樣は……御兩親樣のことをちつともお訊ねしませんでしたが。お二人とも……」
「二人とも遠客でございます。」
「そして昔の通り莫斯科に住んでゐらつしやいますか？」
「はあ、莫斯科に。」

「そして弟さんや妹さんは？」

「皆んな達者です。妾が世話をしてやりました。」

「あゝー」リトウイノフは上眼遣ひに彼女を見た。「本當に、イリーナ・パウロウナ、話をせねばならないのは私ぢやなくて、あなたですよ、若し……」と云ひかけたが彼は急にきまり悪く思つて云ひ澱んだ。

イリーナは手を顔の處まで上げて、結婚の指輪を指に嵌めたまゝ、くるりと廻したが、卿て口を開いて、

「さうね、妾いやだとは申しませんわ。何時かまた……お話いたしませう……ですが今日はあなたのお話をね……だつて妾あなたを探ることは探つたのですが何にも解らなかつたのですもの。妾のことは……あなたぴつて屹度何度もお聞きになつたでせう。ねえ？　妾のことをお聞きになつて？」

「あなたは世間に目立つ位置にゐらつしやるのですから噂どころぢやありません……殊に私のゐました田舎などでは何でも本當に信じてしまふのですから。」

「あなたその噂を信じてゐらつしやいますか？　その噂つて何んな噂？」

「本當のことを云ひますとね、イリーナ・パウロウナ、そんな噂は滅多に聞きませんでした。私は寂し

い生活をして來ましたから。」

「何うして？　だつてあなたは軍隊に這入つてクリミヤにおいでになつたんでせう？」

「そんなことを御存知なんですか？」

「知つてゐますわ。妾あなたをちやんと見てゐたのですもの。」

リトウイノフはまたもじ〳〵した。

「お話しなくても解つてゐることをお話する必要はないぢやありませんか？」とリトウイノフは低い聲で云つた。

「だつて……妾がお願ひしてゐるのぢやありませんか。ね、お願ひですから。」

リトウイノフはうなづいて語り始めた……興味のない身上話の大體の輪廓だけ纏りもなく語り始めた。時々話を切つてはこれでいゝかと催促するやうにイリーナを見た。けれどもイリーナは何處までも話を續けさして、後れ毛を耳の後ろに掻き遣りながら安樂椅子に肱をつき氣を張りつめて一言も聞き漏らすまいと耳を傾ける樣な風をした。若しこの時誰か彼女を傍から見て、その表情に氣を止めてゐるとしたら、その人は必ずイリーナが話に耳を傾けてはゐないで、深い物思ひに沈んでゐることに氣が附いたであらう……けれどもそれはリトウイノフのことを考へてゐるのではなかつた、女の凝視

を受けたリトウイノフは眼くなつて、ときまぎしてゐたが。彼女の前には全く新しい違つた生命、彼のでなく、彼女自身の生命が發展しつゝあるのであつた。

リトウイノフは話してゐる中に何だか不愉快になつたものだから終ひまで行かない中に話を切つてしまつた。今度はイリーナも何も云はず、急き立てもせず、疲れた樣に手を擴げて眼をこすり、それから椅子の背に凭れかゝつて凝としてゐた。リトウイノフも暫らく默つてゐたが、考へて見ると最う來てから二時間以上にもなるので、帽子を取らうと手を伸ばしかけると、丁度その時不意に次の部屋に輕やかな山羊皮の靴音が急ぐのが聞こえて、馴染のある微妙な貴族的な香水の香がしたかと思ふと、ワレリアン・ウラジミロウイッチ・ラトミロフが這入つて來た。

リトウイノフは立上つて此の風采のいゝ將校と挨拶を交した。落着き拂つたイリーナは顏から手を落して冷やかに良夫を眺めながら佛蘭西語で、「おや！　お歸り！　ですけど今何時ですの？」と云つた。

「最う四時になるだらう。まだ着物を着替えないのか……公爵夫人が待つてゐられるのだよ。」

斯う云ひながら將校は凛々しく引締つたその體を品よくリトウイノフの方に屈めて此の人の特色の女の樣な輕口めいた調子で、「珍らしいお客樣があつたからそれで時間を忘れたのだね、」と云つた。

此處でちよつと、此のラトミロフ將軍のことを書いて置くことを讀者も許し給ふたらう。彼の父は私生兒……諸君は何う思ふ？　諸君の間違ひではない……けれどもそれとは違ふのだ……なのでアレキサンドル一世時代に有名だつた人と、美しい佛蘭西の女優との間に生れた子で、その有名な人は自分の息子を世の中に出しは出したが財産と云ふものは何も遺らなかつた。それでその息子、詰りラトミロフの父は金持になる暇もなく憲兵大佐以上に昇らない中に死んでしまつたのだが、死ぬる一年前に自分が世話を見てゐた或る美しくて若い後家と結婚した。此の後家との間に出來たのが、ワレリアン・アレキサンドロウイッチなので、彼は都合よく近習隊に這入つたが、學問よりも其の風采や擧動や品行の點で（當時の士官學校によくある誘惑を彼は旨く切り抜けた）上の人に認められ近衛に勤めることになつた。彼は慎み深くて、快活で舞踏も上手で、閲兵式の時に傳令を勤めて馬の乘り方が巧みだつたことなどの爲に、どん〳〵昇進させて貰つた。特に上官に對しての親しさうな恭々しさや、空氣の樣に輕い幽かな呑氣な匂ひのある優しい、注意深い、殆どこびり附くやうな追從、これらのものが彼の昇進を助けたのだ。……けれどもこの呑氣は曾て彼が騷動を鎭める爲に白露西亞に遣られた時に五十人の百姓を鞭打つのを妨げはしなかつた。彼の風貌は頗る美しく、若々しく、のつぺりした顏、薔薇色の頰、それに物腰が柔和で執拗いところがあつたから、女には恐ろしく成功して、彼の爲には

最も高貴な婦人や令嬢たちが氣を失つてのぼせ上るのであつた。元來が用心深い質で、言葉も慎しんでゐたからラトミロフ將軍は丁度美しくもない、花からも其の蜜を忙がしそうに拾ひ集める蜜蜂の樣に、何時も上流社會にあつて活動してゐた――そして道德的でもなければ智識があるのでもないが、事務を取るのが旨くて、人の心を見るのが上手で、瞬間に物事を飲込む質で、其の上自分の利益ばかり始終念頭に置いてゐると來てゐるものだから、彼は自分の前に總ての道が開けてゐるのを見たのであろ……

リトウイノフは强ひて微笑した。イリーナはちよつと肩を搖すつて、

「そしてあなた、公爵にお逢ひでしたの？」と相變らず冷たい調子で訊ねた。

「逢つたよ。お前に宜しくと云はれたよ。」

「あなたの大切なあの人も相變らず、のろ〳〵してゐらつしやるのでせう？」

ラトミロフ將軍は返事をしなかつた。そして女の判斷の粗忽を寛大に許す樣に、微笑したゞけだつた。親切氣のある大人が子供の惡戲に對してよく斯んな微笑で答へるものだ。

「本當ですわ、」とイリーナは言葉を續けて、「あなたのお友達の伯爵の間の拔け方と云つたら餘り酷すぎますよ、世間を見た人が見ると尙更ですわ。」

「お前があの人の處に行けと私に云つたのぢやないか。」と呟きながら彼はリトウイノフの方に向直つて露西亞語で訊ねた。「バーデンの湯で利目がありましたですか？」

「幸ひ、私は極く達者なんです。」とリトウイノフは答へた。

「其れが何よりの幸福ですね、」と將軍は愛想笑ひをして、「それにまた、誰だつて湯に入る爲にバーデンに來る人は無いのですからね。然し此處の湯は非常によく利くさうですよ。Z: veux dire, efficace. 私も左樣なんですか誰でも神經性の咳をする者は――」

イリーナは此の時逸早く立上つて良人の言葉を輕蔑して遮るやうに、「またお目に懸りませう、グリゴリー・ミハリッチ、直ぐにね。」と佛蘭語で云つた、「彼方に行つて着物を着替へなければなりませんから。あの公爵のお婆さんは何時も partir de plaisir ばかりして、行つたて退屈するばかりなんだから仕樣がないわ。」

「今日は難かしいねえ、」と呟いて良人は次の部屋に去つた。

リトウイノフは扉の方に向いた……とイリーナは彼を引き止めて、

「あなたは何もかもお話して下さいましたが肝腎なことを一つ隱してゐらつしやる。」

「何ですか？」

「あなた御結婚なさるさうですね？」

リトウイノフは耳まで赧くなつた……彼はタチアナのことは故意と云はなかつたのであつた。彼は第一にはイリーナが自分の結婚を知つてゐること、第二にはそれを隱さうとしたのを指摘されたことを非常に氣拙く感じた。彼は何う云つていゝか途方に暮れた。イリーナは尙も彼から目を離さなかつた。

「はあ、結婚します、」と暫らくしてから云つた後、彼は出て行つた。

軈てラトミロフが部屋に戻つて來た。

「何故着物を着替へないのだ？」と彼が訊ねた。

「お一人で行つて下さい、頭痛がしますから。」

「だつて公爵夫人が……」

イリーナは良人を頭から足の先まで凝と見詰めたのち、良人の方に背を向けて自分の居間にすたすたと歩いて行つた。

十三

リトウイノフはルーレットの賭博に負けて金を取られた時か、約束を違へた時の樣に不愉快になつて來た。心の底の或る聲が、子供ではあるまいし、理智の目覺めた男が結婚の眞際になりながら、好奇心に惱まされたり、追懷の誘惑などに墮つてなるものかと頻りに彼に囁くのであつた。彼は何故何處に行つたのだらうと考へてみた。「あの女の方ぢやたゞ一時の出來心で面白半分からかつてゐるだけなのだ……いろ〳〵な事に飽いたものだから、退屈まぎれに已れを揶へたんだ……丁度御馳走に飽いた者が急に黑麭麵を欲しがる樣に……御尤もなことだ……だが、己れは何故あんな處に行つたのだらう？　己れはあの女を輕蔑し切つてゐるぢやないか？」この最後の文句は胸の內で呟くだけでも彼に取りて可なりの元氣を要した……「無論行つたつて危險なんか有りはしない、」と彼は考へ續けた、「己れだつて相手が何者か位は知つてゐる。けれども火を弄ぶことは出來ない……だから最うあの女の家には足を踏まないことにしよう。」イリーナが何んなに美しく見えたか、イリーナに逢つて何んな感じがしたか、そんなことは考へようともしなければ、また考へられもしなかつた。

其の日も懶い鬱陶しい日であつた。晝飯の時に彼は食堂で一人の立派な、口髭を染めた紳士と遇然並んで腰かけたが、其の人は一言も口を利かないで忙しげに息をしながら眼を、ぎろ〳〵動かしてゐた……けれども其の男が不意に吃逆をした時、「ほら、胡瓜は食はれないと云ふに！」と如何にも後悔

したらく露西亞語で呟いたので同國人だことが解つた。夕方になつても無駄に過ごした費の生活を償ふやうな事は起らなかつた。ビンダソフはリトウイノフの見てゐる處で、リトウイノフから借りた金の四倍も賭博で勝つたのだが、借りた金を拂はうとはしないで、却つて自分の勝利を見てゐるリトウイノフに最つと金を借りようとでも思つてゐるやうな眼付でリトウイノフを見詰めた。其の翌日も彼の處に同國人が澤山浸入して來た。リトウイノフは漸つとのことで其れを逃れて山に出た。山で始めに出逢つたのはイリーナであつたが彼は知らぬ顏をして過り過ごした。次に出逢つたのはパツーギンであつた。彼はパツーギンに話しかけようとしたがパツーギンは容易に返事をしなかつた。彼は小さい女の兒の手を引いてゐたが、其の女の兒はまるで病人の樣に蒼白い小さい顏をして、柔らかい白つぽい捲髮と、黑い大きい眼を持つた、如何にも甘やかして育てられたらしい氣難かしさうな顏附をしてゐた。リトウイノフは二時間ばかり山で過ごした。それから宿に歸らうと思つてリヒテンターレルの通りを戻りかけた……と一人の靑いヴェイルの婦人が急に腰掛を離れて、つか〳〵と彼の方に近づいて來た。……彼はイリーナを認めた。

「あなた何故妾をお避けになるの、グリゴリー・ミハリッチ？」彼女は煮え返る感情を押さへて、しどろもどろの聲で訊ねた。

リトウイノフは、ぎよつとした。

「私が避けました、イリーナ・パウロウナ！」

「えゝ、あなたは……あなたは——」

イリーナは興奮してゐた。殆ど怒つてゐた。

「そりや屹度あなたの誤解ですよ。」

「いゝえ、誤解ぢやありません。あなたは今朝——妾たちが出逢つた時に——あなたが妾を御覽になつたのを妾が知らないと思つてゐらつしやるのですか？　あなたは妾を見なかつたと仰つしやるのですか？　云つて下さい。」

「私は本當に……イリーナ・パウロウナ」

「グリゴリー・ミハリッチ、あなたは眞つ直ぐな人で何時も本當のことを仰つしやいましたわねえ。さあ、さあ、妾を御覽になつたのでせう？　そして故意と知らぬ顏をしてお通りになつたのでせう？」

リトウイノフはイリーナを見た。彼女の眼は妙に輝いて、頰と唇は深い面布の奥に死んだ樣に蒼白かつた。其の顏の表情と、引つたくるやうな言葉の云ひ方には、堪らないやうな懊惱と哀願が含まれてゐた……リトウイノフは最う包み切れなくなつた。

「はあ……見ました、」と彼は漸つとの思ひで白狀した。

イリーナは靜かに身顫ひをして、手を卸した。

「何故妾の方においでにならなかつたの？」

「何故つて……何故つて？」と云ひながらリトウイノフは道を離れて一方に寄つた。するとイリーナも默つたまゝ彼について行つた。「何故つて？」と彼はもう一度繰り返して口に出したが、急に顏が火熱つて來て、憎惡に似た感情が潮の樣に胸から咽喉に込上げて來るのを感じた。「あなたは……あなたは其んな事をお訊ねになるのですか、二人の仲は何もかも濟んで仕舞つたのに？　無論今の事ぢやありません。今の事ぢやありません。あの……あの……莫斯科です。」

「だつてまた話を定めて、あなた約束なすつたじやありませんか――」

「私は何も約束をしはしません！　餘り素氣ない云ひ方で失禮かも知れませんが、あなたも本當を云へと仰つしやるのですから……まあ考へてみて下さい。あなたがそんなに仰つしやるのは、氣まぐれか――これは私にも解らないのですが――でなければ、あなたがまた私に何れだけの力があるか試す爲とより他に思はれないぢやありませんか？　私たちの道はもう遠く離れてしまつたのです！　私は何もかもすつかり忘れてゐます。あの苦痛は長い前に早や通り拔けてしまつて、最う全々違つた人間になつてゐるのです。あなたは結婚されて、少なくも見たところでは幸福らしいです。そして世間に羨まれる地位に立つてゐらつしやる。だのに何の必要があつて私と逢ふのです？　一體私はあなたに取つて何なのですか？　あなたは私に取つて何なのです？　最う今ぢやお互に理解し合ふことさへ出來ないのです。最う二人の間に共通なものは何も無いのです。過去にも現在にも何も無いのです！　殊に……殊に過去には無いのです！」

リトウイノフは是れだけのことを早口に力を込めて顏を外らしもしないで云つた。イリーナも時々彼の方に手を力なく差伸ばすより他に身動きをしなかつた。其の樣は丁度話を止めて彼女の云ふことを聞いてくれと頼むやうに見えた。そして彼の最後の言葉の處では鋭い烈しい傷の痛みを押へるやうに幽かに彼女自身の下唇を嚙んだ。

「グリゴリー・ミハリッチ、」と暫くして彼女が落着いた聲で呼んだ、そして人の往き來のはげしい道を離れて一層奥の方に行つた。

今度はリトウイノフが其の方について行つた。

「グリゴリー・ミハリッチ、若し妾が髮の毛ほどでも、まだあなたに對して力があると知つてゐますれば妾の力からあなたを避けますわ。妾がそれをしないのは、昔濟まないことをしてゐながらまた御交

際したいと思ひますのは……それは……それは——」

「それは何です？」とリトウイノフは素氣なく訊ねた。

「それは、」とイリーナは急に力を込めて——「あなたの仰つしやる羨まれる地位の社會が妾には最う堪らないほど辛抱出來なくなつたからなんです。そしてあなたも三日前に古城で御覽になつたでせうが、あんな死んだ人形ばかり見た後で、あなたの樣な本當に生きた人にお逢ひしましたので、砂漠の中で綠地に出逢つた樣な氣がいたしましたわ。だのにあなたは妾が巫山戲てゐるやうにお思ひなつて、妾が昔濟まないことをしたのを楯に取つて妾を輕蔑したり、お嬲ひになつたりするのです。そりや妾も惡かつたのですが……でも妾の方が何れほど辛かつたでせう！」

「あなたは勝手に自分の運命をお選びになつたのです。」とリトウイノフは顏を振向けもしないで苦々しく云つた。

「そりや妾が選んだのです……ですから、不平を云ひはしませんわ。不平を云ふ資格は無いのですから、」とイリーナは口早やに云つた。彼女はリトウイノフの慘酷そのものから窃かな慰安を得てゐるらしく見えた。「あなたが妾を惡くお思ひになるのは當り前ですから、妾も自分を辯解しようとは思ひませんです。たゞ妾はあなたに對する妾の心持を打明けて、決して不眞面目な心持ではないと云ふことだけを知つて頂けばいゝのです……妾があなたに巫山戲てゐるなんて！　そんな無意味なことがあるものですか……久しぶりにあなたにお目に懸りましたので、妾の内にある善いものや若い時代のことが甦つて來たやうな氣がいたしますの……妾がまだ運命を選ばない十年前の光明の向ふに置いて來たいろ〳〵のものが甦つて來たやうな氣がいたしますの……」

「そんな事があるもんですか、イリーナ・パウロウナー！　私の知つてゐる限りでは、あたの光明は二人が別れた時から始まつてゐるのです……」

イリーナはハンカチを唇に當てゝ、

「まあ酷いことを仰つてやるのね、グリゴリー・ミハリッチ、妾何も怒りやしませんけれど。莫斯科を立つてから妾の光明の時が始まつたのちやありませんわ。ぼんの一瞬間でへ幸福だと思つたことはありませんでしたわ。何んなにお考へになつゐるのか知りませんか、これだけは信じて下さいまし。若し妾が幸福でしたら今話してる樣にあなたと話せたでせう……また云ひますがあなたはあの人達が何んな人だが御存知ないのです——ほんとに、あの人達は何も解らないのです、何も感じないのです。理智さへ無いのです。ni esprit ni intelligence なんです。あるものは手管と狡猾だけですわ。本當のこと、音樂や、詩や、藝術でさへあの人達とは緣が遠いのです……こんなことを申しますと、妾だつて其

んな方面には縁が遠いと仰つしやるかも知れませんが、あれ程ぢやありまんわ……あれ程ぢやありませんわ！　今あなたの前にゐます女は、あなたゞつて妾を御覧になつたゞけでお解りでせうが――皆んなの云ふ社交界の女王ではなくて、たゞの憐れな、本當に憐れな同情すべき女に過ぎないのです。妾の申しますことに驚かないで下さい……最う妾は自負心なんか持つてゐませんから！　妾は乞食の様にあなたの前に手を出してゐるのです、お解りですか、まるで乞食の様に……そしてお情を乞ふてゐるのです、」と思はず急に烈しい聲を出して、「妾はお情を乞ふてゐますのに、あなたは――」

女の聲は途切れた。リトウイノフは顔を上げてイリーナを見た。彼女は荒々しく息使ひして、唇を顫はしてゐた。忽ち彼の心臓は烈しく波打ち始めて憎悪の感情は消えてしまつた。

「あなたは、二人の道は最う遠く離れてしまつたと仰つしやいましたわね、」とイリーナは言葉を續けて、「妾はあなたが今度自分から望んで御結婚なさることや、生涯の計畫を立つてゐらつしやることはよく知つてゐます。ですけど、それだと云つて、妾たちが見知らぬ他人になつたのぢやありませんわ、グリゴリー・ミハリッチ、まだお互を理解し合ふことは出來ます。それとも妾が無感覚な……全く、泥にまみれたものになつたとでも思つてゐらつしやるの？　何うぞさうはお考へにならないで下さい！　お願ですから妾の胸の中をすつかり打明けさして下さい……あの……昔の剛毅甲斐としてね、若し昔

を覺えてゐて下さるのでしたら。二人が逢つたのが無駄にならない様に何卒さうして下さいね。これぢや餘り酷すぎますわ。何うせ長い間ぢやないのですもの……何う云つたらいゝか知りませんが、あなたは理解して下さると思ひます。何故と申しますと妾はほんの、ほんの……ほんの少しばかりの同情を求めてゐるだけなんですもの。あなたがお嫌がりにならないで妾の心の中を聞いて頂きさへすればいゝのですもの……」

此處まで云つてイリーナは口をつむいだ。其聲には涙が含まれてゐた。そして溜息をして、臆病げに探るやうな眼附で窃とリトウイノフを見ながら彼の前に自分の手を差伸ばした。

リトウイノフは差伸ばした女の手を靜に取つて握り締めた。

「お友達になりませう、」とイリーナが囁いた。

「お友達に、」とリトウイノフも夢見るやうに眞似をした。

「えゝ、お友達に……若しそれが餘り慾張り過ぎるとしますれば、せめてお友達らしくでもね……せめて今迄何事も起らなかつたやうにいたしませう。」

「何事も起らなかつたやうに……」とまたリトウイノフは眞似をして、

「あなたは先つき私が昔の事を忘れようとしないと仰つしやいましたね……ですが若し忘れることが

出來なかつたら何うします？」

イリーナは爆然と打ち笑つたが、直ぐに氣づかはしげな、驚いたやうな顏附になつて、

「グリゴリー・ミハリッチ、妾の樣になつて下さいまし、そして昔の樂しかつた事だけ思ひ出して下さい。それから何よりも先づ妾に誓つて下さい……きつぱりと……」

「何を？」

「妾を避けないこと……妾を何でもないのに苦しめないこと。約束して下さいますか？　え？」

「はあ。」

「そして最う妾に對して悪い感情はすつかり持たないことにして下さいね。」

「はあ……でもあなたと理解することだけは――できませんよ。」

「そんなことは何うでもよろしいわ、……何時かは理解できますよ。けれど兎に角約束はして下さるでせうね？」

「すると云つたぢやありませんか。」

「有難う。御存知の通り妾は何時もあなたの仰つしやることは信用して來ました。今日も明日も妾外に出ないであなたをお待ち申してゐますよ。今はこれで別れることにしませう。向ふから並木道を大

公爵の夫人がおいでになる樣子です……此方を御覽になつた樣ですから行つて話をしなければ惡いでせう……ぢやまた逢ひませう……お手を、早く、早く、左樣なら。」

温くリトウイノフの手を握つた後で、イリーナは威嚴のある中年の婦人の方に歩いて行つた。其の婦人は二人の女と平服を著た大層美しい馬丁を從がへて砂利を敷いた道を靜かに此方に向かつて近づいてゐた。

「Eh bonjour, chère Madame.」と其の婦人が聲をかけると同時にイリーナは恭々しげな辭儀をした。

婦人は言葉を續けて、「Comment allez-vous aujourd'hui? Venez un peu avec moi.」と云つた。

「Votre altesse a trop de bonté.」と云ふイリーナのつゝましやかな聲が聞えた。

十四

リトウイノフは大公爵夫人の一行の姿が見えなくなるのを待つて、自分も並木道を歩きだした。彼は自分で自分の心持が解らなかつた、彼は恥かしさと恐ろしさを感じながら、而も或る慰藉心の滿足を感じないではゐられなかつた……思ひがけないイリーナの打明け話には全く驚かされて、彼女の早口の燃える樣な言葉は、さながら雷鳴の樣に彼の耳に響いた。彼は思つた。「あの社會の女と云ふもの

は奇妙なものだ。まるで矛盾だらけだ……自分で其の恐ろしさを知つてゐながら周圍のものに取卷かれて悪くなつて行くなんて！」……一層辛い考が起るのをふせぐ爲に斯んな陳腐なことを機械的に考へてはみたものゝ、彼の本心は決して斯んな考を抱いてはゐなかつた。彼は眞面目に、今は考へ度くない、眞面目に考へると自分を責めねばならぬ樣な氣がしたので道で出會つたものに何でも構はず注意を向ける樣にしてゆる〳〵歩いて行つた……不圖彼は或る場所の前に來たことに氣が附いた、そして其の場所に座つてゐる誰かの足が眼に止まつたので頭を上げて上を見た……其の足は座つて新聞を見てゐる人の足で、よく見るとパツーギンだ。リトウイノフは幽かな聲をあげた。パツーギンは讀んでゐた新聞を膝の上に卸してにこともせずに凝とリトウイノフに眼を注いだ。リトウイノフもにこともせずに凝とパツーギンに眼を注いだ。

「一緒に腰かけてもいゝですか？」と暫くして彼が口を切つた。

「結構ですとも。然し申上げて置きますが私、とお話をなさるのでしたら腹をお立てになつちやいけませんよ――私は今非常に悲觀してゐて何んなことでもひどく不愉快に思はれてならぬのですから。」

「何、構ひませんよ、ソゾント・イワニッチ、」とリトウイノフは其處にぐつたりと腰掛けて、「是はいゝ處ですね……然し何うしてそんなに悲觀してゐるのです？」

「機嫌が惡くならべき理由はない筈なんですがね、」とパツーギンが云ひ始めた。「今私はこの新聞で露西亞の裁判を改革するやうになつたことを知りましたが、次第に良くなると思つて眞から嬉しく思つたのです。而も今までの樣に獨立や、國家や、獨創などの觀念に縛られて自分の國で造つた小さい金具を、歐羅巴のはつきりした、正しい論理に無茶苦茶に當て嵌めるやうな改革ではなくして、外國から新しい善いものを、どん〳〵取入れると云ふのです。其の採用は農民に適用するだけで充分なんです。……共有制は何うすることも出來ないです！……實際、私は機嫌が惡くなるべき理由はない筈なんです。ところが不幸にして私は過然露西亞の或る『粗末なダイヤモンド』に出逢つて其の男と話をしたのですが、其の自分で仕上げた天才の粗末なダイヤモンドが私を酷い目に會はしたのですよ！」

「粗末なダイヤモンドつて一體何の事なんです？」

「自分で音樂の天才だと思ひ込んでゐる男が、此處に遊びに來てゐるのです。其の男が斯う云ふのです、『己れは無論何も仕ないんだ。己れは稽古をしないから駄目なんだが、これでも內にはマイエルベールに負けないほどのメロディヤ思想があるのだ。』と斯う云ふのです。けれども第一何故稽古をしないのです？次にマイエルベールどころか、最も詰まらない獨逸の管絃樂の憐れな笛吹きでさへ稽古をしない天才を集めたより十層倍も二十層倍も澤山の思想を持つてゐます。たゞ其の笛吹きは自分の思

想を派手らしくもモツアルトやハイドンの國に示して自慢せずに自分の胸の中に仕舞つてゐるだけなんです。だのに粗末なダイヤモンドはちよつとしたウオルツか唄でも遣りだすと直ぐ自分のズボンのポケツトに手を突込んで輕蔑した樣な微笑を唇に浮べながら『己れは天才だ』と來るんです。美術家でも左樣です。何でも左樣です。あゝ！　私は斯んな天才がる奴が大嫌ひです！　斯んな空意張をする者があるのは本當の同化された科學や、本當の藝術がない處に限つてゐるのです。斯んな空意張や俗惡な囈言は露西亞で飢え死する者はない、』だとか、『露西亞ほど早く旅行できる處はない、』だとか、『我が露西亞人は敵を皆んな我々の帽子の下に葬ふことが出來た、』とか云ふ陳腐な文句と一緒に棄てゝ仕舞はなくちやならない時が來たんです。私も露西亞人が豊かな思想を持つてゐることや、正しい本能を持つてゐることや、クーリビンのことは度々耳にしてゐました……けれども其んなものが澤山あつたて何になるのです？　半分居眠をしてゐる囈言か、または半分獸の樣な智慧に過ぎないのです、本能だなんて！　立派な大法螺ですよ。森の中の蟻を其の巣から、一哩はなれた處に放して御覽なさい、獨りで其の巣に歸つて行きます。人間はそんなことはとても出來ないです。けれども其れが何です？　人間にそんなことが出來ないと云つてそれで人間が蟻に劣ると云へますか？　幾ら正しいと云つても本能は人間のものぢやない。考へ、單純な、まつ直ぐに、普通の考へ――それが私たちの授かつたものでもあれば、私たちの誇でもあるのです。考へは本能の樣に不思議なことはしないけれど、總てのものが考への上に立つてゐるのです。次にクービリンですが、彼の人は機械の事は何も知らないで拙い時計を三つ四つ拵らへたさうですが、私だつたら其の時計を柱に懸けて置いて『斯んなものを拵へらるのぢやないよ』と皆んなに云ひますね。クービリンを貴めるのぢやない、彼の仕事を貴めるのです。テルーシュキンが海軍本部の高塔に登つた大膽さと賢さを褒めるのは結構です。褒めるのが當り前です。けれども何も彼が出た爲に獨逸の建築家が馬鹿になつて、金を拵へるより他に能がなくなつたと大聲で叫び廻るには當らないのです……獨逸の建築家は彼が出た爲にちつとも馬鹿になつた譯ぢやない。その塔の周圍には、後で皆んなが足場を拵へて修繕したぢやありませんか。稽古しないで何でも出來ると云ふ樣な思想は何うも露西亞には奬勵したくないものですね。幾らソロモンの頭腦を持つてゐる人でも始めはABCから習ふ必要があるのです。でなければ默つてちつと座つておとなしくしてゐるのです！　やあ！　暑くなつてしまつた！」

パツーギンは帽子を脱いで、ハンカチでばた〳〵顏を扇ぎ始めた。

「露西亞の藝術、」と言葉を續けて、「實に此露西亞の藝術……露西亞人の無作法と自惚は私も知つてゐます、また折れ易い性質も知つてます、けれども露西亞の藝術は、失禮ですが、まだ見たことがないの

です。彼等は二十年間もあの下らない自惚家のブリュロフを崇拜して、我が國にも一つの派が生れて、而も他の派より氣が利いてゐると信じ込んでゐたのですからね・・・露西亞の藝術、ハッハッハッ！」

「失禮ですが、ソゾント・イワニッチ、」とリトウイノフが口を出した。「ぢや君はグリンカも駄目だと仰つしやるのですか？」

パッーギンは頭を掻いて、

「御存じの通り元來例外と云ふものが却つて法則を證明するのですからね。けれどもその例外だつて私たちは餘り誇る譯に行かないのです。グリンカは偉大な音樂家で、たゞ內的と外的の境遇に邪魔をせられて露西亞の歌劇の創始者となすことが出來なかつたのだと云つても、誰も異議を唱へるものは無いかも知れませんが、それはあまり期待が多き過ぎるのです。彼等はグリンカを音樂界の司令官や元帥に祭り上げて、他の國民を輕蔑するのです。彼等はグリンカに比較すべき人は無いと斷言する。それからまた自國の驚くべき天才の名をあげるでせうが、その作曲は外國の二流の作曲家の憐れむべき模倣に過ぎないのです。えゝ、二流の作曲家の模倣ですよ。何故と云ふにそれが一番模倣し易いからなんです。グリンカに比較すべき人が無い？　ほんとに無智な人たちだ。彼等には藝術の標準が無いのです。そして藝術家と云ふものはあの力の强いラッポと云ふ男などと同じものだと思つてゐるの

です。彼等は云ひます、外國には片手で十五の石を持上げる腕力家があるか、我が國には三十の石を持上げる男がある！　實際これぢや我國のものに比較出來るものはありますまい！　私がよく覺えてゐて何うしても忘れられないお話をいたしませう。昨年の春私は倫敦の傍の水晶宮を見物に行きましたが、君も御承知でせうが、あの宮殿の內には人間の智慧で發明した總てのものが並べてあつて人類の百科全書だと云つてもいゝ位なのです。で私は其の機械や、道具や、偉人の像などの澤山ある中を彼方此方歩き廻りながら斯んなことを考へたのです。今若し何處かの國が地球の表面から消えて、それと同時にこの水晶宮の其の國の發明品も消えるとしたら、その時は我が懷かしい母の神聖なる露西亞はこの水晶宮の釘一つ動かさないで地下に隱れることが出來るだらうと、かう思つたのです。何故と云ふに我が國の有名な產物たる湯沸器だつて、シナノキ纖の靴だつて、馬の手綱だつて、答だつて、あんなものは、皆んな私たちの發明ぢやないのです。ところが、サンドウイッチ島の土人だつていろ〳〵の發明をしてゐますよ。奇妙な獨木船や投槍を發明してゐますよ。ですから若し其の島が消えて無くなるとしたら、水晶宮の見物人に、それと氣が附く譯です。そういや口が惡すぎる！　餘り酷だ！　と仰つしやるかも知れませんが、第一に私は仔鳩の樣に鳴く術は知りません。また第二に正面に見られないのは惡魔だけぢやないと云ふことは解り切つたことなんです。誰だつて自分の顏はまと

もに見えませんからね。また撫でられながら眠るのを好むのは小兒ばかりぢやありませんからね。私たちの發明で古いものは大抵東の方から來たので、新らしいものは半分毀れたまゝ西の方から來たのです。それで、露西亞藝術の獨立だなんて！　或る大膽な人が露西亞の科學で發明しました。私たちに於ても二々が四は、他處の國と同じだが、其の結果は一層巧みに得られたと思つてゐるらしいのです。」

「ちよつと待つて下さい、ソゾントイ・ワニッチ、」とリトウイノフが聲を出した、「ちよつと我が國からだつて少しは萬國博覽會に出品したり、歐羅巴にだつて輸出してゐるぢやありませんか。」

「えゝ、まだ手を入れぬ原料や、手を入れね產物を輸出してゐます。ところが君、其の手を入れぬ產物が善い譯は其處に惡い原因があるからなんです。例へば、我が國の豚の毛は太くて强いと云ひますが、それは我が國の豚が貧弱なからです。また革が厚くて强いと云ふのは牛が痩せてゐるからです。脂が豐かなのは肉がくつ附ついたまゝ煮るからです……然し斯んな事は長たらしく饒舌らんでも、君は農藝を研究なさつたのですから、君の方が私なんかよりずつとお詳しい譯ですね。よく世間の人は露西亞人の發明力と云ふことを云ひます！　露西亞人の發明力！　我が國の百姓は穀物を乾かす爲には昔ル！リック時代にした樣に束を煖爐に突込みますが、その手數をはぶく機械が無いのを何故不平に

思ふのでせう。この煖爐が實に贅澤なものなんです……丁度シナノキの靴や、露西亞の筵と同樣です——何時も火を燃やしてゐるのです。百姓は不足を云つてゐても、まだ穀物を乾す機械は發明されないのでせう？　それは斯うなんです、獨逸の百姓は今の樣に穀物を打つてゐるから其んな乳燥機械なんか必要がないのです！　だから發明されないのです……たゞそれだけなんですよ。今度あんな粗末なダイヤモンドや自稱天才に出遇つたら『待ちたたまへ君、乳燥機械は何處にあるんです。それが欲しいもんですね、』と云つてやらうと思つてゐるのです。然し斯んなことは先生たちに出來やしない。昔サン・シモンがフーリエが脫ぎ捨てた古靴を頂いて神聖な遺物の樣に云ひふらす……まあこんな事が先生たちに出來るだけなんです。それからまた佛蘭西の名の知れた都會に住む賤民の昔から今までの記事でも出鱈目に書く……こんなことも出來るでせう。ところが或る時丁度君の友人のウオロシロフ君の樣な人で記者で經濟學者と云ふ人に逢つて、佛蘭西の都會を二十數へてみろと云つてやつたことがあるのですが、その答が何うでせう？　其の人は困つてしまひしたが、暫くしてモン・フェルムイを佛蘭西の郡會の一つに數へましたよ。多分ポール・ド・コックの小說で思ひ出したのでせう。この話で思ひ出しましたが、斯んな話があるのです。或る日銃を持つて犬を連れて私が森の中を歩いてゐますとね——」

「ぢや君は銃獵がお好きなんですか？」とリトウイノフが訊ねた。

「少し遣れるんです。その時私は鷸を探しに沼地の方に歩いてゐたのです。その沼地のことは他の獵師から聞いてゐました。すると小屋の前の空地に、材木屋の番頭が座つてゐて、それが皮を剝いだ果物の樣な滑つこい初々しい顏をして何やら眺めながら、頻りにに〳〵してゐるのです……何を眺めてゐるのかは解らないのです。で私が、鷸の澤山ある沼地と云ふのは何處ですか？」と訊ねますと、「ゐますよ、ゐますよ、」と一留でも貰つた樣なほく〳〵顏ですぐかう答へたのです。「あの沼が一番いゝです。いろいろな鳥が吃驚するほど澤山ゐますから。」で私は其處に行つてみたんです。ところが鳥なんか影も見えないばかりか、沼も大分昔に干からびてゐるのです。此處です、何故露西亞人は嘘をつくのでせう？　何故經濟學者は嘘をつくのでせう？　何故水鳥の事まで嘘をつくのでせう？」

リトウイノフは返事はしないで、たゞ溜息をついた。

「然しこの經濟學者の話になりますが、」とバツーギンは話を續けて、「社會學の最も抽象的な問題を事實によらないで、論理ばかり論ずる場合には……最う鳥の樣に飛び出してすつかり驚の樣になつてしまふのです。私はこの鳥を一度うまく捕まへたことがありますがね、私は其の時あなたがつてちよつと御覽になつたゞけでお解りになる樣な小さい係蹄を用ひたのですよ。其の時私は例の近頃の所謂、

「新しい青年」といろ〳〵な問題を話してゐましたが、其の青年は若い人に有り勝ちの辭で非常に熱くなつて來て、ことに結婚問題の話になるとまるで小兒の樣に興奮しながら、私に喰つてかゝりました。私は次から次に話を進めて行きましたが……まるで石垣に向つて話をしてゐる樣なものでした！これではとても駄目だと考へてゐると旨い考へが浮んで來ました。「君には敬服しましたよ、」と切り出したのです……こんな「新しい青年」にはよほど丁寧に話さなくちやなりません……「君には實際驚きました。君は自然科學を研究してゐるのにまだ一度も肉食動物……野獸や鳥類……が皆んな自分の仔や自分自身を養ふために肉を探して來なくちやならない事をお考へになつたことがないなんて……多分君は人間もそれと同樣だと思つてゐらつしやるのでせう？」と訊ねると其の「新しい青年」は、「無論人間は肉食動物ですからね。」と云ふのです。「そして肉を掠奪しますか？」「はあ、掠奪します。」「左樣だとすると私は君が其んな動物が、一夫一婦主義で生きてゐるのに氣がおつきにならないのを驚きますね。」かう云ふと青年は吃驚して、「何故です？」と訊ねます。「左樣ぢやありませんか、獅子や、狼や、狐や、鷹や、鳶などのことを考へて御覽なさい。實際君は彼等が左樣しない譯が話せますか？二つの動物が一緒になつて子を養つて行くのはなか〳〵難かしいのです。」かふ云ひますと青年はじつと考へてゐましたが、「けれども其んなことを人間に當て嵌める譯には行きません。」と云ひました。で

私が其の青年を理想家だと云つて遣つたら、青年も本氣になつて唯つてかゝつて、最う泣きさうになるのです。それで私は他の人に話しはしないから安心したまへと慰めてやつたのですがね、理想家と云はれる樣な人を笑ふことは出來ないものです。今の青年が考へ違ひをしてゐるのは此處なんです。彼等は古い、曖昧な、埋もれた仕事をやる時代は最う過ぎてしまつて、時代後れの親父等は土龍の樣に穴を堀るのもよからうが自分たちには恥かしくてそんなことは出來ない、自分たちは日光に照らされながら仕事をするのだ、とかう考へてゐるのです。氣の毒の人たちです！　なあに、その人たちの子供が何で仕事をしますものか。其の時自分でもまた昔の道を戻つて地の中の穴を堀つて行く氣になるでせうか？」

其處に短かい沈默があつた。

「私は斯う思ふのですよ、」とパツーギンはまた口を開いた。「科學や、美術や、法律だけが我々が文明から受けてゐる恩惠ではない、美や詩を愛する感情なども矢張り文明から力づけられて發達するものなんです。そして所謂通俗な、單純な無意識な作は何にもならぬ駄目なものだと思ふのです。ホーマーの中にでさへ洗練された複雜な文明の跡が見えます。愛そのものが文明によつて豐富にされてゐるのです。國粹主義者があんなにちつぽけな心を持つてゐなかつたら、斯んなことを云ふ私を絞め殺してしまふでせう、けれども私は何んなことがあつても自分の主張は曲げないつもりですよ。そして何んなに皆んなが私に向つてコハンチコフ夫人や「暇な蜜蜂の群」をけしかけて來ても――私は最高の社會の人ではありませんからあの露西亞の百姓から絞り取つた匂ひには辛抱出來ないのです。あの社會の人たちは時々自分を振り返つて見て自分が本當に佛蘭西流になつてゐるか何うか確かめないでは何うしてもゐられないのですが、露西亞の間違ひだらけの文學もこの佛蘭西のお蔭で育つてゐるのです。まあ「蜜蜂」の頁の中から一番「通俗」な純粹なところを選んで百姓たちに讀んで聞かしてごらん――其の百姓は熱病か酒醉ひの男の前で呪文でも唱へてゐるのかと思ひますから。また繰り返して云ひますが、文明と云ふものがなかつたら詩でさへ生れないのです。若し君が文明以前の詩が何んなものであつたかを知り度ければ、我が國の民謠や傳說を調べてごらんなさい。戀愛は何時も魔法や呪咀の爲だと現はされたり、戀愛は惚藥の結果だと說かれてゐるのは有りふれたことで、我が國の叙事詩などは歐羅巴にも亞細亞にも殆ど例のないものです。御覽なさい、我が國の叙事詩には何時も定りきつた代表的な男や女が出て來ない――ワンカ・タンカなどを數へれば、そりやまた別ですがね。それからまたあの尊い露西亞の騎士が「女は次第に增長する！」と云ひながら女の白い肌を慘酷に嚙つ樣なところも別ですが。あんなものは、捨てゝ置くとして、野蠻なスラヴ民族の想像に描かれた」

premier の美しい姿を考へてごらんなさい。まあこの小公子が這入つて來るところを考へてごらんなさい、黑色の外套を着て、縫目をよく縫合はし腋の下には七重の絹の紐をつけ、長く垂れた袖に手を藤して、上衣の襟を頭の方まで伸ばして前から見ても赤い顏がよく見えず、後から見ても小さい白い襟首が見えないほどにして、片方の耳が隱れるほど帽子を横に冠つて、それから足には靴屋の大針の樣に尖つた細い靴を穿いて、踵をまるで釘の樣に高くしてゐます、ですから靴の先のぐるりを卵が轉び廻ることも出來れば、踵の下を雀が飛び拔けることも出來るんです。さうしてぞろ〳〵と歩いたものですが、この歩き方のお蔭であのチウイロ・プレンコウイッチのやうな、アルキビアデスの連中が年を取つた女や若い娘たちに麻藥の樣な驚くべき感化を及ぼしたのです。我が國のにやけた給仕たちや、生粹の露西亞趣味、露西亞のお洒落の精粹と云はれる歩き方もこれなんです。私は冗談云つてゐるのではありませんが、こんな粉袋の樣な美しさが理想的の美なんです。君何う思ひます、これが立派な型でせうか？　こんな姿が繪や彫刻の材料になるでせうか？　そしてこの『兎の血の樣に赤い顏をした』小公子を魅惑する美人はどんな女でせうか？……君は私の話を聞いてゐらつしやらない樣ですね？」

リトウイノフは吃驚した。彼は實際パッーギンの話を聞いてはゐなかつた。彼は先ほどから頻りと

イリーナのことや彼女と先刻逢つた時のことを考へてゐたのであつた……

「御免下さい、ソバント・イワニッチ、御邪魔でも私はまだ先つきの樣な質問がしたいのです……あのラトミロフ夫人のことにつきましてね。」

パッーギンは新聞紙を疊んでポケットに仕舞つた。

「私が何うしてあの人と懇意になつたかまた聞き度いと仰つしやるのですか？」

「さうぢやないのですが、私はあの人がベテルブルグで仕た事に就いて……君の御意見が御伺ひしたいのです。何んな事を仕たのですか？」

「何う御返事していゝか私にも解りませんね、グリゴリー・ミハリッチ。私は、ラトミロフ夫人とは隨分懇意でしたが——ほんの偶然なことからちよつとの間だけだつたのですからね。あの人の眞の生活は覗いたこともありませんし、其處に何んな事が起つたのかも知らないのです。尤もちよつとした噂は私も耳にしましたが、御承知の通り惡口が流行るのは私たち平民階級ばかりのことではありません です。それにまた元來私はそんなことには無頓着な方なので。けれども君は、」と云つて暫く言葉を切つて、「隨分あの女に興味を持つてゐますね。」

「えゝ、二度ばかりあの女と隔意なく話をしたことがありますが、あの女は誠實な人だらうか何うだ

らうかと思つてゐるのです。」

パツーギンは眼を伏せて、

「感じの強い女は皆さうですが、あの人も感情に支配されてゐる時には誠實です。時には自負心が嘘をつく邪魔をする場合もあるらしいです。」

「あの人は自負心の強い人ですか？　私は寧ろ氣紛れな人だと思つてゐましたが。」

「惡魔の樣に自負心の強い人ですが其れは何も惡いことはないのです。」

「あの人には誇張があるらしいですね……」

「それも惡いことはないでせう。何うせ眞面目なのですから。然し、眞實が何うして聞かれますものか？　あんな社交界の人は何んな良い人でも骨髓まで腐つてゐるのですからな。」

「然し君はあの人の友達だと云はれましたね。そして私を無理にあの人の處に引つ張つて行きましたね？」

「それが何うしたのです？　あの人が引つ張つて來いと云ひましたから左樣してもいゝと思つたのです。また實際私はあの人の友達なんです。あの人にはいゝところがあります。なか〳〵親切です。つまり寛大なんですね。そして自分で要らないものはどん〳〵他の人に與へる質なんです。しかし君だ

つてあの人のことについて私が知つてゐるぐらゐのことは知つておいでゞせう。」

「イリーナ・パウロウナを十年前には知つてゐましたが、しかし其後……」

「あゝ、グリゴリー・ミハリッチ、何うしてそんなことを云うのです？　人の性質がそんなに變るものだと思つてゐるのですか？　人と云ふものは搖籠の中にゐる時も墓に這入る時も同じことです。事によると君は」ここでパツーギンは一層顏をうつむけて、「事によると君はあの女が擴げた手の中に這入るのを恐れてゐるのぢやありませんか？　屹度さうでせう……けれども無論そりや人間はどの女かの手には陷るものですよ。」

リトウイノフは忍び笑ひをしながら、「左樣思ひますか？」と云つた。

「そりや逃げられないですよ。男は弱くて女は强い、そして機會は何うすることも出來ないカを持つてゐて、悅びの無い生活をしようと決心するのは難かしく、自己を全々忘れてしまふのは不可能です……また一方には美とか、同情とか、温かさだとか、光りだとかがある……何うしてそれが拒めませう？　まるで子供が其の乳母の方に走つて行くやうなものです。ところが嬲て定りきつて冷たい暗い空虛を感ずる時が來る……何時かはね。そして終には總てのものが不思議に見え、何も解らなくなつてしまふのです。初めは戀がどうして有り得るだらうかと思つてゐるが、終には何うして人生が有り

得るだらうかと思ふ樣になるものです。」

リトウイノフはパツーギンを、ちらと見た。そして彼はまだ此の人ほど孤獨な、寂しい、悲しい人は見たことがないと思つて頭を打たれるやうな氣がした。此の時のパツーギンは恥かしがりもしなければ悶くなりもせず、蒼白くうつむいて顏を胸に埋め、兩手を膝の上にのせたまゝ、身動きもしないで座り、力なげに微笑むでゐた。リトウイノフはこの憐れな、苦勞性の、風變りな人を氣の毒に思つた。

「イリーナ・パウロウナは話の序に、」とリトウイノフは低い聲で云つた「あの人の仲のいゝ友達だと云つてよく覺えてはゐませんが、夫でもピエルスキーだとか、ドルスキーだとか……」

パツーギンは物悲しさうな顏をしてリトウイノフを見ながら、「あゝ！」と重たい聲で、「ぢや夫人が……然し、最う遲くなりました、」と故意とらしい欠伸をしながら、「私は歸らなくちやならない——御飯ですから。ぢや左樣なら。」

かう云つて彼はリトウイノフが返事をしない中にそゝくさと其處から身を起こして立去つた……リトウイノフの同情は不快の念に變つて來た……無論その不快の念は自分に對する不快の念である。彼は物事を熟考しないではゐられない質であつた。彼はパツーギンに對する自分の同情を云ひ現はさう

としたのだが、それが却つて不器用な阿諛の樣なものになつてしまつた。彼は心の中に窃かな不滿を抱きながら自分の旅館の方に足を向けた。

「あの女が骨の髓まで腐つてゐる、」と彼は歩きながら考へた、「あの女は惡魔の樣に自負心が強い！己の前に跪かんばかりになつたあの女が自負心が強いのか？ 自負心が強くて氣紛れではないのか？」

リトウイノフはイリーナの幻を頭から消さうとしたがどうしても駄目だつた。其の爲に許嫁のことは考へなかつた。彼は今日中はこの幻が消えないだらうと思つた。彼は最う氣を揉まないで驚ては來るべきこの『不思議な事件』の解決を待たうと思つた。この解決が最も無邪氣な平凡なものとなつて現れるだらう事は少しも疑はなかつた。かうは考へたものゝ其の間に彼の頭に度々浮んだものはイリーナの面影ばかりではなかつた……彼女の口から出た一句一句が彼の記憶に幾度も〳〵甦つて來た。

給仕が手紙を持つて來た。それはイリーナからであつた。

「今夜、用事がありませんでしたら來て下さい。妾一人ではなくて、お客樣も澤山ございますから、此の社會の人たちがどんなものか御覽になるのに都合がよいと存じます、何卒其の人たちの何ものかをお認めになることを希望いたします。多分其の人たちは最も華やかなところを示すでせう。妾の生活してゐる雰圍氣が何んなものか御覽下さい。何卒來て下さい。お待ち申してゐます。あなたも御退

屈なさる様なことはございますまい。（イリーナは此處で露西亞語の綴りを間違へてゐた。）何卒今日妾たちが話し合つたことによりて二人の間の誤解が永久に解けたと云ふことを事實に於て證明して下さいまし。」

リトウイノフはフロックコートに白い襟飾を結んでイリーナの處に出かけた。「斯んなことは何でもないことだ、」と彼は途々考へた。「皆んなが何んな人か見に行くのもいゝではないか？　何しろ珍らしいからね。」三三日前にはこの連中が彼に今とは違つた感じを起こさせて、彼を怒らしたのだ。

彼は帽子を眼深に冠つて、湧き上る微笑を唇で押さへながらいそ〳〵と歩いた。ウェーペルの珈琲店に腰かけてゐたバムバエフは遙かにリトウイノフの姿を指差しながらウオロシロフとビシュチャルキンに向つて興奮した聲で斯う云つた。「あの男が見えるか？　あいつは石だ！　岩だ！　燧石のやうな奴だ！」

十五

リトウイノフはイリーナの家に澤山の客が來てゐるのを見た。隅の方の骨牌をする卓子のそばには先日山で見た三人の將校の、肥えたのと、短氣なのと、謙遜家とがゐた。彼等は三人でウイスト（骨

牌遊びの一種）をしてゐたがその術を用ひたりクラブやダイヤモンドを取扱ふ態度の眞面目さはとても言葉では云ひ現はせないほどだ……彼等は最う立派な政治家であつた！　これらの立派な將校は遊ぶ時によく用ひられるちよつとした言葉などは、たゞの平民や中產階級の人にまかして、ただ何うしても必要な短かい言葉のみを口に出した。尤も肥えた將軍は骨牌の間で「Ce satané as de pique！」と言つた。來客の中にはリトウイノフが先日山で見た婦人たちもゐた。其處にはまた歩くたびに體が千切れさうな老婦人もゐたが、その老婦人は凄い艶のない灰色になつた裸の肩を搖すつて扇で自分の口を隱しながら死んだ樣な眼でさも疲れたらしくラトミロフの方を横目で見てゐた。彼の方でもこの婦人に對しては非常な尊敬を拂つてゐるので、この婦人とそカザリン皇后の女官の中で今まで殘つてゐる唯一人の人で、上流社會で大變尊ばれてゐるのであつた。窓の傍には「足長峰の女王」Sの伯爵夫人が若い人たちに取圍まれて羊飼ひの樣な風をして座つてゐた。その中には有名な金滿家でお洒落のフィニコフもゐたが、此の男の大層な態度と云つたら非常なもので、頭の平たいところや、元氣のない顏附には何處かブルガリアの王が、羅馬のヘリオガバルスにしてもいゝところがあつた。これも伯爵夫人でリーズと呼ばれてゐる婦人は、髮の長い、美しい蒼白い唯神論者らしい中背の人に何やら話してゐて、其の傍には矢張り蒼い顏の髮の長い紳士

が意味ありげに頷りとにや〳〵してゐた。唯神論者だことはこの人も同樣だが、この人は其の上豫言に趣味を持つてゐて、何時も默示錄や希伯來經典を元にしてはいろ〳〵な驚くべき豫言をする。其の豫言が當つたことは一度だつて無いのだが、彼はそんなことには頓着しないで相變らず豫言を續けてゐた。ピアノの前にはパツーギンを立腹さした音樂の天才の粗末な金剛石が腰を据えてゐたが、彼は手當り次第の鍵を無意味に叩きながらぼんやり周圍を見廻してゐた。イリーナはカコー公爵と夫人の間に挾まれて長椅子に腰かけてゐたが、このH夫人と云ふのは昔は美と才智で評判だつたのだが、今は老衰して見るかげもなく、何だか身の周圍に邪惡の消え失せた聖い匂ひの漂ふ樣な人である。イリーナはリトウイノフの姿を見るや否や、さつと顏を緋らめて立上り彼が近づくと其の手を温く握りしめた、彼女は目立たぬほどの金の飾りを僅かに其の眞つ黑いクレポンに輝してゐたが、肩のあたりの肉は死んだ樣に白く、何時もは蒼白い顏に一時にぱつたぼんのり赤い血の氣を見せて、美の勝利に喘いでゐるのみか、窃かな殆ど皮肉な歡喜が其の半ば閉じられた眼元や、唇や鼻孔のあたりに漂き顫へてゐた……

ラトミロフはつか〳〵とリトウイノフの傍に歩み寄つて例の丁寧な態度で挨拶したが、何時もの戲れる樣な調子は見えなかつた。そして彼を三人の婦人、先つきの昔の老婦人と足長蜂の女王とリザ伯

爵夫人に紹介した……彼等は慇懃に挨拶した。リトウイノフは彼等の社會の人ではなかつたが、風采もいゝ方だしそれに若々しい印象的な顏が彼等の興味を惹くのであつた。たゞ彼にはその興味を何う自分に結びつけていゝのかゞ解らなかつた。社交に不馴れな彼は何だかきまり惡い樣な氣持がするのに肥えた將軍は遠慮なく彼を見詰めた。「あゝ……つまらないたゞの男！　自由思想家！　己れたちの前に跪いて手でも接吻しろ！」とかう其の眼が云つてゐるやうに思はれた。イリーナはリトウイノフを助けに來た。そして巧みに彼を自分の後ろの扉のそばの方に退かせた。彼女が彼に話かける時には何時も後ろに振返らなければならないので、彼は女が振返る毎に其の美しい頸根の見事な曲線を讃美の念を持つて眺めることが出來、其の頸の髮の微妙な香を呼吸することが出來た。女の顏には始終深い靜かな滿足の色が浮んでゐて、其の微笑にも其の目差にも滿足のみが輝いてゐることは彼にもよく解つた。そして同時に彼も同樣の情緒に滿たされて恥しくもあれば嬉しくもあり、また恐ろしいやうな氣もするのであつた……そして彼女は斷へず「何うです、この人たちを何うお考へです？」と訊ねてゐるやうに思はれた。其夜一座の誰かゞ俗惡な言葉や行ひを見せたことも、一度や二度ではなかつたが。其んな時にはリトウイノフは此の口に出されぬ質問を殘にはつきり聞くやうな氣がした。或る時には彼女も自分の感情を隱さないで聲を上げて笑つたほどであつた。

リーザ伯爵夫人は迷信の深い人で何でも妙なことに興味を持つた人であるが、唯神論者とホームのことや、卓子を動かせる死靈のことや、ひとりでに鳴る手風琴などの議論を得心するまで續けたあとで、催眠術にかゝる動物があるだらうかと云ふ質問を出した。

「まあそんな動物が一匹だけはゐますね、」と稍々離れた處からカコー公爵が答へた。「あなたメルワノフスキーを御存知でせう？　あの人を私の前で眠らせうとした處がとう〳〵鼾をかき出しましたよ、ハッハッハッ！」

「まあお口の惡い、妾は本當の動物のことをお話してゐるのですよ、獸のことをお話してゐるのですよ。」

「Mais moi aussi, madame, je parle d'une bete....」

「斯んなのがありますよ、」と唯神論者が口を出した、「例へばですね――あの蟹です。あれは非常に神經が強くて直ぐ催眠狀態に陷りますよ。」

伯爵夫人は吃驚して、「えッ！　蟹がー　本當ですか？　まあ面白い！　見たいものですね、ルージン、」と云ひながら新しい人形の樣に無表情な顏をして石の樣に固い頸根を持つた一人の若い男に眼をくれた。（この男はこの顏やこの頸をナイアガラやニュビアンナイルの飛沫に濡らしたと云つて自慢に

してゐるのだが、その旅行のことはまるで忘れてゐて、今では露西亞の酒落を云ふのを仕事にしてゐた……）「ムッシュー・ルージン、濟みませんがあなた今直ぐ此處に蟹を持つて來ては下さらない？」

ルージンは故意とらしく笑ひながら、「直ぐですか、それとも直ぐにですか？」と訊ねた。

伯爵夫人にはそれが解らないらしい、「えゝ、蟹ですよ、une écrevisse ですよ。」

「えッ？　何ですつて？　蟹？　蟹？」と伯爵夫人が鋭どい聲で訊ねた。この夫人はウェルディエ氏がゐないのを先つきからもどかしく思つてゐたので、あの面白い佛蘭西人を何故イリーナが招待しなかつたのか何うしても合點が行かなかつたのだ、昔の老婦人は早や長い前から耳が全く聞えなくなつてゐて、何も解らないのだが幽かに頸を振つてゐた。

「Oui, oui, vous allez voir, Mgieu suzhin.　何卒……」

若い旅行家はちよつと會釋して姿を隱したと思ふと直ぐまた戻つて來た。其後から一人の給仕がにや〳〵笑ひながら皿の上に大きな黑い蟹を一尾のせて持つて來た。

「さあ、奥樣、」とルージンが叫んだ、「これから蟹の實驗です、はつッはッはッ！」（自分の酒落に自分から一番に笑ひ出すのは露西亞人の癖である。）

「はッはッはッ！」とカコー公爵は質のよい愛國者として自分の國のものは何でも大切にする役目を

果すために愛想笑ひをした。

（私は讀者がこの言葉を驚き不愉快に思はれないことを希望する。アレキサンドル座に行つて其の雰圍氣に感化された人は誰でも其の最も拙い洒落にさへ喝采するのではないか。）

「Merci, merci. Allons, allons, Monsieur fox, montrez nous ça.」と伯爵夫人が云つた。

給仕は其の血を圓い小さい卓子の上に置いた。客も皆少しづゝ身を寄せた。五六人の顏は伸び上がつた。けれども骨牌をやつてゐる將校たちだけは相變らず靜かな威嚴を保つてゐた。唯神論者は髮を亂し眉をひそめて卓子の傍に歩みよりながら兩手を宙に振りはじめた。蟹はもじ〳〵しながら鋏を持上げた。唯神論者は段々其の動作を早めて幾度も同じことを繰返したが蟹は相變らずもじ〳〵してゐる。

「Mais que doit-elle donc faire?」と伯爵夫人が訊ねると、

「Elle doâ nester immobile et se dresser sur sa quiou.」とフオツクス氏が强い亞米利加のアクセントを付けて答へて、また指に力を入れて皿の上で振つてみた。けれども催眠術の利き目はなく、蟹は相變らず動いてゐた。聽て其の唯神論者は何だか自分の氣持が旨く行かないと云つて不機嫌らしい顏附をして卓子の傍を離れた。伯爵夫人は彼を宥めてホームの樣な人でさへ斯んな失敗は度々あつたと云

つた……カコー公爵も相槌を打つて其れに同意した。默示錄と希伯來法典の權威は忍び足に卓子のそばによつて力を入れて烈しく蟹の方を指で突く眞似をして僥倖を試してみたが彼も成功しなかつた。蟹が眠るらしい徵候は見えなかつた。人々は給仕を叫んで蟹を持つて行くやうに云ひつけた。給仕は相變らずにや〳〵笑ひながら皿を持つて立去つた。給仕が扉の外に出ると大聲を立てゝ笑ひ崩れるのが聞こえた……やがて料理場の方にあたつて、この露西亞の人たちを皆んなで笑ふ聲がどつと聞こえた。獨修の天才は蟹の實驗の間もピアノの前に座つたまゝ感傷的な鍵を叩いてゐたが、得意のウオルツを彈き始めた。それは無論賞讃に價するものであつた。とう〳〵有名な、デイレツタントのH伯爵（第一章を見よ）も引き出されてオツフエンバツハを元にして自分が作つた小さい歌を皆なに聞かして其の面白い疊句の「Quel oeuf? quel boeuf?」と云ふ文句は一座の婦人連の顏を左右に搖るがせ、小聲で其の歌の眞似をする者もあつたくらひで、皆んなが「いゝねえ！　いゝねえ！」と云つた。イリーナはリトウイノフと眼を見交したが、彼女の口元にはまた例の窃な、皮肉な表情が顏えてゐた……けれども暫くたつと其の表情が一層强くなつて殆ど意地惡いまでに見えて來た。其の時は丁度貴族の利害問題の代表者でもあり選手でもあるカコー公爵が、自分の意見を例の唯神論者に述べるには今が一番いゝ時だと考へて、所有權制度の阻害問題について得意の辯舌を振つてゐたが、唯神論者も亞米

利加的の血の沸かして頻りに辯じ立てゝゐた。公爵は何時もの辯ですぐ高い聲を張り上げて、理論の道はたどらないで、「C'est absurde! cela n'a pas le sens commun!」と云ふ文句を矢鱈に連發してゐた。金持のフィニコフは誰の事だらうが構はず惡口を云ひ始め、希伯來經典家の笛を吹く樣な聲や、S伯爵夫人の顫ひ聲も聞こえた……實際グバリョーフの家で起つたと同じ大袈裟な騒ぎが此處にも起つたが違ふのは此處には麥酒や煙草がなくて皆んながあの時より立派な身なりをしてゐる點だけであつた。ラトミロフは、一座を鎭めようとした。（將校たちは、不機嫌らしい顏附をしてベリースの「Encore cette satanée politique!」と云ふ聲も聞こえた）けれども一座は鎭まらなかつた。丁度其の時何でもこつそり訊ねたがる高官が受け刀になつてゐたが、ぶつ〳〵譯の解らぬことばかり繰返して他の人の云ふことを聽くことも出來ねば自分でもその質問が何であるか考へられないので何うすることも出來なかつた。イリーナは狡猾に議論家たちを戰はせるやうに仕向けては其の度毎にリトウイノフの方も向いて意味ありげな眼を見交した……けれども彼は魔法に罹つた人の樣に凝と其處に座つたまゝ何も聞かずにひたすら其の美しい眼が自分の方に向いて輝き、其の蒼白い、優しい、危險な綺麗な顏が見えるのを待つてゐた。……暫らくすると婦人たちが疲れて來て議論を止めようと云ひだしたのでとう〳〵止めることになつた。……ラトミロフは例のディレッタントにまた歌を所望し、獨修の天

才はまたウオルツを彈いた……

リトウイノフは夜半過ぎまで止まつてゐて誰よりも後から歸つた。其の夜の會話はいろ〳〵の問題に觸れたが興味のない話は皆んなで避けたらしい。將軍たちは嚴肅な骨牌の勝負を終つて嚴肅に皆んなの會話の伸間入りをしたが此の政治家たちが加はるとさすが樣子が變つて來て話は巴里の名高い曖昧女に移つたが、其の女たちの名や才能は皆んなが知つてゐるらしかつた。話はサルドーの最近の芝居や、アブーの小說に移り更らにトラヴィアタの中のパティの話をしてゐると誰やら「秘書官」と云ふ遊びを遣らうと云ひだしたが、これは成功しなかつた。返事は皆な要領を得てゐないばかりか、ともすれば文法上の間違ひさへあつた。肥えた將軍は曾て自分は「Qu'est-ce que l'amour?」の問ひに對して、「Une colique remontée au coeur.」と答へたことがあると云つてから〳〵と笑ひ、昔の老婦人は力を出して彼の腕を扇で叩いたのでお白粉の粉が頰から落ちた。或る老婦人はダニューブルに於けるスラヴの權力と正敎の宣傳の必要を說きはじめたが、誰も調子を合してくれないので自分でシッと云つて口をつむいでしまつた。實際一同が何よりも一番に話したのはホームのことで、「足長蜂の女王」のやうな人でさへ自分のそばに曾て手が這ひまはつてゐるのを見たことや、其の手に自分の指輪を嵌めてやつたことなどを話した。それを聞いたイリーナは確に勝ち誇つたやうに喜んだ。リトウイノフ

もあたりの話に耳を傾けたが彼はたゞの一言も眞面目な話や、賢い思想や、新しい事實を此の繰りも生氣もない雜談から拾ふことが出來なかつた。彼等の叫聲にさへ眞實の感情の響きはなかつた。彼等の惡口にさへ本當の心は表はれてゐなかつた。たゞ時々詐りの愛國的忿怒の假面を冠つて、または故意と輕蔑したやうな平氣な態度で未來のあり得べき損失を心配する悲しさうな泣聲と、子孫も忘れることの出來ないと云ふ二三の名前を齒を喰ひしばつて云ふのが聞こえたばかり……そしてこの騷がしい物音の中には唯の一滴の生命のある水さへ見ることが出來なかつた！　あの人たちの頭は何と云ふ氣の抜けた、無益の無駄事、何と云ふ憐れな些事に滿たされてゐるのであらう！　それも今夜一夜だけでなく、社交界だけに於てではなく、家庭でも、毎日何時でも、彼等の生活の總ての方面で斯うなのであらうとは！　そして何もかも話された後のあの無智は何うだ！　人生を形造るものや、人生を美しくするものに對する彼等の無理解は何うだ！

イリーナはリトウイノフと別れる時にまた彼の手を握つて仔細らしい句調で云つた、「どうです？面白う御座いましたか？　よく御覽になりましたか？　お氣に入りましたか？」彼はこの言葉には返事をしないでたゞ默つたまゝ輕く頭を下げた。

良夫と二人きりに殘された時、イリーナが自分の寢室に行かうとすると……良夫が後から呼び止めた。

「Je vous ai beaucoup admirée ce soir, madame, vous vous êtes parfaitement moquée de nous tous.」かう云ひながら彼は爐棚に凭れて卷煙草を吹かした。

「Pas plus cette fois-ci que les autres.」と彼女は澄まして答へた。

「何の意味なんだい？」とラトミロフが訊ねると、

「何うともお取りなさい。」

「うん、解つてゐるよ。」ラトミロフは猫の樣に邪怪に小指の長い爪の先で卷煙草の灰を頻ひ落して、

「おゝ、時にお前の新しい友達の……何と云ふ名前だつたかねえ？——さう〳〵リトウイノフ君だ、……あの人は非常に賢い人だと云ふ評判だねえ。」

リトウイノフの名を聞いてイリーナは鋭どく向き直つた。

「何うして？」

將軍は微笑して、

「あの人は何時も靜かにしてゐる……まるで人と妥協するのを恐れてでもゐるやうだ。」

イリーナは微笑した。けれどもそれは良夫の微笑とは全く違つてゐた。

「或る人たちが饒舌るやうに饒舌るより……靜かにしてゐる方がいゝぢやありませんか。」

「Allright!」とラトミロフはわざとらしく降服して、「冗談は止めて、あの人の顏は面白い顏だよ、あんなに思ひ詰めた顏附をして……それからあの全體の態度……さうだ」……かう云つて將軍は自分の襟飾を眞つ直ぐに直して頭をかしげて自分の口髭を見詰めてゐたが、「あの人はお前の最一人の友達のパツーギンと同じ樣に共和主義者らしいね。あの人もパツーギンの樣に啞の樣な悧巧なお友達だ。」

イリーナは眼を、ぱつちりと大きく見開いて靜かに眉を上げながら、しつかり結んだ唇を幽かに曲げた。

「何うしてそんな話をなさるの、ワレリアン・ウラジミリツチ、」と彼女は同情するやうな聲で、「あなたは何もない空中に矢を無駄使ひなさつてゐらつしやる……此處は露西亞ではありませんから、誰もあなたの仰つしやることを聞く心配はございません。」

ラトミロフは急所をつかれた。

「斯んなことを云つてゐるのは私ばかりぢやないんだよ、イリーナ・パウロウナ、」と彼は急に咽喉聲になつて、「他の人たちもあの人は何だか共謀者と云つたやうな風が見えると云つてゐたよ。」

「そんなことを？　他の人たち？　して誰です？」

「パリースだつて――」

「えッ？　あの人に其んなことを云ふ必要があるのでせうか？」

イリーナは寒氣に襲はれたやうに肩を搖すつて指先で肩を撫でた。

「あの人に……そりやあの人にだつてあらうさ、イリーナ・パウロウナ、お前は怒つてゐるらしいね若し怒つてゐるとすればお前だつて……」

「妾が怒つてゐますつて？　まあ何うして怒るのです？」

「そりや知らない。けれども多分あんなことを私が云つたので氣を惡くしてゐるのだらう――」

ラトミロフは口籠つた。

「あんなこと？」とイリーナは訊ねるやうな調子で云つた、「あゝ、何うぞ遠廻しに仰つしやらないで早く云つて下さい。妾疲れて睡いのですから。」

彼女は卓子から蠟燭を取つた、「あんなことつてなあに？」

「あのリトウイノフ君のことさ、お前があの人に大變興味を持つてゐることは事實だからね。」

イリーナは蠟燭を持つた手を上げて、火が良夫の顏と同じ高さになるやうにして、注意深く、殆ど物珍らしさうに良夫の顏を覗き込んでゐたが急ち大聲上げて笑ひ出した。

「何うしたんだ？」とラトミロフは眉をひそめて訊ねた。

イリーナは尙も笑ひ續けた。

「え、何うしたんだ？」とまた繰返して足で床を叩いた。

彼は侮辱され心を傷つけられたやうに感じたが同時に彼は自分の眼の前に輕々と大膽に立つ女の美しさに打たれざるを得なかつた――彼女は彼をいじめてゐるのだ。此の時彼は、イリーナの總てのもの、總ての美しさを見た――黑い靑鋼の重い燭臺を握つた細い指先の華奢な爪の石竹色の先でさへ彼の眼に映つた・・・けれども侮辱されたと云ふ感じは益々深く彼の心に刻み入まれた。イリーナはまだ笑つてゐる。

「え？　嫉いてゐらつしやるの、あなた？」かう云つて良夫に背を見せながら部屋を出て行つた。扉の外で、「嫉いてゐらつしやるんだわ、」と云つてまた笑ふ聲が聞こえた。

「ラトミロフは腹立たしさうに妻の後姿を見送つた。彼は此の時でさへ自分の妻の姿と其の動作の魅惑的な美しさを認めないわけには行かなかつた。彼は卷煙草の喫殼を荒々しく爐棚の大理石に潰して遠くへ抛り棄てた。彼の頰は急に眞つ蒼になつて、口のあたりには痙攣が走り、獸の樣な懶い目差で何物か探しでもするやうに床の彼方此方を見詰めた。・・・・優雅らしい影は其の顏から全く消え去つて

ゐた。彼が露西亞の百姓を鞭打つた時の表情は恐らく斯んなであつただらう。

リトウイノフは宿に歸つて自分の部屋に這入つて、卓子に向つて腰かけたまゝ兩手に顏を埋めて身動きもしなかつた。聽て立上つて箱を開けてポケットブックの中からタチアーナの寫眞を取出した。タチアーナの顏は寫眞でよくあるやうに老けて醜く見えて、悲しさうに彼の顏を覗いてゐた。リトウイノフの許婚の女は大露西亞の血を受けた娘で、ブロンドで、肉附がよくて、圓々とした顏はしてゐても、賢さうな、淸い、蒼色の眼には親切な善良な驚くべき表情が籠つてゐて、靜かな白い額には何時も日の光が當つてゐるやうに見えた。長い間リトウイノフは寫眞から眼を離さなかつたが暫くして靜かにそれを押遣つてまた卓子の上に兩手で頰杖をついた。「何もかも濟んでしまつた！」と暫くしてから呟いた、「イリーナ！　イリーナ！」

ただこの瞬間に、彼は始めて自分が何うにもかうにもならないほど深く彼女を愛してゐることや、あの古城で始めて二人が逢つた其の日から彼女を愛してゐることや、彼女を斷えず愛し續けてゐたのだと云ふことに氣が附いた。然し若し誰かゞこの事を、今から數時間前に彼に語つて聞かせたとしたら、彼は何んなにその言葉を驚き、疑ひ、輕蔑するであらう！

「タチアーナ、タチアーナ、私の大事なタチアーナ！　タチアーナ！」と彼は痛々しい聲で呼んだ。そ

の間にも喪服の様に眞つ黑い衣を着て、大理石の様な白い顏に靜かな勝利の光を輝やかしたイリーナの幻は彼の目の前にあり〳〵と浮ぶのであつた。

十六

リトウイノフは終夜まんじりともしなければ、服を脫ぎもしなかつた。彼は非常にみじめであつた。正直な眞つ直ぐな人として彼は義務力と義務の神聖なことはよく知つてゐた。そして自分の弱點や、過失を恥じ、自分を二つに欺くことを恥じた。最初のうちは彼も無感覺であつたが間もなく半分意識されたやうな、曖昧な感覺の陰慘な重荷を感じて、終ひには自分の殆ど征服してゐた未來が闇の中に滑り込んだことや、自分が築いたばかりの堅固な家が不意に身のまはりで、ぐらつき始めたことなどや、とりとめもなく考へては限りない恐怖に襲はれるのであつた。……

彼は頻りと自分で自分を叱責してゐたが急に心を鎭めて、「何と云ふ弱いことだ！」と考へた、「恐れたり自分を責めたりする時ぢやない。己れは實行しなくちやならないのだ。タチアーナは己れの許嫁で、己れの愛と名譽を信じてゐるのだ。そして二人は生涯何んなことがあつても別れるべきものでもないが、また別れられもしないのだ。」彼は心の中にタチアーナの總ての性質を描いては、其の一つ一

つを考へてみた。かうして彼女に對する感情と優しみを呼起さうとした。「己れの取るべき手段は最う一つしかない、」とまた彼は考へた、「逃げ出すことだ、直ぐにも逃げ出すことだ、タチアーナが着くのを待たずにこちらから迎ひに行くことだ。タチアーナと一緒になつて自分が苦しむか、みじめになるか……そんな事はあるまいが……鬼に角こんなことを考へたり心配するのは無駄だ。己れは死んでも自分の義務だけは盡さなくちやならない！　だがお前はタチアーナを欺くことは出來ないよ。」と彼の內の他の聲が囁いた。「お前は自分の心の中の變化をタチアーナに隱すことは出來ないよ。お前が他の女を愛してゐることを知つた時、タチアーナが悅んでお前の妻になるだらうか？　馬鹿な！　馬鹿な！」と彼は答へた、「それは皆んな詭辯だ、恥づべき二心だ、良心を欺くことだ。己れは約束を破ることは出來ない、これが大切なことなんだ。よし、さうだ……すると己れは、此處を立たなくちやならない、他の女には逢はないで……」

けれども此處まで考へて來るとリトウイノフの心臟は口惜しさに波打つた。急に寒さを感じて、そつと身顫しながら欠をがた〳〵と顫はせた。彼は熱病の人のやうに背伸びをして欠伸をした。彼はこの最後の考へを長く思ひ煩はないで無理に押へつけ、他のことに氣を向けて、何故自分はまた……またあの惰らしい不快な周圍にかこまれた腐敗した世間的の女を愛するやうになつたのだらうと不思議

がるやうに考へを其の方に向けた。「馬鹿な、お前は本當にあの女を愛してゐるのか？」かう自分で自分に訊ねてみては、たゞ絶望的に空しく兩手をさすつてみた。彼は尙もいぶかしがつたり、不思議がつたりしてゐた。と、忽ち彼の眼の前の軟らかい香はしい霧の中から心をとろかすやうな人の姿が茫つと現れた。輝く睫毛を見開いて驚くべき兩眼が靜かに拒みがたい力を以つて凝つと覗き込むやうに彼を見入つてゐるのではないか。彼の耳は甘い歌の聲に滿たされて、若い女王のやうな眩しい女の肩は生き〳〵した肉感的な溫かさに波打つてゐるではないか……

明け方になつてリトウイノフの心には充分の決心が出來た。彼は其の日すぐ此處を立つてタチアーナに逢ひに行かうと決心した。そしてその前に最後にイリーナに逢つて、他に方法がないから總てを告白して彼女と永久に別れる事にした。

彼は十二時が來るまで部屋を片づけたり荷造りをしたりした。十二時が來ると彼女に逢ひに出かけた。然し半分カーテンを卸した彼女の部屋を見るとさすがにリトウイノフの元氣は無くなつてしまつた……彼は何うしても旅館の內に這入る氣になれなかつた。彼は二度三度リヒテンターレルの通りを往き來してみた。と、「いゝお天氣ですね、リトウイノフさん！」と一頭立の馬車の上から皮肉な聲が

するので、リトウイノフが眼をあげると英國の馬や馬車を道樂にしてゐる有名な銃獵家のH公爵と並んでラトミロフ將軍が腰かけてゐた。公爵は馬を使ひ、將軍は片方に凭れたまゝ笑ひ〳〵帽子を頭の上に打振つてゐる。リトウイノフも彼に會釋をした。そしてそれと同時に丁度內密の命令にでも從ふやうにイリーナの宿に走るやうに急いだ。

彼女は宿にゐた。そして彼が名を通じると間もなく奥に導かれた。彼が這入つた時に女は部屋の中央に佇んでゐたが、廣く袖の開いた寬らやかな服を着た彼女の顏は蒼白いことは前日の通りであつたが、今日は前日よりも生々した處が無くて如何にも疲勞してゐるらしかつた。客を迎へて懶く頬笑んだ表情の中には一層はつきりこの疲勞が見えた。女は親しげに、けれども何處か氣のなささうに男の前に手を差し伸べた。

「よく來て下さいました、」悲しさうな聲でかう云つて彼女は低い椅子に腰をかけた。「今朝は何だか氣分がはつきりいたしませんです、よく休みませんでしたから。何うでございました昨夜は？　妾が申上げた通りでせう？」

リトウイノフも腰をかけて、

「今日は申上げることがありまして、イリーナ・パウロウナ、」と口を開いた。

彼女は忽ち立上つて向直り、リトウイノフを見詰めた。

「何ですか？　まああなたは死んだ様に蒼くなつてゐらつしやる。お悪いのですか？　何うかなさつたの？」

リトウイノフは當惑した。

「私が？」

「悪いお知らせでもあつたの？　御不幸なことでも起つたのですか、えッ、えッ？……」

リトウイノフも彼女を見入りながら、

「何も悪い知らせを受取つたのぢやありませんが、」としぶ〳〵云つた、「不幸なことは確に起りました、非常に不幸なことが……それで私がお伺ひしたやうなわけなので……」

「不幸なこと？　何んなこと？」

「それは……それは……」

リトウイノフは云はうとした……けれども言葉が出なかつた。彼はいたづらに両手を揉んで指をぽき〳〵音をさせた。イリーナは前屈みにのしかゝつて石のやうに固くなつた。

「おゝ！　私はあなたを愛してゐます！」と云ふ低い呻き聲がリトウイノフの胸からほとばしつたか

と思ふと彼は自分の顔を隠すやうに素向けたえ。

「えッ、グリコリー・ミハリッチ、あなたが、」……イリーナも皆まで云ふことは出來ないで自分の椅子に凭れて両手で眼を覆つた。「あなたが……愛して下さる。」

「はあ……はあ……はあ、」と苦しさうに繰返しながら彼は一層顔を素向けるやうにした。

部屋の中は靜まり返つてゐた。たゞ一羽の蝶が窓と窓覆の間に迷ひ込んで、羽ばたきしてゐるばかりだつた。

先きに口を切つたのはリトウイノフであつた。

「イリーナ・パウロウナ、私は、不幸に陥つてゐます……もし今度も莫斯科の時の様に、うつかりしてゐなかつたら、この不幸を用心して初めから避けることが出來たのです。運命の神が多分私をあなたの手で苦しめるやうにお計らひになつたのでせう。斯んなことが二度とあらうとは誰も思はないのですが……私は原因なしに藻掻いたのぢやありません……けれども藻掻いても藻掻いても運命を逃れ得られる筈はありません。ですからあなたに申上げて此の……此の辛い笑劇を止めることにしたいのです、」と新らしい恥かしさと苦しさを感じながら言葉を結んだ。

リトウイノフはまた沈默した。蝶が相變らずばた〳〵羽ばたきをしてゐる。イリーナは顔から手を

放さなかつた。

「そりやあなたのお考へ違ひちやございませんか？　と云ふ彼女の囁きが其の白い血の氣のない手の下から漏れた。

「考へ違ひちやありませんです、」とリトウイノフは色も艶もない聲で答へた。「私は今まで誰よりもあなたを一番深く愛してゐました。私はあなたを責めはしません。そんな愚かなことはしません。私は若しあなたが平氣で私に逢つて下さつたら斯んなことは少しも起らなかつただらうなんて其んなことを云はうと思つてはゐません……無論、悪いのは私なんです。私に、自信がなかつたのです。私は受けねばならぬ罰を受けてゐるので、斯うならうとはあなたも前にお氣附きならなかつたのです。無論あなたは昔私になさつた過ち……過ちと考へられてゐることを、あなたが其んなに頑に持つてゐらつしやらない方が、私の爲に一層危つけが少なくて、その過ちを償はうとなさらない方がいゝのだと云ふやうなことはお考へにならなかつたでせう……濟んだことは元にかへりません。私はたゞ自分の立場だけ申上げたいのです。隨分難かしいことなんですが……けれども少なくもあなたが仰つしやつたやうに誤解をとき、また私の正直な告白は多分あなたが抱いてゐらつしやる不快な感じを軟らげてくれるだらうと思ふのです。」

リトウイノフは眼を伏せたまゝ話したが、若し彼がイリーナを見たとしても彼女が何んな顏をしてゐるかは解らなかつたゞらう、彼女は相變らず兩手を眼に當てゝゐたから。然し若し其の顏色を見ることが出來たら恐らく彼と驚くであらう。其處には心配と喜びがあつたのだ。一種の幸福な賴りなさと心の不安な動搖が現れてゐたのだ。伏せた瞼の下の眼は光を納めて、寬やかな絕へ〳〵の息はさながら飢えたやうに開かれた唇の上に凍えてゐた……

リトウイノフは默つて、返事でなければ何かの物音を待つた……けれども何の音もなかつた！

「私の取るべき手段は最う一つしかないのです、」と彼は言葉を續けた、「此處を立たうと思ふのです。それでお暇乞ひに來たのです。」

イリーナは靜かにその手を膝の上に落して、

「だつて妾は覺えてゐますよ、グリゴリー・ミハリッチ、あなたが仰つしやつたあの……あの方は此處にいらつしやるのでせう？　あの方を待つてゐらつしやるのでせう？」

「えゝ、ですがあれに書いてやりませう……何處かで私を待つやうに……ハイデルベルヒか何處かで」

「あゝ！　ハイデルベルヒで……さうねえ……あすこなら……ですけども左樣すればあなたの計畫が崩れてしまひますね。グリゴリー・ミハリッチ、あなたはわざと大袈裟にお考へになつてゐるのぢや

ないと云ふことは確かなんですか、Et que ce n'est pas une fausse alarme?」

イリーナは窓を眺めながら靜かに冷やかに時々言葉を切つて云つた。リナトイノフは彼女の終の問ひに答へなかつた。

「けれども何うしてあなたは妾が不快な感じを抱いてゐるなんて仰つしやるの？　妾何も不快な感じなんか抱いてやしませんわ……いゝえ、いゝえ！　若し二人の中誰かゞ悪いのだとすれば、あなたちやありません、あなたゞけちやありません――何卒妾たちのこないだの話を思ひ出して下さい、そしたら悪いのがあなたゞけちやないことがお解りになりますわ。」

「私はあなたの心の廣いのを疑つたことはありませんが、」とリトウイノフは小さい聲で呟いた。「私の仕様と思つてゐることを同意して下さるか何うか、それがお伺ひしたいと思ひます。」

「お行きになること？」

「はあ。」

イリーナは相變らず向ふを見つめてゐた。

「初めお伺ひした時には其れはまだ早すぎると思ひました……けれども今よくあなたの仰つしやることを考へてみますと……そしてまた若しあなたが間違つてゐないとしますと。お行きになつてもいゝでせう。さうなさつた方が二人の爲にいゝでせう。」

イリーナの聲は次第に低くなり、言葉は次第に靜かになつた。

「ラトミロフ將軍もお氣が附かれるでせう、」とリトウイノフが云ひかけた……

イリーナはまた眼を伏せた。そして唇のあたりを妙に顫はせたかと思ふと直ぐ消えてしまつた。

「いゝえ、あなたは妾の言葉を間違へてゐらつしやる、」と彼女は遮つて、「良夫のことを考へてゐるのぢやありません、何うしてそんなことを？　何も氣が附くものはないのですもの。ですけれどまた申しますが、二人は別れた方がいゝでせう。」

リトウイノフは床に落ちた帽子を拾つた。

「何もかもお終ひだ、」と彼は思つた。そして聲に出して、「私は行かなくちやなりません。たゞ後にはあなたにお暇を申上げることだけが殘つてゐるのです、イリーナ・パウロウナ、」かう云ふと彼は自分に宣告を下すやうに急に胸に激痛を覺えた、「たゞ私を悪くお思ひにならぬやうにあなたにお願ひしさへすればいゝのです、そして……そして若し二人がまた……」

イリーナはまた彼の言葉を遮つて、

「待つて下さい、グリゴリー・ミハリッチ、まだ暇は云はないで下さい。あなたはあんまり急いでゐ

らつしやる。」

リトウイノフの心の中で何物かゞ波打つたか燃えるやうな激痛はまた一層烈しくなるのを感じた。

「然し此處にゐる譯には參りません。何の爲です？　此の苦しみを延ばして何になるのです？」

「まだ暇は云はないで下さい。妾は最う一度逢はなくちやなりません……またあの莫斯科の時の樣に默つて別れるなんて……いゝえ、そんなことは嫌でございます。今はお歸りになつても宜しふございますが、最一度逢はずにはお立ちにならぬと確かな約束をして頂き度いと思ひます。」

「それをお望みなんですか？。」

「えゝ、どうしても。若し直ぐお立ちになつたら。妾は決してお許しませんよ、お解りになりましたか、決して！　不思議ですわー」と獨言のやうに、「妾どうしても、バーデンにゐるやうな氣がしない……何だか莫斯科にゐるやうですわ……ぢや、またね。」

リトウイノフは立上つた。

「イリーナ・パウロウナ、何卒お手を。」

イリーナは頭を振つた。

「妾申し上げたぢやありませんか、お暇しないつて……」

「其の爲にお願ひするのぢやないのです。」

イリーナは手を伸ばしかけたが彼が告白してから初めて彼の顏に眼を注いで出しかけた手を引込めた。

「いや〳〵、手は上げますまい。いや……いや。ぢや、またね。」

リトウイノフはお辭儀をして出た。彼には何故イリーナが最後に握手を拒んだのか腑に落ちかねた……何を彼女が恐れたのか合點が行かなかつた。

彼が立去るとイリーナはまた肱掛椅子に身を埋めて兩手で顏を覆つた。

十七

リトウイノフは宿には歸らないで山に登り、とある繁みに這入つて、顏を地面に向けて腹這ひになり、一時間あまり其處にゐた。彼は苦痛も感じなければ、泣もきせず、たゞ一種の重い押つけるやうな昏迷に陷つてゐた。斯んな心地に襲はれたことは彼も初めてゞ、それは堪らなく痛く喰ひ入るやうな虛無の感覺、彼自身や、彼の周圍や、到る處にある虛無の感覺であつた……彼はイリーナのことも思はなければタチアーナのことも思はず、たゞ感じられるのは或る打擊に生命が綱の樣に分裂して彼

の總ての破片が見知らぬ冷たい何物かに掠め去られて行くやうな心地だけであつた。或る時には彼の周圍を旋風が取卷いて其の目まぐるしい廻轉とは、不規則な暗い羽ばたきに舞込まれるやうに思はれた。けれども彼の決心は搖がなかつた。バーデンに止まる……そんな事はかりそめにも考へられなかつた。彼の心は早や飛んで消魂い響を立てゝ喘ぐ汽車の内に座りながら沈默した死の樣に遠い處に走つてゐた。躺て彼は立上つて頭を木の幹に當てたまゝ身動きもせず佇んで、たゞ無意識に片手で羊齒の葉をつまんで其の頂を調子をつけて搖すつた。不圖足音の近づく氣合に我に歸れば二人の炭燒が大きな嚢を背負ひながら急な坂道を降りて來るのであつた。「遲くなる！」かう呟いてリトウイノフは其の炭燒の後を追つて町に降り、停車場に駈つけてタチアーナの伯母のカビトリーナ・マルコウナに電報を打つた。彼は其の電報で直ぐ出發してハイデルベルヒのシュラーデル旅館で待つてくれるやうに頼んだのだ。

「結末をつけるんだ、直ぐにも結末をつけるんだ、」と彼は考へた、「明日まで延ばして何になる。」それから彼は賭博場に足を向けて鈍い好奇心で二三の賭博者の顏を見、やゝ離れてピンダソフの醜い頭とビシュチヤルキンの格恰の好い顏を見て、暫らく廊下で時を過ごした後、イリーナの宿の方に靜かに歩を運んだ。彼は不意を思ひ懸けない衝動に驅られて彼女の宿に行くのではなくて、出立を決心した

と同時に約束を守つて最一度彼女を訪問せねばならぬと思つてゐたのである。彼は門番にも見附けられずに旅館に着いて階段を昇り、誰にも出會さず扉を叩いて、機會的にそれを押あけて部屋の内に這入つた。

部屋の内には同じ肱掛椅子に同じ着物を着て、三時間前と少しも違はぬ同じ姿勢をしてイリーナが座つてゐた……これで見ると彼女はあの時から此の場を立去りもしなければ身動きもしなかつたことがよく解る。彼女は全身を顫はして椅子の腕を握つて、「まあ吃驚しましたわ、」と呟いた。

リトウイノフは當惑したやうに默つたまゝ彼女を見た。そして彼女の顏の表情や光のない目差に驚いた。

イリーナは强ひて笑顏を作りながら亂れかゝつた髪を撫でつけて、「御心配ありません……本當に氣が附きませんでしたわ……此處で居睡をしてゐたのでせう。」

「御免下さい、イリーナ・パウロウナ、出し抜けに遣つて參りました……あなたの御希望通りにしたいと思ひますので……實は今日出發しますから——」

「今日？　だつて妾はあなたがお立ちになる前には手紙をお書きになると仰つしやつたやうに覺えてゐますが——」

「電報を打ちました。」

「あゝ……お急ぎになるのですね。で何時お立ちですか？　今日の何時頃？」

「今夜の七時です。」

「あゝ！　七時！　でお暇乞ひにいらしたのですね？」

「はあ、イリーナ・パウロウナ、お暇乞ひに參りました。」

イリーナは暫らく默つてゐた。

「お禮を申上げなくちやなりませんね、グリゴリー・ミハリッチ、此處においでになるのは大抵なことぢやなかつたでせう。」

「はあ、イリーナ・パウロウナ、難かしかつたです。」

「世の中は何でも大抵なことぢやありませんわ、グリゴリー・ミハリッチ、あなたは何うお考になります？」

「さうですとも、イリーナ・パウロウナ。」

イリーナはまた暫く默つてゐた。何だか瞑想してゐるらしかつた。

「でも親切にいらして下すつて有難うございました。妾はあなたが仰つしやつたやうに今直ぐ出來

るだけ早く結末をつけるやうに御決心なさいましたのを良いことだと思つてゐます……何うしてと申しますに、愚圖々々してゐますと……何うしてと申しますに……あなたが浮氣だと仰つしやつた妾でさへ、女優と仰つしやつた妾でさへ……たしかあなた左樣仰つしやいましたわねえ？……」

イリーナは急いで立上つて他の椅子に腰掛け、卓子の端に兩腕をのせかけて、うつむいた。

「どうしてと申しますに、妾あなたを愛してゐますから……」と彼女は握つた指の間から呟いた。

リトウイノフは誰かに胸を打たれたやうによろめいた。今度はイリーナが顏を隱さうとするやうに力なく顏を素向けて卓子の上にのせた。

「えゝ、愛してゐます……愛してゐます……あなたも御存知ですわ。」

「私が？　私がそれを知つてゐると仰つしやるのですか？」とリトウイノフが云つた。

「ね、お立ちにならなくちやならないことが最うお解りでせう。かうしてゐられないことが……あなたに取つても、妾に取つても、かうしてはゐられないのです。危險です、恐ろしいことです――左樣なら！」彼女は椅子から屹と立上つて云つた、「左樣なら！」

彼女は自分の居間の扉の方に二足三足歩いて行つて、後ろに手を差出してリトウイノフの手を探して握ろうとするやうに素早く動かした。けれどもリトウイノフは離れた處に、木の樣に突立つてゐた

……彼女はまた、「左様なら、妾をお忘れになつて下さいまし、」と云つて振向きもせずに姿を隱した。

リトウイノフは一人に殘されてもまだ我に歸ることが出來なかつた。暫くして氣が附いて女の居間の扉の傍に寄つてイリーナの名を一度、二度、三度呼んで見た……彼の手は早やハンドルに懸つて居た……其の時旅館の階段からよく響くラトミロフの聲が聞こえた。

リトウイノフは帽子を目深に冠つて階段に足を向けた。瀟洒たる風采をした將軍は瑞西生れの門番の部屋の前に立つて拙い獨逸語で明日一日貸馬車が雇ひ度いと掛合つてゐた。リトウイノフの姿を見るや否や、彼はまた帽子を不自然に高く持ち上げて、「今日は、」と云つたが、それには如何にも人を馬鹿にした樣子があつた。けれどもリトウイノフはそんなことには氣が附かなかつた。彼はラトミロフへの會釋もそこ〳〵に自分の宿の方に急いで、早や荷作りをしてある鞄の前に立つた。彼の頭には渦が卷いて、心臟は竪琴の絲のやうに震動する。何うしたらいゝのだらう？　また彼は斯うなることゝ覺悟してゐたのだらうか？

不思議な樣でも彼は斯うなることゝ覺悟はしてゐたのだ。それは彼を雷の樣に打ち、自分でも認める勇氣がない程だが、それでも彼は斯うなることゝ前から思つてゐたのだ。それに今では何が何やらさつぱり見分けがつかない。總てのものが混亂して自分の思索の絲を手探ることさへ出來ない。彼は

莫斯科の昔を思ひ出した。あの時も何んなに「それ」が突如として、嵐の樣に襲來したかを思ひ出した。彼は息も出來ない遣瀬ない心細い恍惚に心を押しつけられてゐた。彼にはイリーナの口から出た言葉が本當に彼女の言葉でないことは何うしても思ふことが出來なかつたのだ……然しそれなら？と云つて彼の決心を覆すわけにも行かなかつた。彼の決心は相變らず動かなかつた。錨を卸した樣にしつかりしてゐた。リトウイノフは自分の思索の絲を失してしまつた……さうだ。けれども彼は意志だけはまだ殘つてゐて、何んだか彼は彼に縋つてゐる他の人の樣な氣もした。彼は鈴を鳴らして給仕を呼び勘定書を持つて來ること丶、夕方の乘合馬車に座を取つて置くことを頼んで、何うしても後歸りの出來ぬやうに自分でした。「この爲に後で已れが死ぬるやうなことがあつても？」と、まんじりともしなかつた昨夜と同じ樣に云つた。彼はこの文句が非常に氣に入つてゐたのだ。「この爲に後で已が死ぬやうな事があつても！」とまた繰り返しながら部屋の中を彼方此方歩きまはつた時に思はず眼を閉じて息を止めた。その間にも始終イリーナの言葉は、彼の魂に喰ひ入つてパッと焰の樣に燃え上つた。「お前は二度戀をしたのか、」と彼は自分で考へた、「他の生命が一つお前の處に遺つて來た。お前はそれを自分の内に入れてやつた——お前はその毒を永久に逃れることは出來ないのだ。お前はその絆を永久に破ることは出來ないのだ。さうだ。だがそれは一體何だらう？　幸福か？……そんなことが

あり得るだらうか？　お前があの女を愛してゐる、それは解つてゐる……けれども……あの女がお前を愛してゐるだらうか……」

然し此處まで來ると彼はまた思索を打ち切らなければならなかつた。暗い闇夜の旅人が道を踏み迷ふのを恐れてひたすらに向ふに部く灯の光を見詰めて其れから一時も眼を放さぬと同じ樣に、リトウイノフは自分の注意を絶えず唯一の點、唯一つの的に集中した。自分の許嫁の處に着くこと、最つと確かに云へば（彼は彼女の事は思ふまいとしてゐた）ハイデルベルヒの旅館の一室に着くこと、これが彼の目の前に嚴然と立つて彼を導く光であつた。後で何うなるだらう、そんな事は知りもしなければ、知り度くもなかつた……唯知つてゐることは決して、二度と歸つては來ないと云ふことだけだつた。「たとひ死ぬる樣なことがあつても！」と十度も繰返して云つた。彼は時計を出して見た。

六時十五分だ！　まだ隨分待たなきやならぬ！　彼はまた部屋の内を彼方此方歩き廻つた。夕日は今や沈まうとして、木立の上の大空を眞紅に染め、其のほんのり明るい餘光を薄暗い部屋の窓に投げかけてゐる。ふとリトウイノフは後ろで扉が開いて直ぐまた靜かに締まる氣合を感じた……彼が振返つてみると扉の傍に眞つ黑い外套に包まれて一人の女が佇んでゐる……

「イリーナ、」と叫びながら彼は餘りの驚愕に自分と自分の手を握りしめた……女は顔を上げて男の胸

に縋りついた。

二時間の後には彼は自分の部屋の長椅子に腰かけてゐた。蓋を開けて空になつた荷物は部屋の隅に轉んでゐて、亂雜に取みだされた眞ん中の卓子の上には、今しがた彼が受取つたタチアーナの手紙が置いてあつた。彼女の手紙には伯母の病氣がすつかり全快したから、直ぐドレスデンを立つと云ふこと、若し差支が起らなかつたら翌日の十二時に二人ともバーデンに着くから停車場まで迎ひに來てくれと云ふことなどが書いてあつた。二人の爲の部屋はリトウイノフに依つて彼と同じ旅館に早や取つてあつた。

其夜彼はイリーナに手紙を送り、翌朝その返事を受取つた、それには斯う書いてあつた。「遲かれ早やかれ斯うなることゝ思つて居ました。妾は昨日申し上げた通りをまた申し上げます、妾の生命はあなたのものですから、何うとでもなさつて下さいまし。妾はあなたの自由を束縛したくはありませんが、若しお望でしたら何もかも打棄てゝ世界の果てまでもあなたに連いて行きます。申すまでもなく明日また逢ひましよう。——あなたのイリーナより。」

最後の二字は思ひ切つて大きく大膽に書いてあつた。

十八

八月十八日の正午に停車場のプラットホームに集まつた人の中にはリトウイノフも交つてゐた。彼は先ほどイリーナを見た。彼女は無蓋の馬車に乘つて良夫と最一人年を取つた紳士と一緒だつた。彼女の方でもリトウイノフに眼を呉れたが、彼は何だか曖昧な情緒が彼女の顏に閃めくのを認めた。けれども彼女は直ぐ日傘で自分の顏を隱してしまつた。

昨日から昨日から不思議な變化が彼の上に起こつた——彼の全體の樣子にも、動作にも、顏の表情にも變化が起こつて自分でも遠つた人になつた樣な氣がした。自信も心の平和も消えてしまつた。自分に對する尊敬の念も、昔の精神的な考へも無くなつてしまつた。總てのものが最近の消し難い印象のために打消されてしまつて、或る强い、甘い、——そして質の惡い、今まで味はつたことのない感じが目覺めてゐた。或る神秘な客が心の奥の殿堂に這入つて來て、新しい家の持主の樣に沈默したまゝ莊嚴に其の中に横たはつた樣な氣もした。最早やリトウイノフは恥じはしない。恐怖を感ずるだけだつた。同時に彼は堪らない苦しさに襲はれた。捕虜になつた人や負けた人は此の復雜な壓迫の感じを知つてゐるだらう。盜人が初めて物を盜んだ時にも、これと同じ樣な感じを味はうであらう。リトウ

イノフは打負かされたのだ。不意に打負かされたのだ……して彼の正直な心は何うなつたであらう？

汽車は二三分遲れた。リトウイノフの心配は身を焦がす樣な懊惱になつた。彼は一處に凝としてゐられないで群集の中を彼方に行つたり此方に來たりした。「最う二十四時間を延ばしてくれるなら、」と彼は思つた。……初めてタチアーナを見ること、初めてタチアーナを見ること……彼にはこれが怖ろしくして堪らなかつた……彼にはこれが今直ぐ遣つて來るのだ……そしてこの後も！　この後も……何構ふものか！……最う彼は決心もしなかつた。最う自分で自分の問ひに答へることも出來なかつた。昨日自分で云つた言葉が時々痛い頭を掠めた……彼はかうしてタチアーナに逢はうとしてゐる……

長い汽笛が聞こえたかと思ふと轟々たる響を立てゝ汽車が靜かに線路を曲つて滑り込んだ。人々は急いで其の方に斷け込んだ。リトウイノフも、一緒に宣告を受けた人の樣に足を曳づつた。いろ〳〵の顏や帽子が客車から現れた。とある窓から白いハンケチがきらめいた……カビトリーナ・マルコウナが彼に合圖をしてゐるのだ……最うお終ひだ。彼女はリトウイノフを見つけ、彼も彼女を認めた。汽車は凝と止まつた。リトウイノフは汽車の扉に走り寄つてそれを開けた。タチアーナは伯母の傍に立つて欣然と頗笑みながら手を差し伸べた。

彼は二人を助けて、降ろして遣り、短かい言葉で纏りのない挨拶もそこ〳〵に大急ぎで二人の切符

や、旅行鞄や、包みを取つて、赤帽を呼びに走つたり馬車をん呼だりした。周圍は人の群で混雜してゐた。彼は人の群とその混雜と矢釜しさを却つて喜んだ。タチアーナは少し隅に寄つてまだにこ〳〵頬笑みながら、急がしさうに奔走する彼を靜かに待つてゐた。カピトリーナ・マルコウナは凝としてゐられなかつた。まだ自分がバーデンに着いたことが信じられないのだ。

伯母は唐突に叫んだ、「傘は？　タチアーナ、傘は何うして？」二本の傘を自分の小脇にかゝへてゐることには些つとも氣が附かないのだ。それから伯母はハイデルベルヒからバーデンまで一緒に乘り合はした途連れの女に大きい聲で長々と暇をつげた。この女こそ馴染のスハンチコフ夫人に他ならぬので、彼女はグバリョーフに逢ひにハイデルベルヒまで行つていろ〳〵な「教訓」を受けて歸るところであつた。カピトリーナ・マルコウナは妙な緣を取つた外套を着て、菌形の圓い旅行帽を冠つた下からふさ〳〵した短かい白髮を見せてゐる。背の低い慶せたこの老婦人は旅行の爲にやゝ顏を赧くして鋭どい突き立つやうな聲で、頻りに露西亞語を饒舌つてゐた…彼女はすぐ、人々の注意の的となつた。

軈てリトウイノフは彼女とタチアーナを馬車に乘せて自分もそれに向合つて座つた。馬が走りだした。それからいろ〳〵なことを問ふたり問はれたり、あらためてまた握手したり、微笑や挨拶を交し

たり…これでリトウイノフも、ほつとした。最初の瞬間は先づこれで滿足に過ぎてくれたわけだ。タチアーナは彼の何處にも、變つたところを認めず當惑してはゐなかつたらしい。彼女は安心して、あどけなく微笑したり、可愛らしく顏を赧らめたり、人の好さゝうな笑ひを漏らしたりしてゐた。彼は今までは見ようとしても何うしても眼が云ふことを聞かなかつたが、此の時窃と盗むやうにではなく、まともに凝と彼女を見た。彼の心臟が烈しく動悸が打つた。正直な、あどけない女の何の屈託もない顏は彼の心を犇々と責めさいなんだ。彼は思つた、「とう〳〵來たのだね、可愛さうな女よ、長い〳〵間私が待ち焦れてゐたお前、私が生涯一緒に暮らさうと思つてゐたお前は、私を信じてゐる…だのに…だのに…私は…」リトウイノフの心は沈んだ。けれどもカピトリーナ・マルコウナは彼に瞑想の時間は與へないで頻りに質問の矢を浴せかけた。

「あの柱の建物はなあに？　賭博をする處は何處にあるの？　向ふから來るあの人は誰？　タチアーナ、タチアーナ、まああの下袴を御覽よ！　まああれは誰なんだらう？　あの人たちは巴里から此處に來た人だよ。おや！　あの帽子！　此處では巴里で買へるものは大抵買へますか？　ですけど隨分高いでせうねえ？　さう〳〵妾それは立派な賢い夫人と知合ひになつたのですよ！　あなたも知つてるでせう、グリゴリー・ミハリツチ、その人が或る是れもまた大變賢い露西亞人の家であなたに逢つ